



072265-000-9

19-617

紹織之燈 前編

村田 克己 / 著

M33

CEF-0172

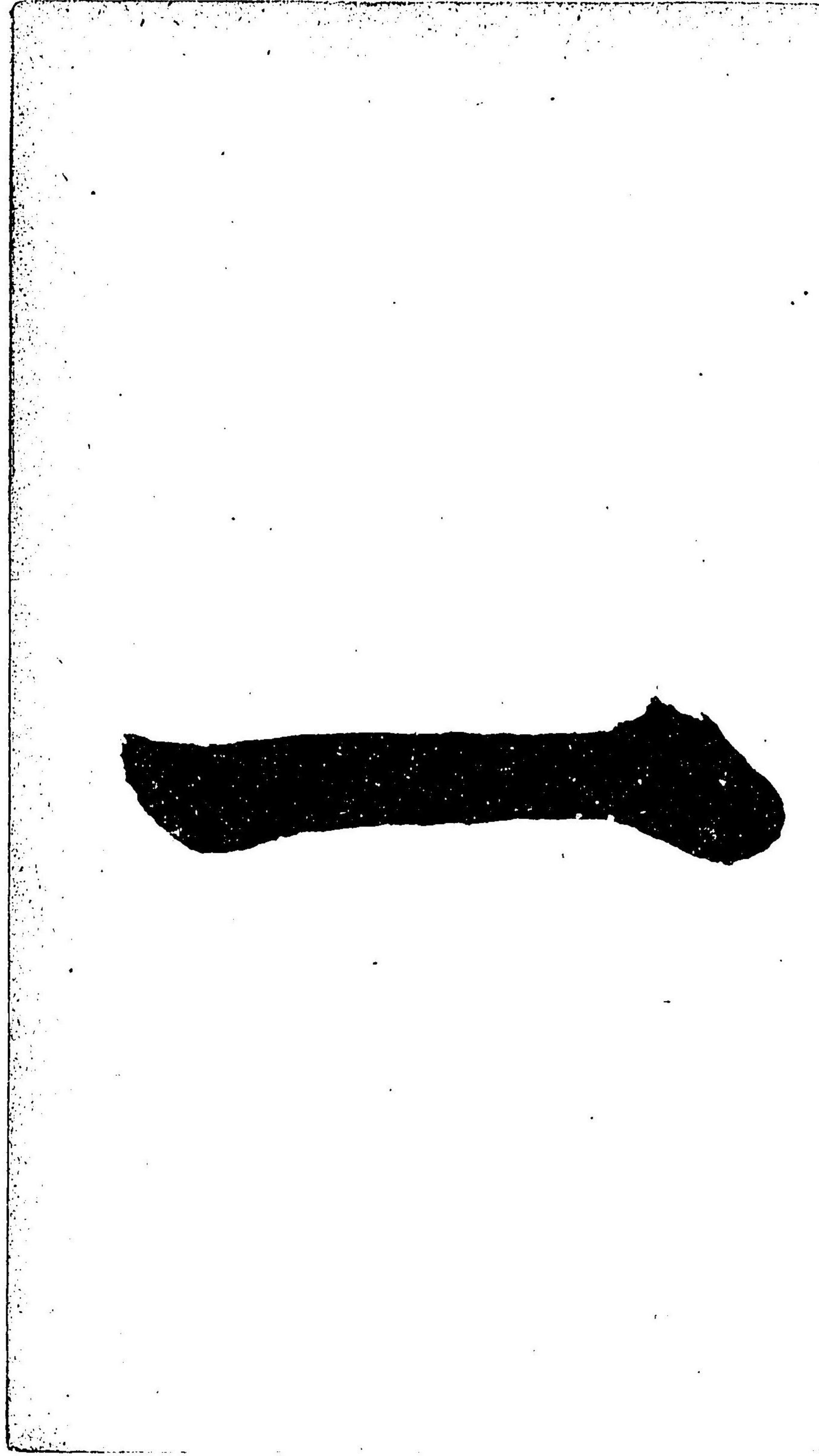




逸



面



明治卅三年
三月

春峰



村田君の紹織の燈發行を

いはひて

星野胤國

からころも

糸のみたれも

をさまりて

あやにかしこき

御代のはるかな

紹織之燈を祝て

松島柴山

たくひなき

ふみを燈に

よの人の

ろ織のわさを

進めてしかな

夫れ社會は日に月に愈々進歩し人智益々啓くるに隨ひ
流行の變移頗る頻繁に嗜好愈高尚に趣くは是れ自然の
理にして被服の如き亦此範を越へざるなり然り而して
從來絹織物の如きも其需用は中流以上の社會に限れる
ものゝ如き觀ありし用途も亦狭少なりしが近來未曾有
の流行を來し貴賤を問はず老若に關はず夏季用衣服
の料として最も賞用せられ其需用頗る増加し用途亦擴
多せり然るに之が製織地は僅に上州京都其他一二ヶ所
に過ぎず是れ絹織は其組織に於て將た原料の製法に於
て普通織物と異なるを以て製織容易ならずとなし其製

織に従事する者の尠なきに原由するならん乎而して近時紡織に關する著書の出版一二にして足らずと雖とも組織物の解説に至りては單に其組織の一般を示すに止まりて詳細精密に説示せるものなきを以て是か研究の資に乏しかりしは詢に遺憾の至りなり頃日村田克巳氏此欠典を補はんとし、組織の燈なる一書を編著し余に示さる就て閱するに學理に偏せず専ら實用を旨とし全氏が曾て上州に於て研究し爾後數年來組織専門の工場を設け貳拾餘名の織工を使役し實地經驗せられたる結果を簡明懇切に説示しあるを以て初學の徒並に斯業研究

者を裨益する蓋し尠少にあらざるべきを信じ聊か一言を書し以て序となす

明治三十三年猛夏

岡野足吉

緒言

一本書發刊の要旨は紹織物の擴張にありし故に語句文章を極平易にしたるを以て婦女子と雖とも一讀容易に實驗するを得へし

一本書標本中には意匠高雅幽致なるもの多くあるも生絹のまゝ貼付し且つ小形なるか故に其形の判然せざるものあるや難計も右は全く前述の爲なるか故に反物となし練上げ染付けし曉には實に言ふへからざる雅風の物のみ多くあり又右組織を染色して織成せは尙ほ一層の風味あらん讀者幸ひに試織あらんことを

一標本中の名稱ハ各地同品異名の物多し故に余は地方の俗稱を附するのみ

一本編には四枚六枚の綜統にして機械をも用ゐず普通踏木のみにて容易に織り得る物のみを貼付せしむ尙ほ一步を進め紋織其他高尙

なる物猶ほ多きも發刊期限之れか製織を許さす止むを得ず之を第
二編に譲ることとせり

明治三十三年四月

編者識

組織の燈目次

第一章 組織の概念

織物の概念

織物の種類

組織の意義

組織の組織

第二章 原料の準備

経緯の説明

糊の製法及付方

第三章 綜統の装置

綜統装置に付ての要点

綜統の掛方并綜統用絹糸製法及ひ練方

笈の説明
機織の構造
第四章 原本并に解説

第一章 紹織ノ概念

織物の定義

凡て織物と稱するは機具によりて織物原料(纖維)を經緯なる二原素の狀態に於て組織せる織布を総稱して織物と云ふ

織物の種類

織物は其布面の狀態によりて之れを五種に分類す

- イ 普通織物
- ロ 縮緬織物
- ハ 起毛織物
- ニ 添毛織物
- ホ 紹織物

紹織物の概念を得んとすれば勢ひ地種(種)の織物と區別せざるべからず

是れ本章に織物の種類を挙げたる所以なり然れども本書は只紹織物の記明を主とせるものなれば今は他種の織物を詳しく述ふる事を止めて其概要を説けは左の如し

普通織物 平織綾織縹子織絞織に論なく布面経緯の組織か其織製せる時の儘なるもの、總稱なり

縮緬織物 布面収縮して畝又は縐をなせるものにして其組織は前記普通織物と異なる所なし

起毛織物 此織物は亦た組織に於て前二者と異なる所なれども織製せる后経緯の繊維を掻き出して毛を生せしめたる羅紗フランネルの如き物を云ふ

添毛織物 特に毛となるへき糸を織り込み或は之を切斷して以て毛となせる天鵝絨氈通の類是なり

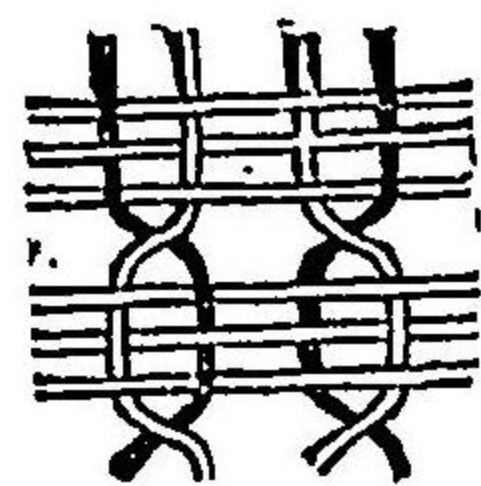
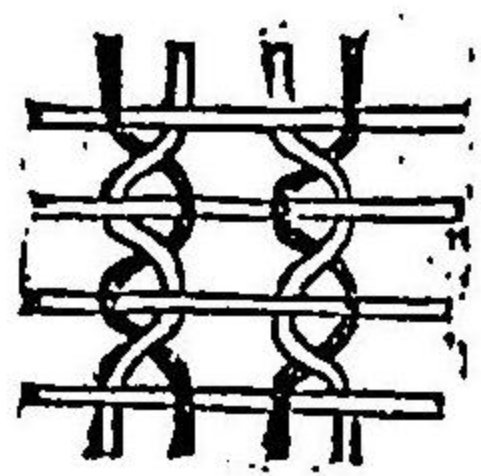
紹織物 是れ本書に説かんとする所にして其詳細は次きの如し

紹織之意義

紹織は又緞子織或は紗織とも云ふ搦織と稱する方寧ろ適當ならん然れども今は俗間の唱ひ方に從て紹織を廣義に解釋して此種の織物の總稱とせり紹又は紗の字義は著者の淺學なる遂に之れを説明する能はされ既に緞子と云ひ又搦と云へば何人と雖ども容易に此種織物の觀念を得るに易々たらん乃ち紹織とは經糸の一部は經糸一部に搦まりたる織物にして外觀上布面に孔を穿ちたる如く見ゆ醫師の目の荒き晒木綿をガ―ゼと稱するは獨逸語の轉訛にして紹織の意義を外觀上の相似に由りて唱ふる所なり故に紹織は前陳の諸種の織物例へは羽二重甲斐絹綿子―ル御召縮緬綿レボ紋天鵝絨―ルテン等とは理論上異なるのみならず又一見其趣を異にす

る特種の織物にして其組織を説明すれば容易に理解することを得
へし

紹織の組織



第二章 原料の準備

経緯の説明

従来紹織物の経緯は凡て上州大間々山中製平糸を以て最上となし
使用を來りしが近來各地該織物の製法漸々増加するに従ひ原料供
給に不足を來し其需用を充す能はざるか爲め昨今尤も使用しある

物は東北地方の製糸を以て最多とす必竟するに東北地方製糸は其
光澤の善きとふしのなきを以てなり經糸は「デニール」三十位の物三
本を合せて一本となしたるものを篋一目に二本つゝ通入し俗に六
つ入緯糸は「デニール」十四五位の物十四五本を引揃へて用ゆるなり
但し製品の目方の輕重に依り多少の相違あるものなり右を清水に
て能く濡したるまゝ織込みなり若し少しにても乾きたる物など織
込む時は絹味甚だ悪くなるか故に乾かざる様尤も注意を要す其織
込みの歩合は鯨一寸に付き十六越乃至十八越位を適度とす著者の
目下製造しつゝある物は經糸「デニール」二十一の物を三本合せ乃ち
六つ入れにて一疋の經糸の重量百廿匁位なり一疋は鯨尺八丈二尺
緯糸は「デニール」十七位の物十二本位引揃ひし物を織込みつゝある
なり然して其織上重量は三百四十匁内外に出來得るものとす

糊製造法并に附方

從來絹織物の賣買法は凡て生絹のまゝに施行し來りしか爲め成へく外見の善きを貴ぶを以て糊も最上等の物を使用するを要す其製法は最上等海羅^カ百匁に付き最上晒蠟百匁の割合に混合し之を清水にて能く煮て后ちに片栗粉を二十匁乃至卅匁程を温湯にて溶し之れを注入するなり又たしらしめ油或はオリブ油少許を入るゝもよし其附け方は糊機を稱するものを用ゆ而して糊機なる物は尤も簡單に製造し得るものにして内巾四寸位の長さの番口なき單に輪狀の物なりとす此糊機に經糸を通入するには篋一羽に二本つゝを輪狀の片方へ通し置くものとす故に其糸數は經糸の四分の一にて足れりとす此の糊機の作用は只に經糸を分割するのみに用ゆるものなり乃ち本羽二重の糊付け方法と同一なるものとす

機臺は成るへく長き物を善しとす何となれば糊付けに大ひに手を省き又は織るにも非常の好都合なればなり著者目下使用しある物は悉皆三間長さのものなり

第三章 綜統の裝置

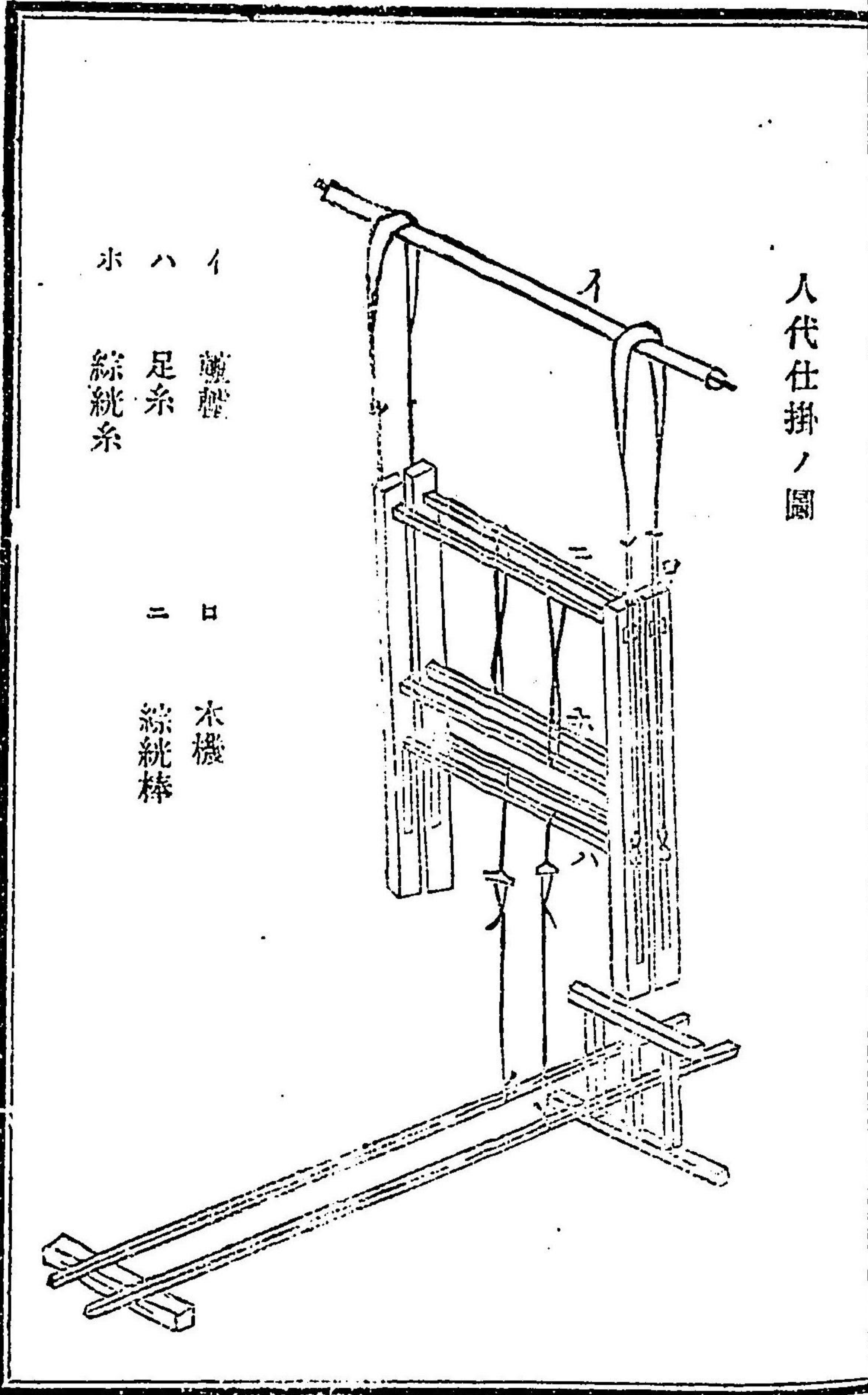
綜統裝置に付きての要點

機臺に綜統を裝置するに付きての要點は千卷の midpoint より「鯨尺」八寸前に振機を整置し其より五寸程前に幅機を整置し又た夫れより二寸程前に地機を整置すへし而して振機には重錘^{おもり}を要す此重錘の重さは織工の熟不熟にも大に關係を有するとも先づ百七八十匁位の物を極適當とす其重錘は石又は鐵棒にて可とす而して振機は招木の midpoint に結ひ付くるなり

此重錘は尤も必要の物なるか故に仕掛け後に其工合を計り仕付く

るを可とす
 緒巻は成るべく太き物を可とす如何となれば一疋八丈の長尺故に
 餘り細き物にては半分以上織り上げたる后ちに緒巻が高くなるが
 故に甚だ工合悪しくなるものとす著者目下使用し居る處の緒巻き
 の圓さは鯨尺にて周圍一尺四寸なりとす

人代仕掛ノ圖



イ 踵盤
 ハ 足糸
 ホ 綜統系
 ニ 綜統棒
 ロ 木機

綜統の掛方并綜統用絹糸製法及ヒ練方

紹織に要する綜統に單一綜統と無雙綜統との二種あり單一綜統は平紹綾紹等を織るに用へ無雙綜統は市松紹及花菱紹等の如き紋紹類に用ゆるなり其單一綜統の糸数は普通綜統の糸数の二倍例之は十五算なれば三十算分乃ち壹枚の綜統に糸數六百本を掛くるなり如何となれば一本の經糸を二枚の綜統に通入するが故に一本の經糸に二本の綜統を要すればなり振機綜統も同一なり又た紹の耳の整理は外見上大切なる者なるが故に耳巾は普通織物より多く要するなり乃ち片耳十羽乃至十二羽つゝを要す而して機仕掛は第一第二綜統は幅機故に弓棚仕掛け第三第四綜統は地機故に轆轤仕掛けなり

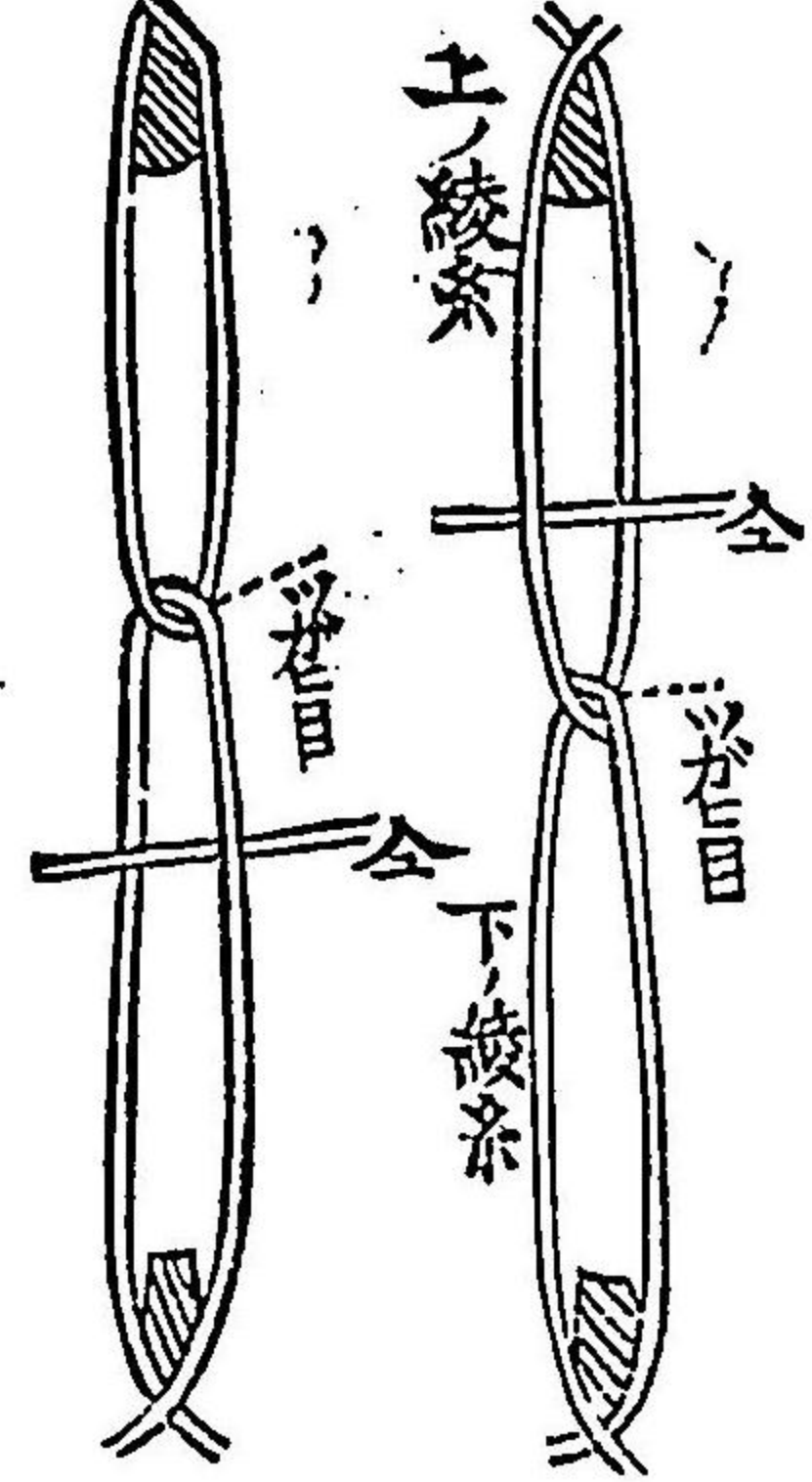
無雙綜統の糸數は普通從來使用し來りし物と同一數にて足れり如

何となれば一本の經糸を一枚の綜統に通入するが故なり仕掛は人代仕掛にして振機は單一綜統に用ゆるものと同一なり單一綜統に地機と幅機とあり地機は人代掛なるが故に之れに要する機絲は廿四番カタン糸を最良とす幅機は弓棚仕掛なるが故に其機絲は絹糸を要すカタン糸にても差支なきも經濟上先づ絹糸を良とす著者の使用しつゝある幅機は絹糸デニール十八九位の物を二十本合せ撚りたる物を用ひ地機はカタン糸廿四番を用へ居るなり多年經驗上右二種は最も適當と信す而して内巾六寸の物適當なりとす振機に於りては是非絹絲にあらざれば到底使用し兼ねるなり如何となれば經糸は振機に一ねぢりねぢりて通入しあるか故なり此振機の機糸は最も注意を要する者にして此機糸の撚方及ヒ練り方にて一枚の振機にて二三疋も織れば切れる様の事もあり尤も工

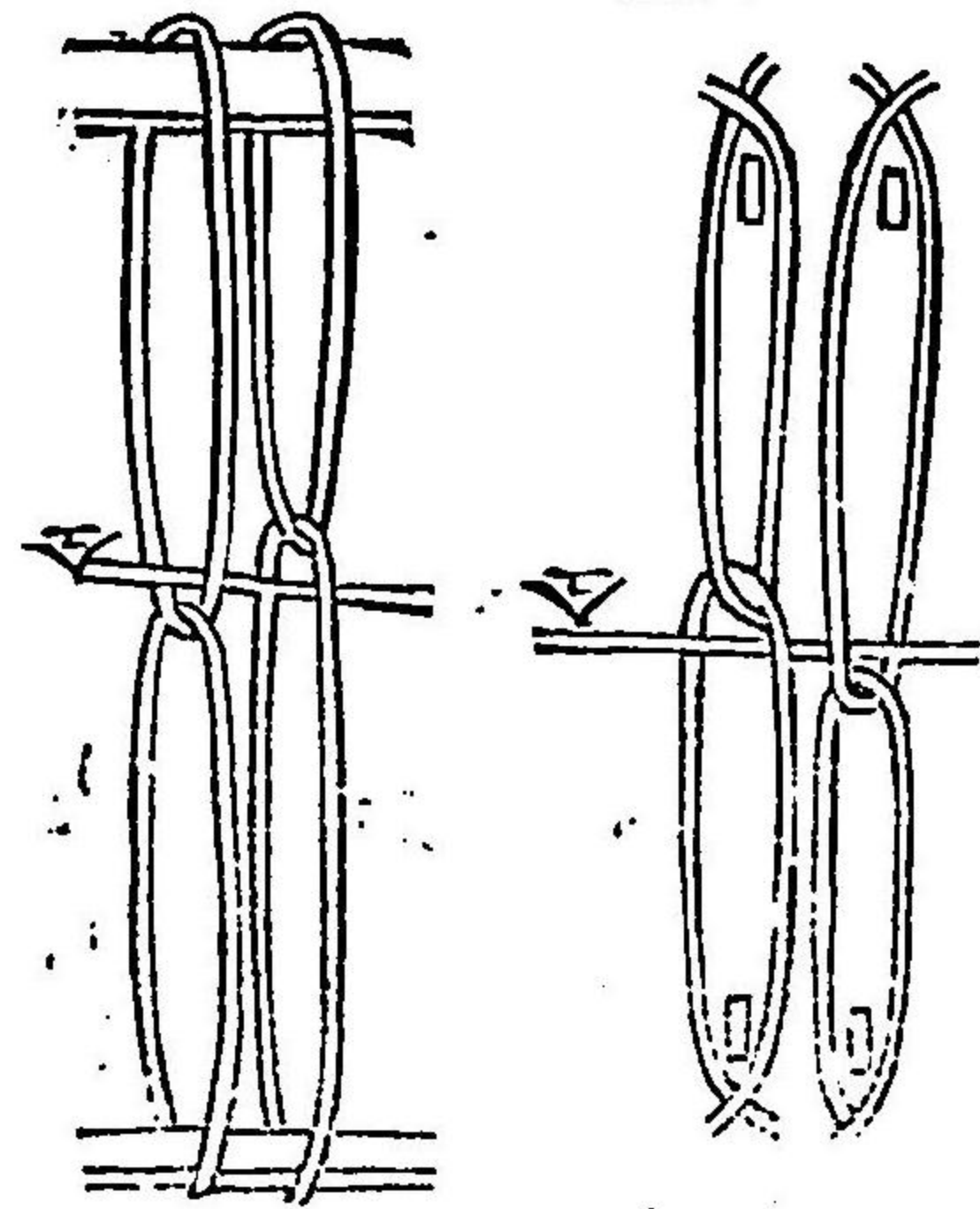
女の熟不熟にもあれを先つ一枚の振機にて一疋八丈物十五疋位織るを最上とす著者の女工は大底一枚の振機にて十三四疋は常に織り居るなり

振機糸は最上等生糸デニール十八位の物を九本位合せ之を成へく下撚を強く掛け上撚も相應に掛け十二間位の場所にて撚るとせば二間位のツマリにて善しとす尤も駒撚なり其の練り方は石鹼にても差支なきも著者多年の實驗上わらあくねりを適當と信す乃ち石振機糸百匁に付き藁二百匁を焚き直ちに適當の水に入れ之れを蒸又たは麻布にてこま之れを沸し極沸騰したる後ち右糸をよく濕し之れを入れ二時間練りし后ちに清水にて洗ふべし此れ著者の經驗上最も好果を奏したる方法なりとす而して其振機は前述の如く甚だ弱きものなるか故に其掛方は上番

圖の統綜一單



圖の統綜雙無

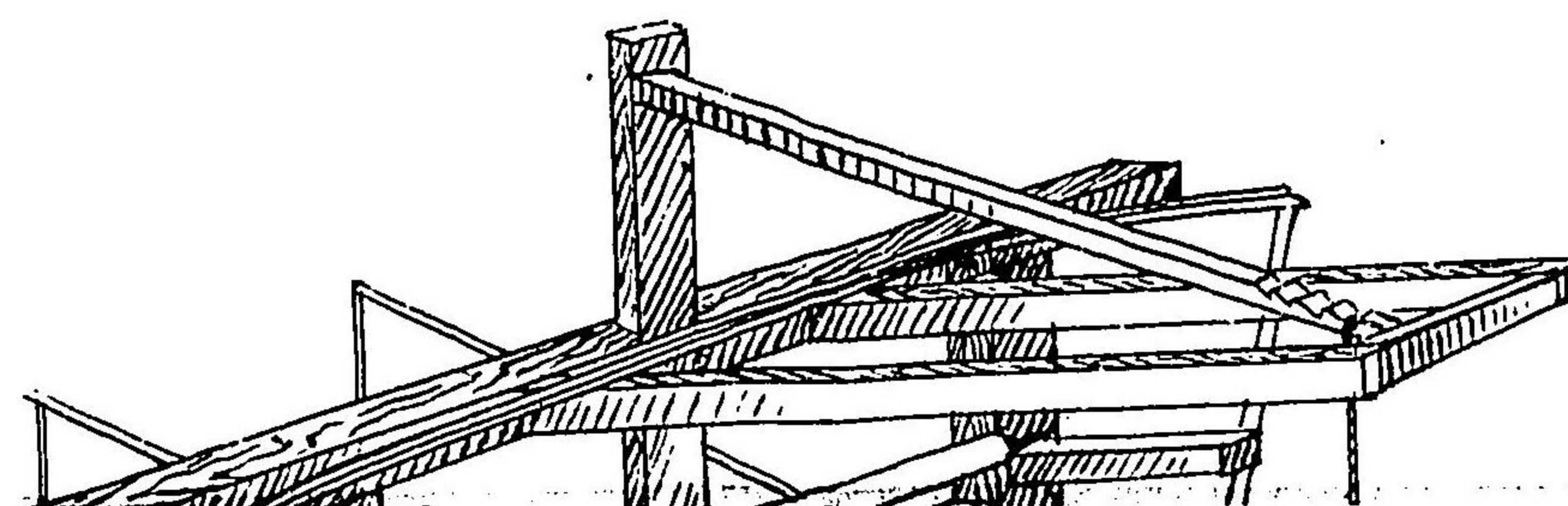


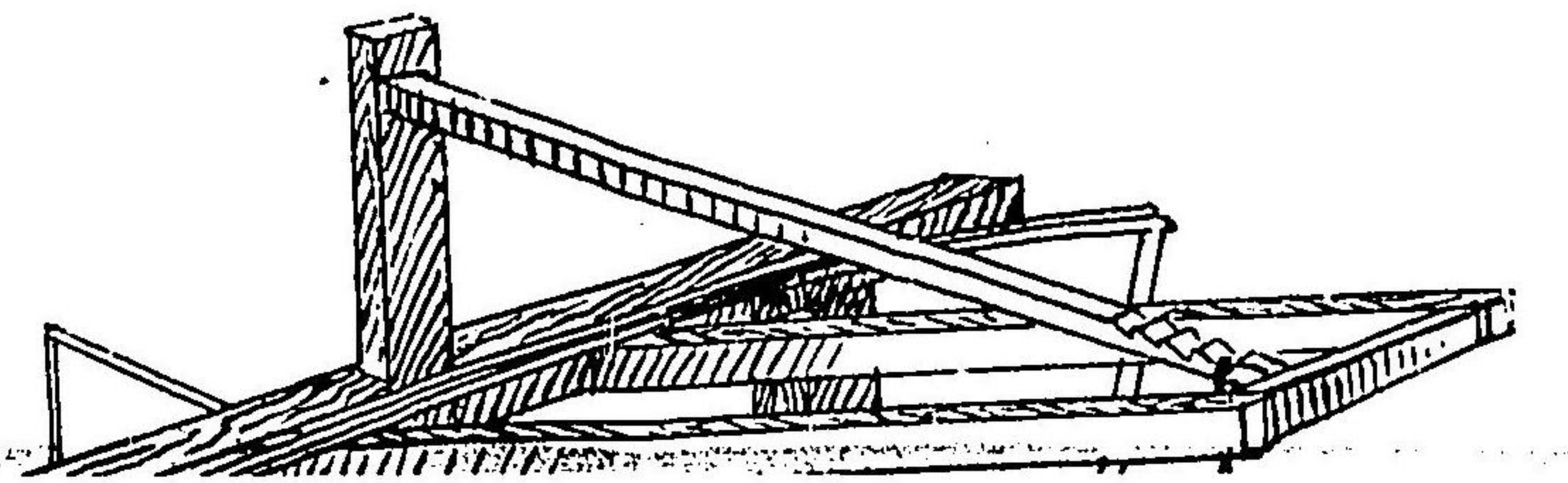
口丈けは綜統棒と直に付けず機草の如き薄き小板に張り付て掛くるへし其織るに當り一日一回位つゞ天地を替ふべし下番口は卅匁位の八角棒を最も善しとす上番口の寸法は鯨尺にて六寸下番口は二寸五分を適度となす下番口は不必要なるか故につまり極細カタン糸にても差支なし可成は絹糸を良とす

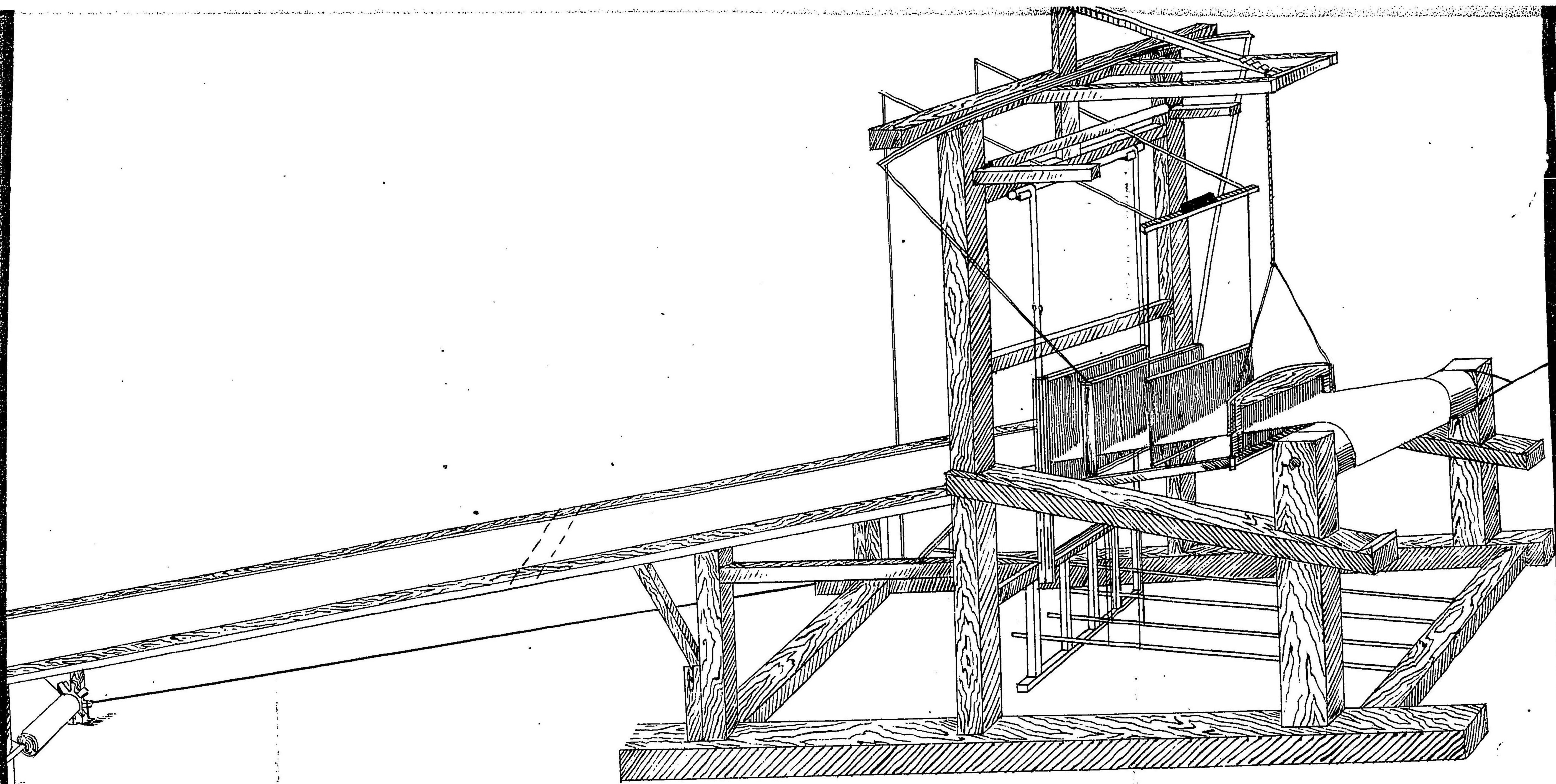
箴の説明

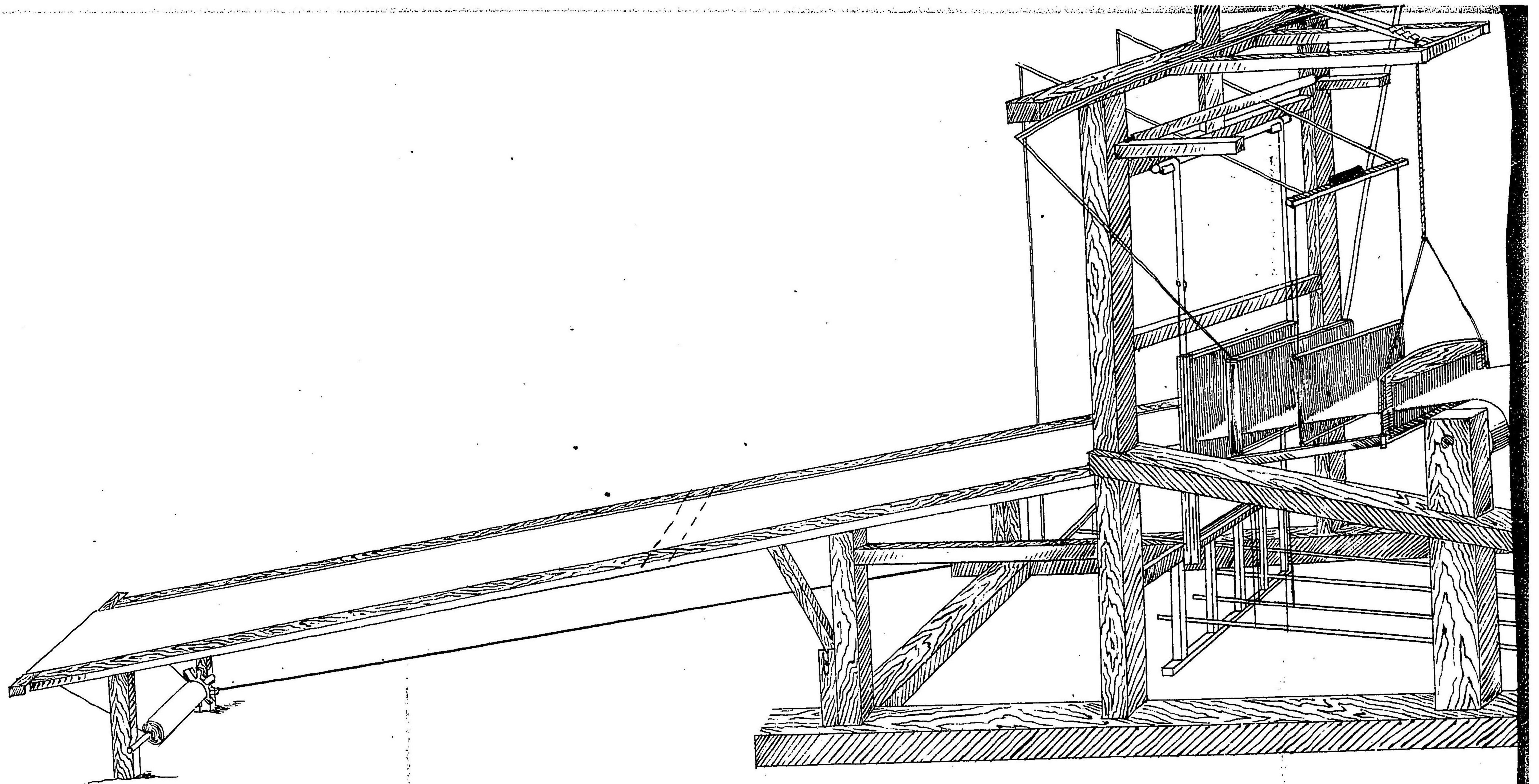
箴は算數十五算外に耳羽片耳十二羽つゝ乃ち地羽六百羽外に耳羽二十四羽とす巾は總巾鯨尺八分を以て適當とす而して紹織物は普通織物と大に其趣きを異にしあるが故に織巾にも非常の「ツマリ」を來すを以て耳羽の破損甚だし故に耳羽は地羽の二倍以上厚く作るを要す故に一定の幅を揃へんか爲に普通織物より多く機張こゑの數を要す先つ六本乃至八本位を適度とす而して其長さは箴巾より兩耳丈け短きを要す乃ち箴總幅一尺八分あるとして片耳二分五厘とせは兩方に於て五分の短を生ず故に機張の長さは一尺三分にて宜しき事なり可成強き物を用ゆるを可とす

機織の構造









綜 統 の 圖

記 號

- (S) は經糸の一部經糸の一部に揃まりたる印
- (V) は經糸を單一綜統の下口に通入せる印
- (^) は經糸を單一綜統の上口に通入せる印
- (○) は經糸を無雙綜統に通入せる印
- (X) は綜統に踏木を結付けし印
- (●) は踏木のふみ順序

踏木の圖

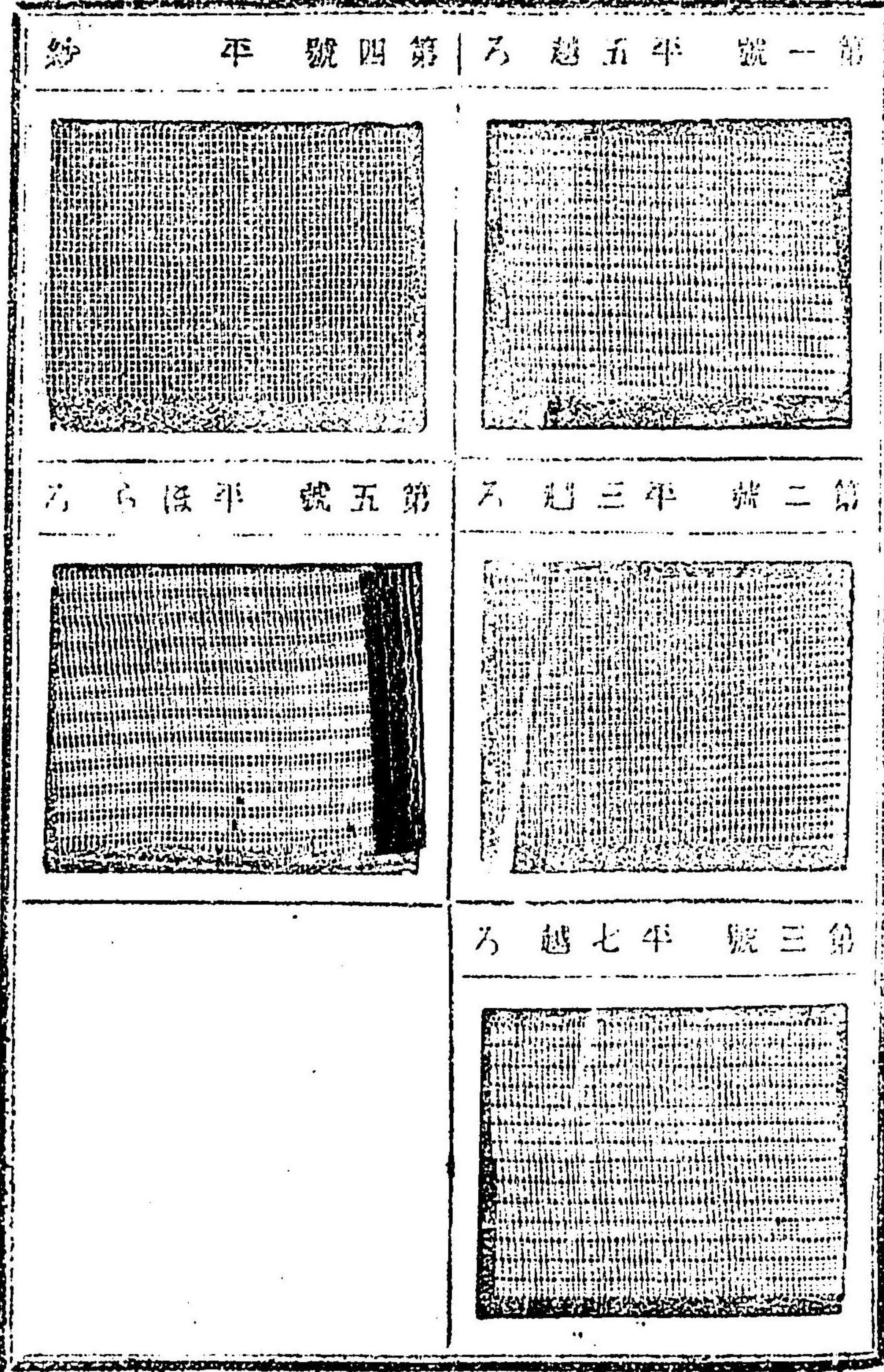
書中綜統と機との二種あるも右は俗稱上便利の爲め二種にせしめ
右二種とも綜統のことを云ふ

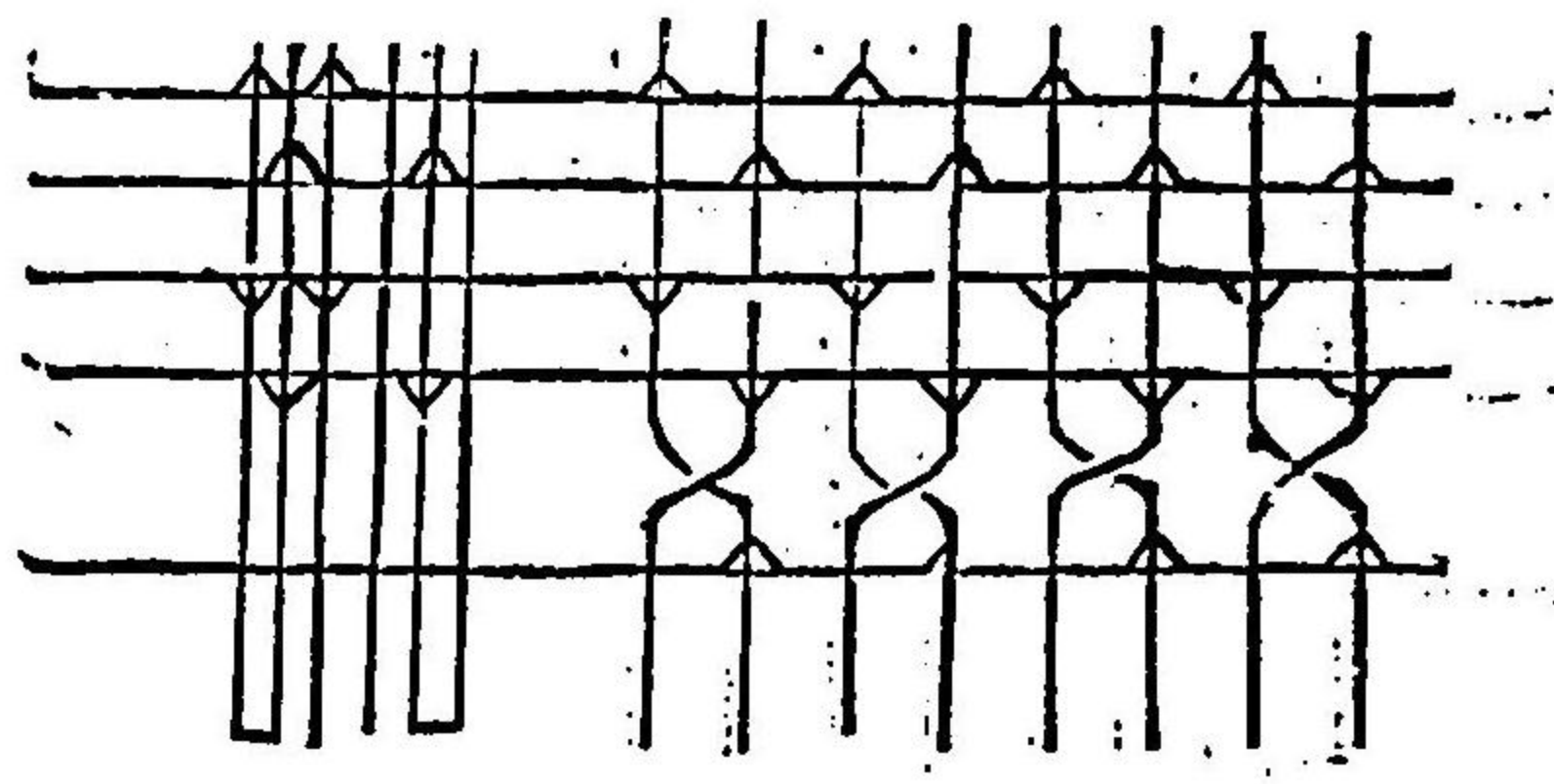
第四章 標本井に説明

第一號 平三越組織織法

左圖の如く單一綜統四枚振機一枚にて經糸通入法は第一經を第一綜統の下番口と第三綜統の上番口に通入し第二經を第二綜統の下番口と第四綜統の上番口に通入するなり而して振機へ通入するには第二經を第一經の下方を通して振機の上番口に通入すへし、耳糸は普通織物とは大に相違し一種特別の通入法なり第一耳糸を振機の上番口のみ通し第二耳糸を第一綜統の下番口と第三綜統の上番口に通し第三耳糸を振機に通入す可し右三本にて篋羽一目となる次に第四耳糸を第二綜統の下番口と第四綜統の上番口に第五耳糸を第一綜統の下番口と第三綜統の上番口に第六耳糸を第二綜統の下番口と第四綜統の上番口に通入すへし右三本にて篋一羽なり以下之れに倣ふ

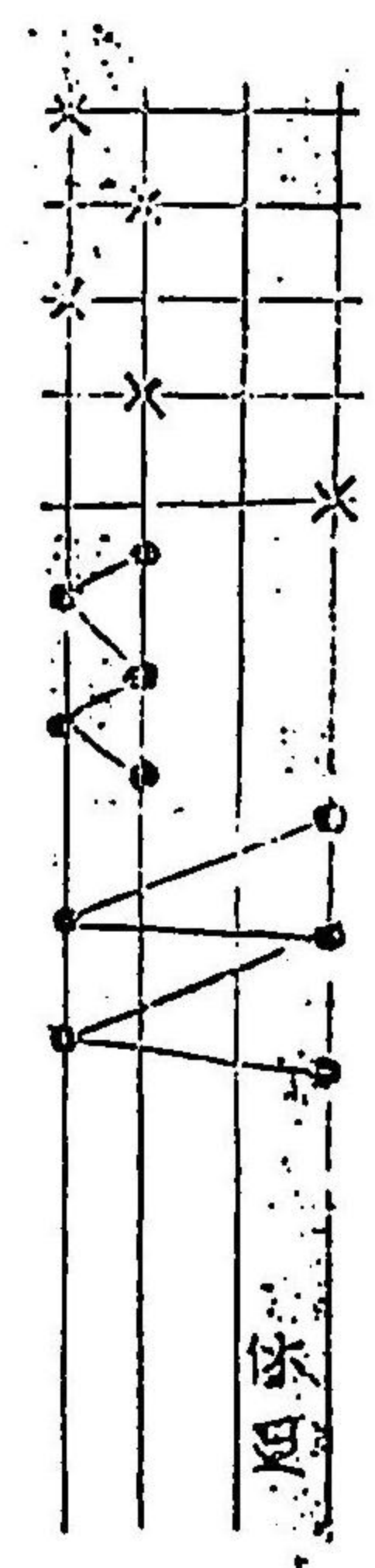
右通入法俗稱に「スー・スー」「二二二」と云ふ





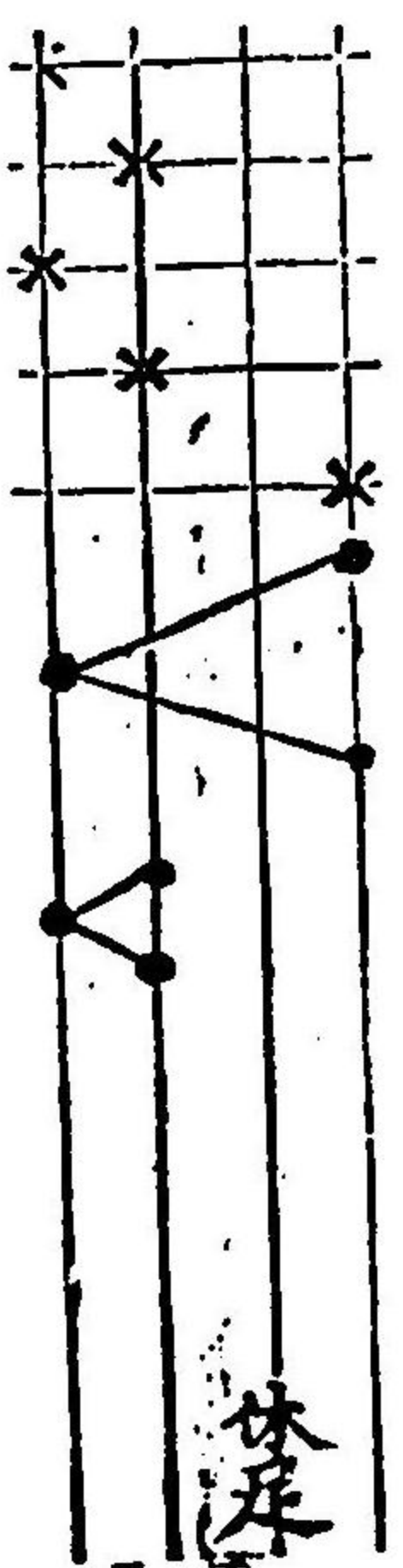
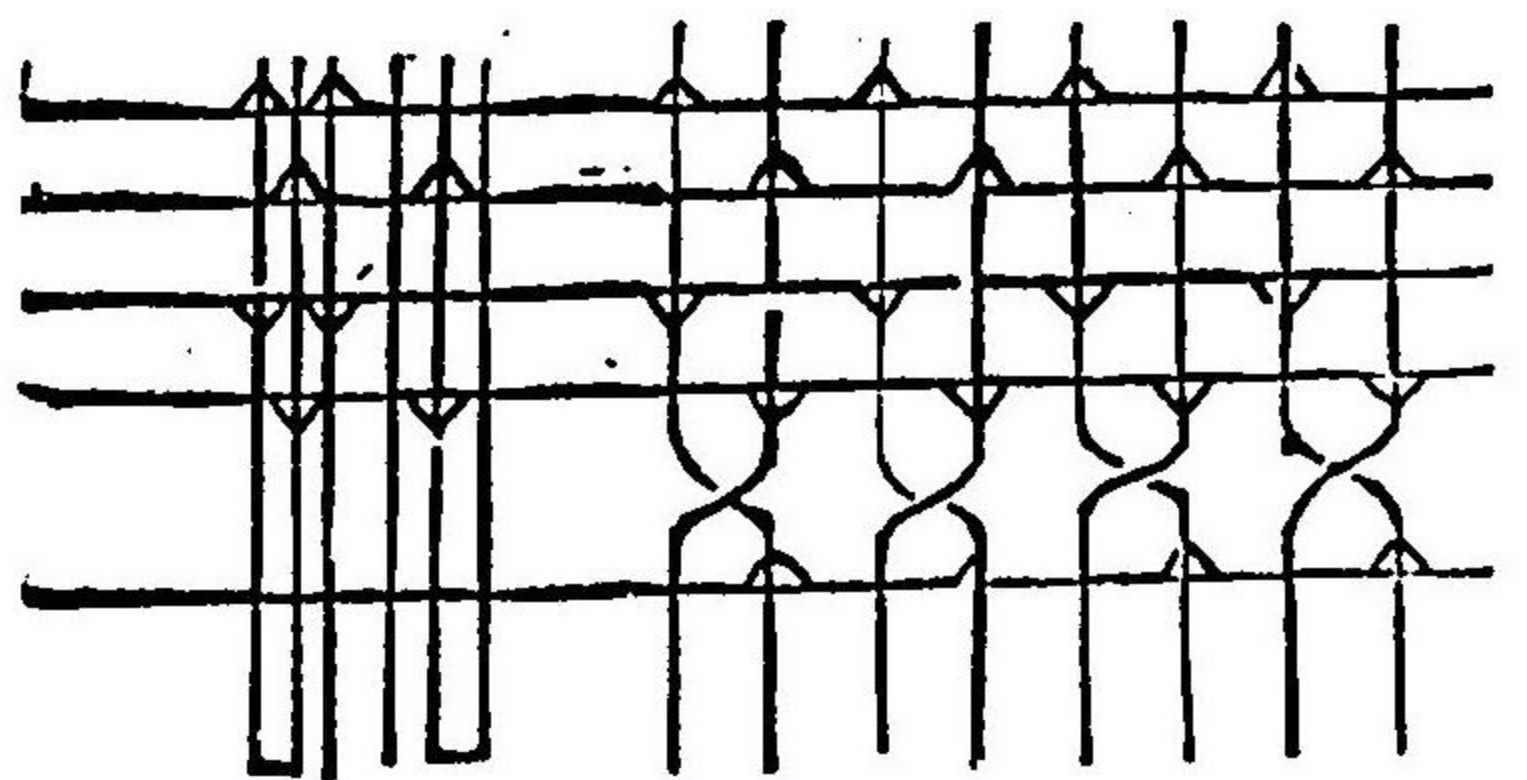
踏木付け方及ふみ様

綜統に踏木を付くるには圖の如く四本にして第一踏木に振機のみ結び第二踏木は休み足として第三踏木に第一綜統と第三綜統とを結び付け第四踏木に第二綜統と第四綜統とを結び付くるなり而して踏み様は最初に左足にて第三第四の踏木を一三四五と五回踏み第六回目に第一踏木をふみ次に左足にて第四踏木をふみなり休み足とは何の働きをもなさず只左足を要する時に右足のふみ臺として置くのみ



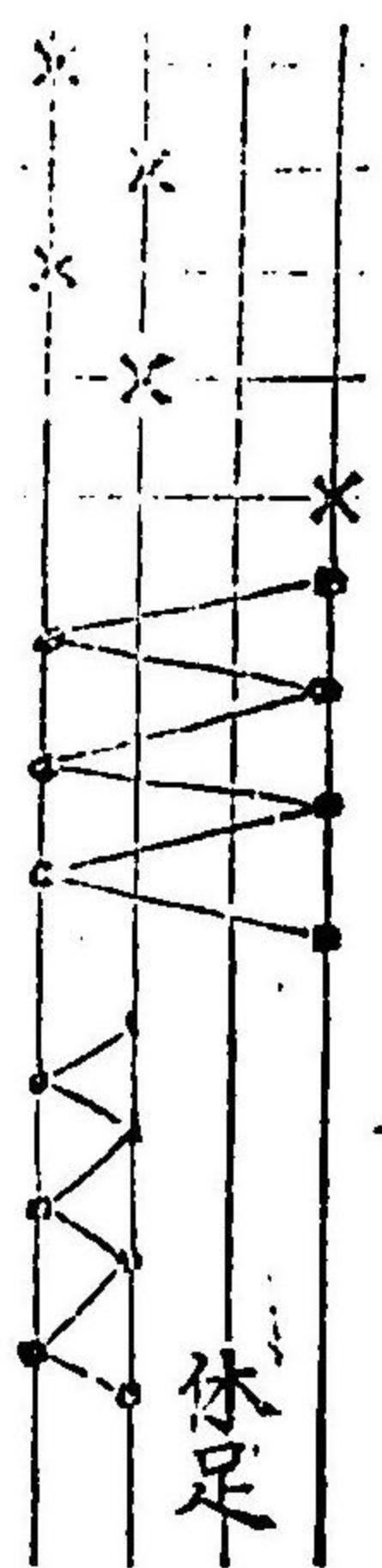
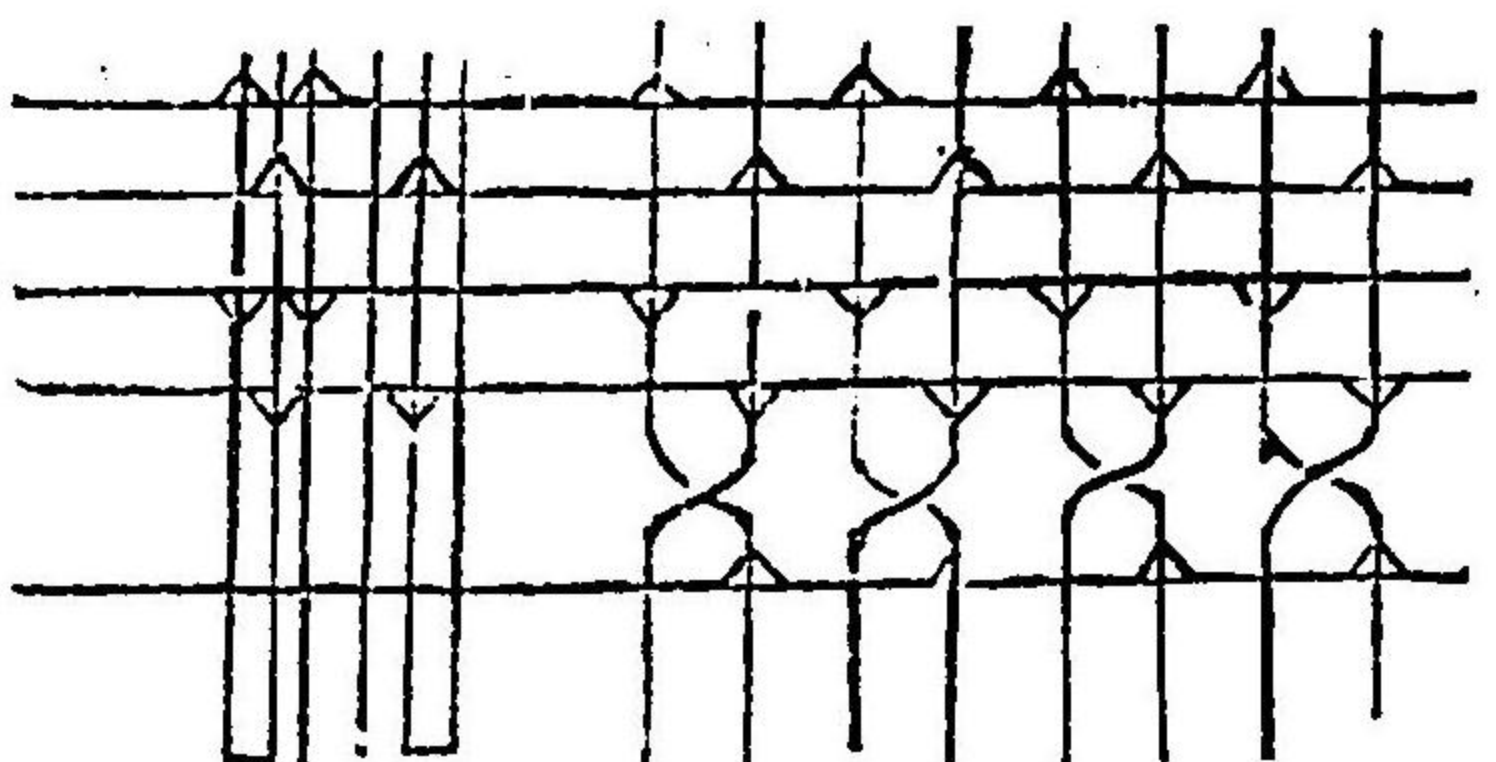
第二號 平三越組組織法

上圖の如く其組織前法と同一なり唯踏木の踏み様に少しの相違あるのみ即ち左に



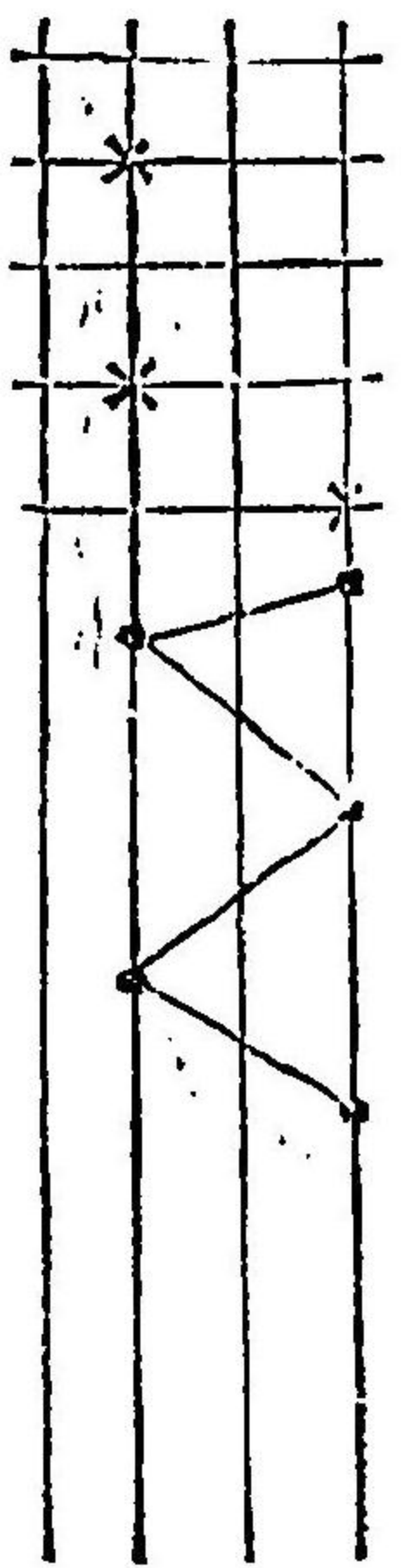
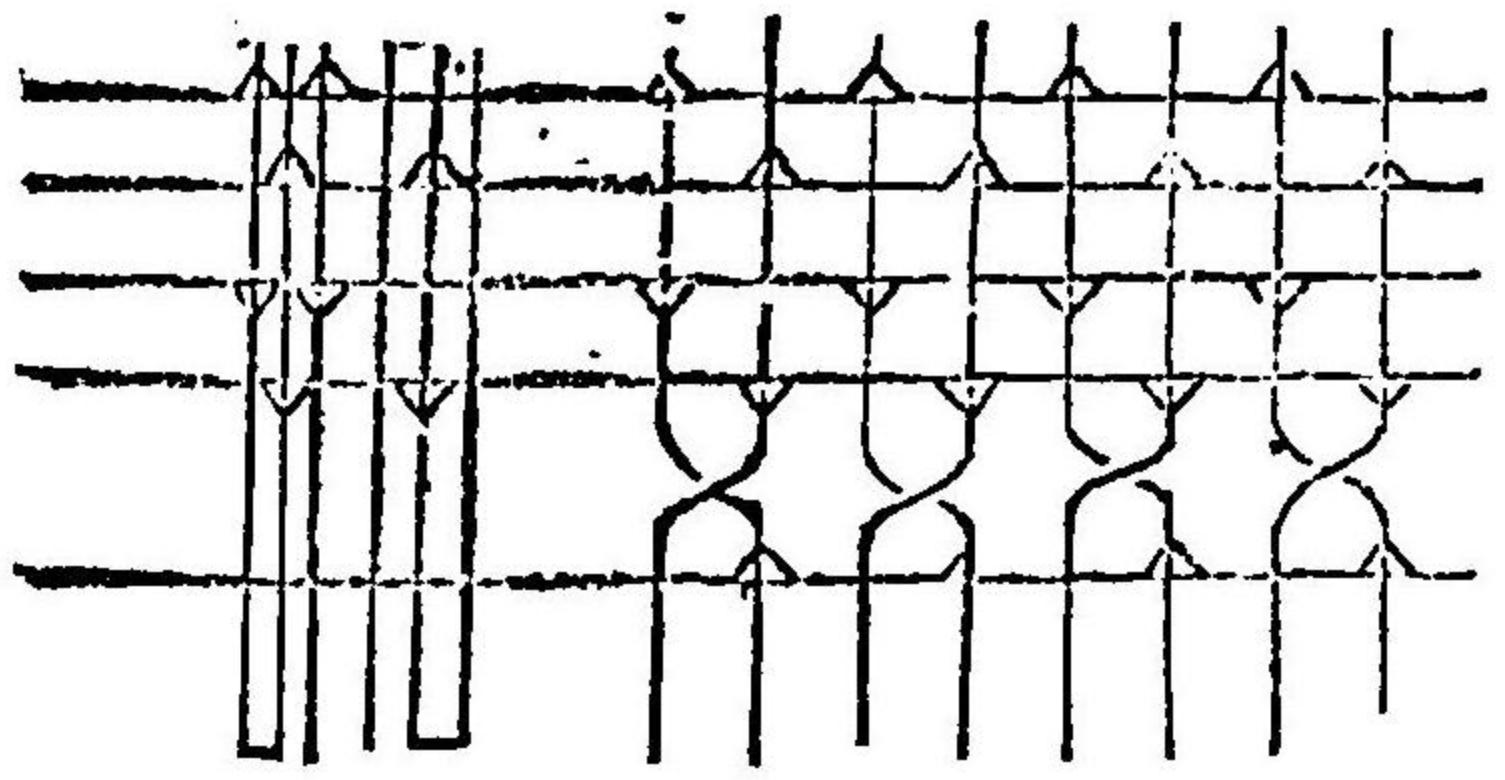
第三號 平七越組組織法

其組織總て前法と同一なり只踏み方に於て多少の相違あるのみ即ち左に



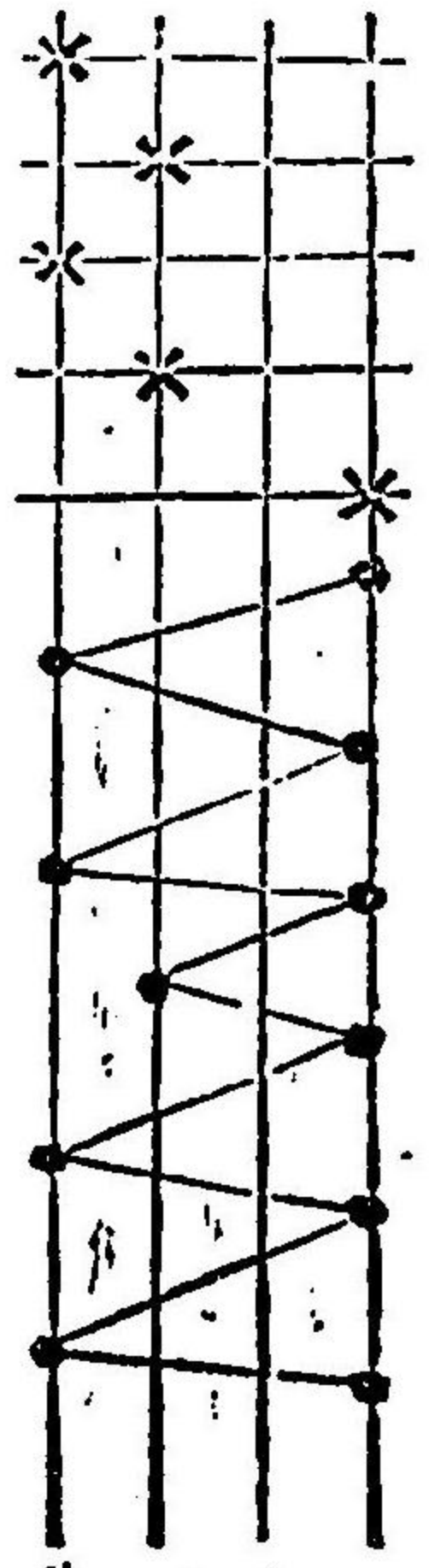
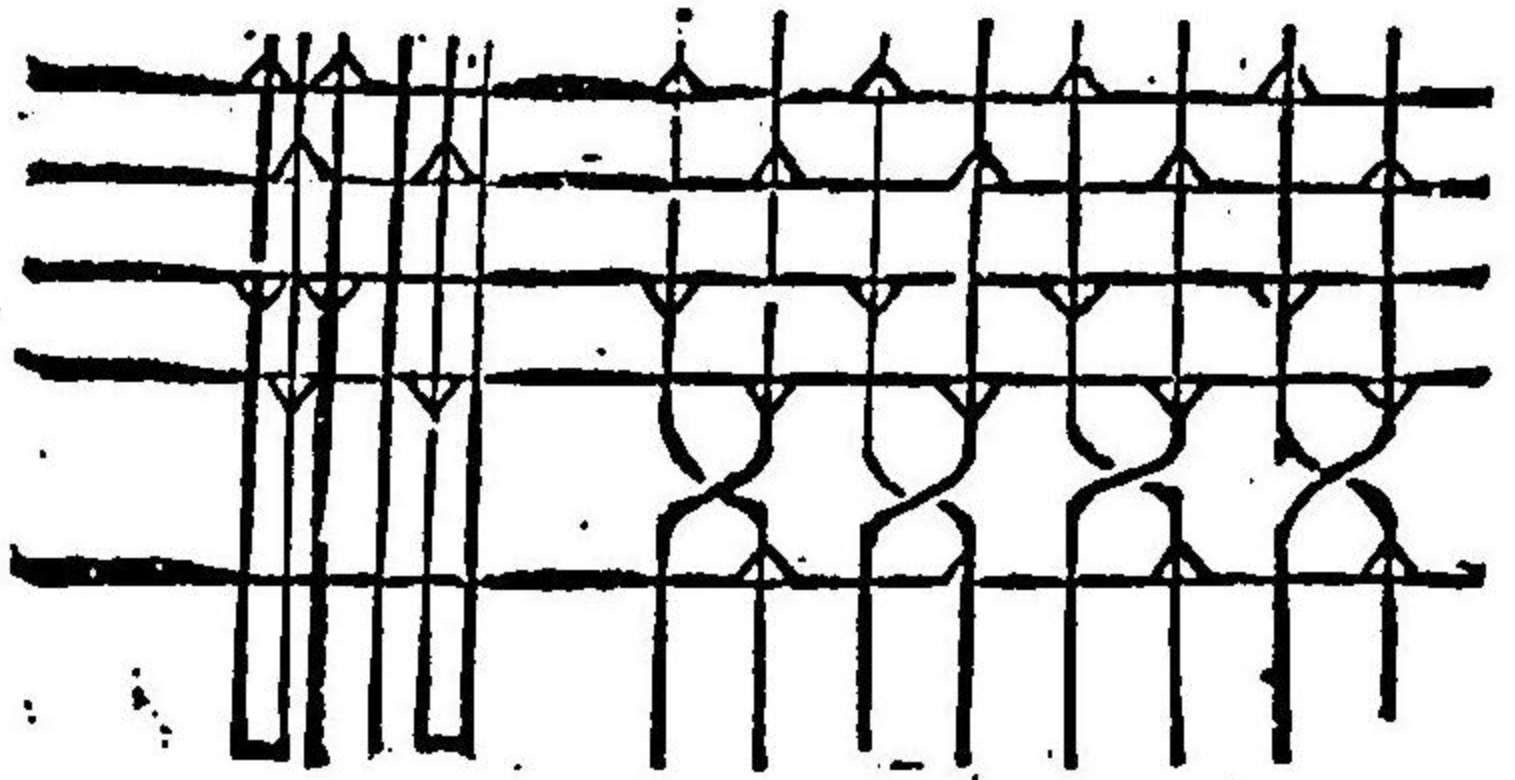
第四號 平紗組織法

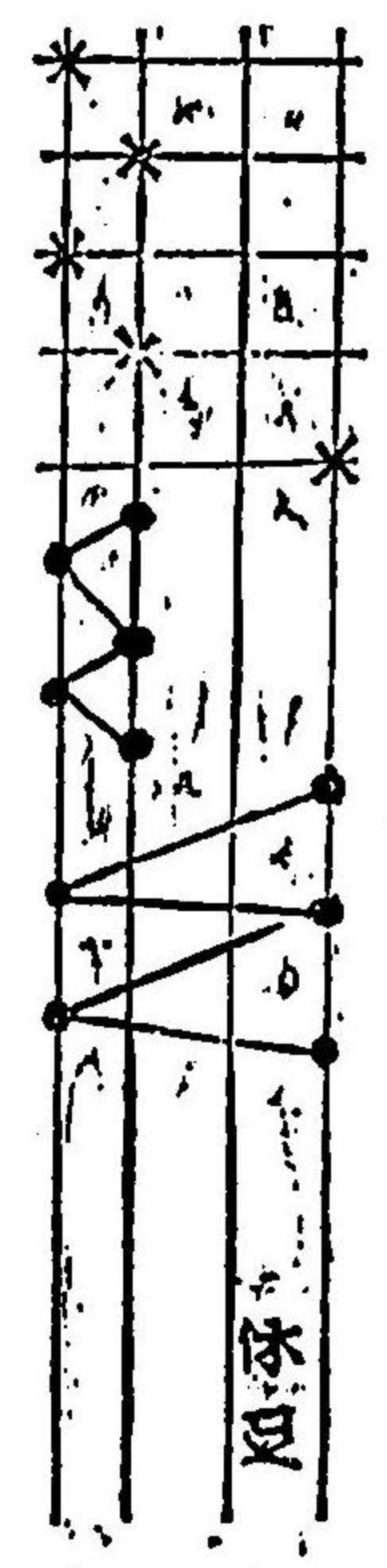
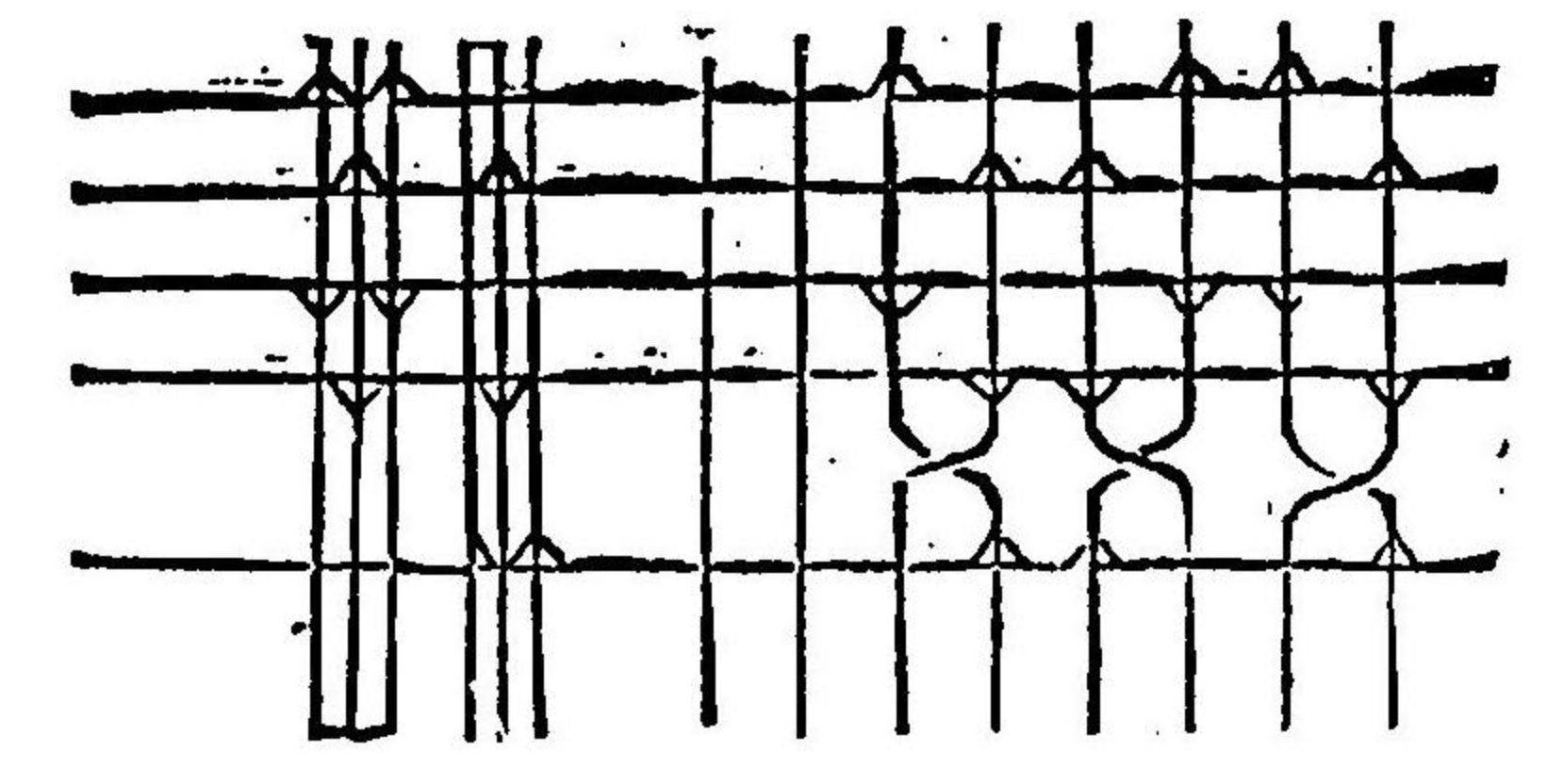
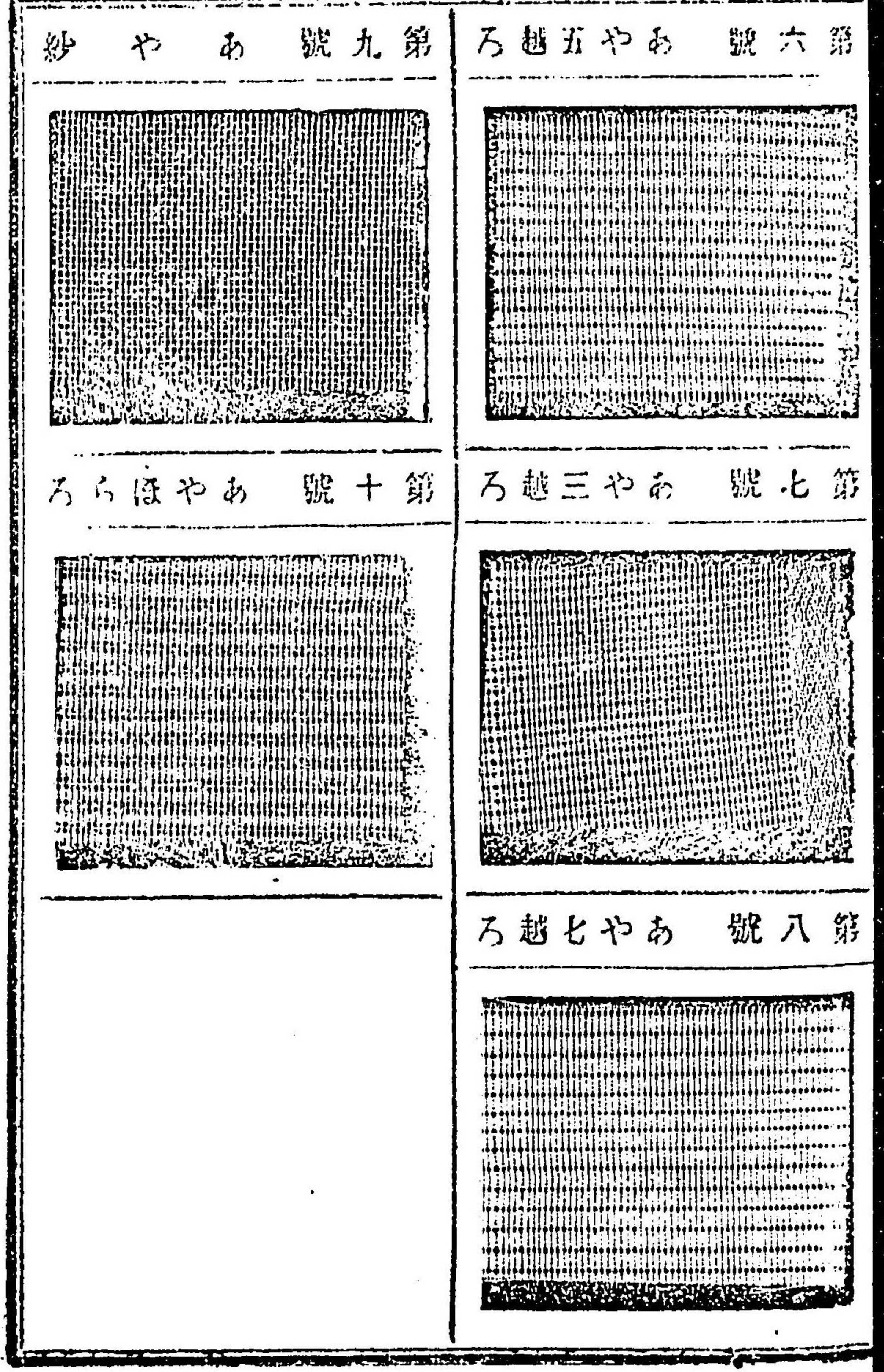
平五越組と同く單一綜統四枚と振機一枚にして經糸通入法及ひ足の付け方も平五越組と同一なり只足木の付方は第一踏木と第三踏木のみにて足れり即ち左右足にて第一第三踏木を一回つゝ踏むなり



第五號 平ほろ組織法

上圖の如く其の組織總て平五越組と同一なり只踏木の踏み方に多少の相違あるのみ乃ち踏み方は最初に第一踏木をふみ次に第四踏木をふみ斯くする事五回第六回目に第三踏木をふみ第七回に第一踏木をふみ第八目に第四踏木をふみ第九回に第一踏木を第十回に第四踏木を第十一回目に第一踏木をふむなり

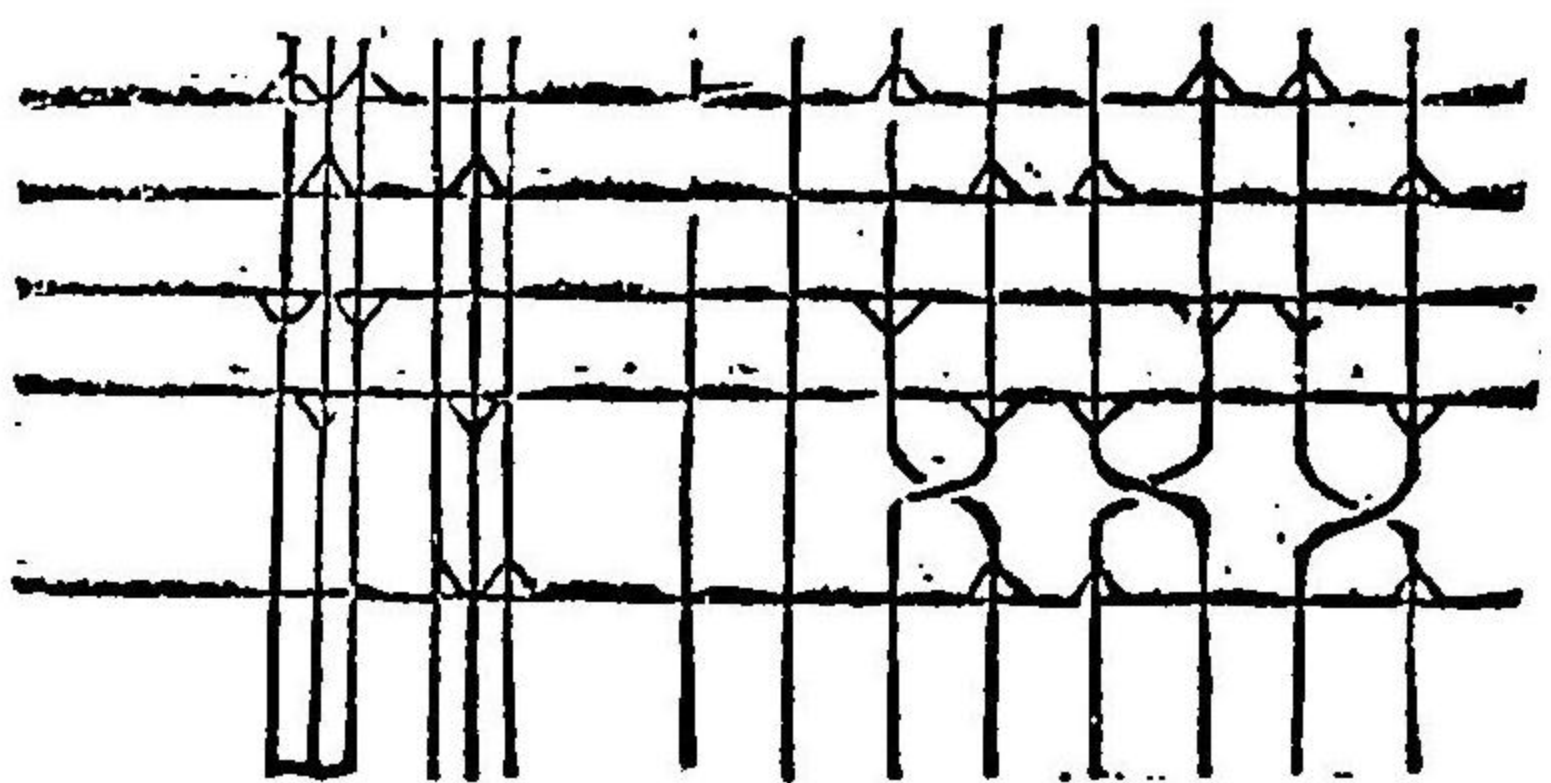




第六號 綾五越組織法 (俗に七々子組とも云)

上圖の如く單一綜統四枚振機一枚にて經糸通入法は第一經を第一綜統の下番口と第二番口と第三番口と第四番口と通入し第二經を第二綜統の下番口と第三番口と第四番口と通入し第三經を第一綜統の下番口と第三番口と第四番口と通入し第四經を第一綜統の下番口と第三番口と第四番口と通入すへし即ち一三四二四一三と通すなり以下之れに倣ふ振機の通入は第二經は第一經の下番より通入すへし

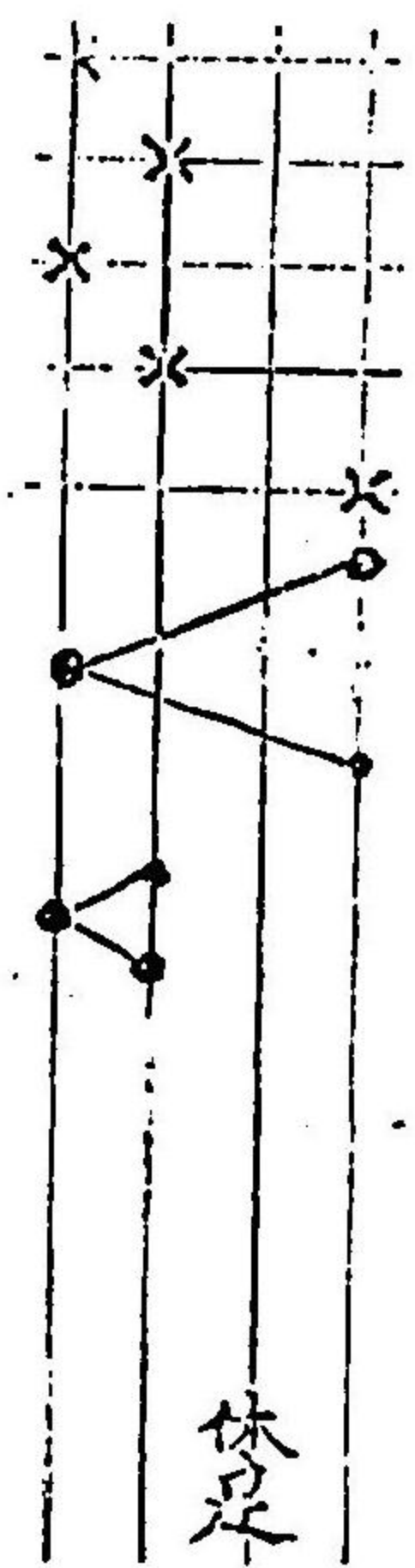
踏木の付け方は第一踏木に振機のみ結び付け第二踏木は休みの綜統を結び付けるなり第三の綜統を結び付け第四踏木に第二の踏木を右左の足にて五回ふみ六回目には第三踏木を左足にて踏み次に第四踏木をふみなり右五回終れば第一踏木に移るなり以下之れに倣ふ



第七號

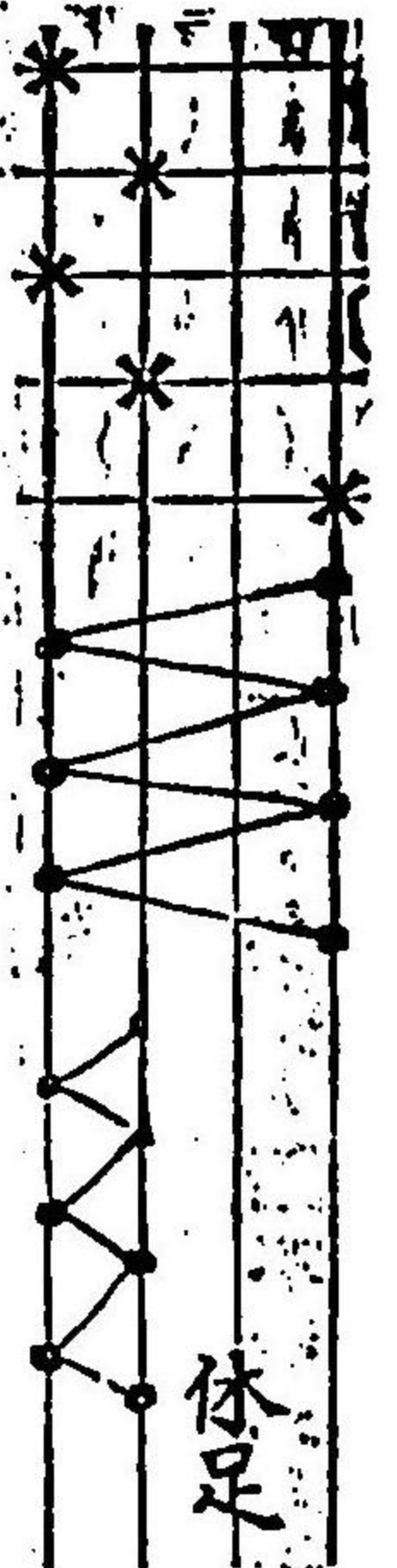
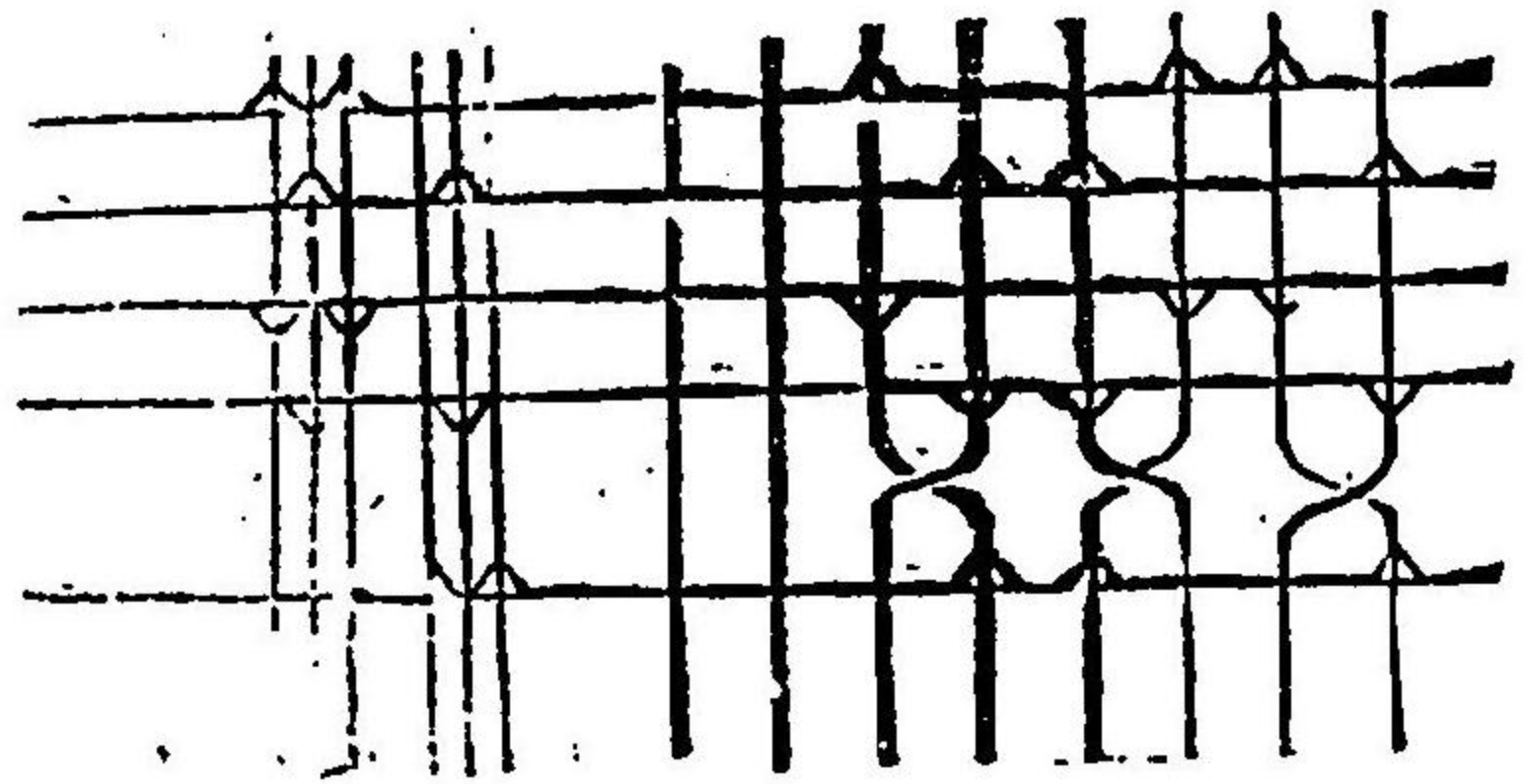
綾三越組組織法

其組織總て前法と同一なり矢張り踏木のおみ方に於て多少の相違あるのみ即ち左圖の如し



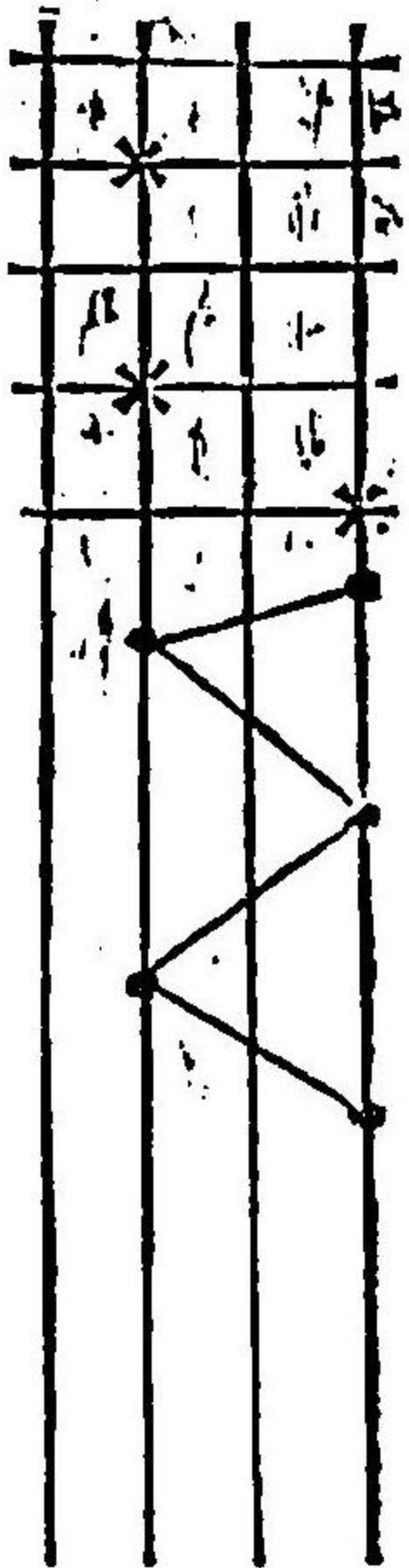
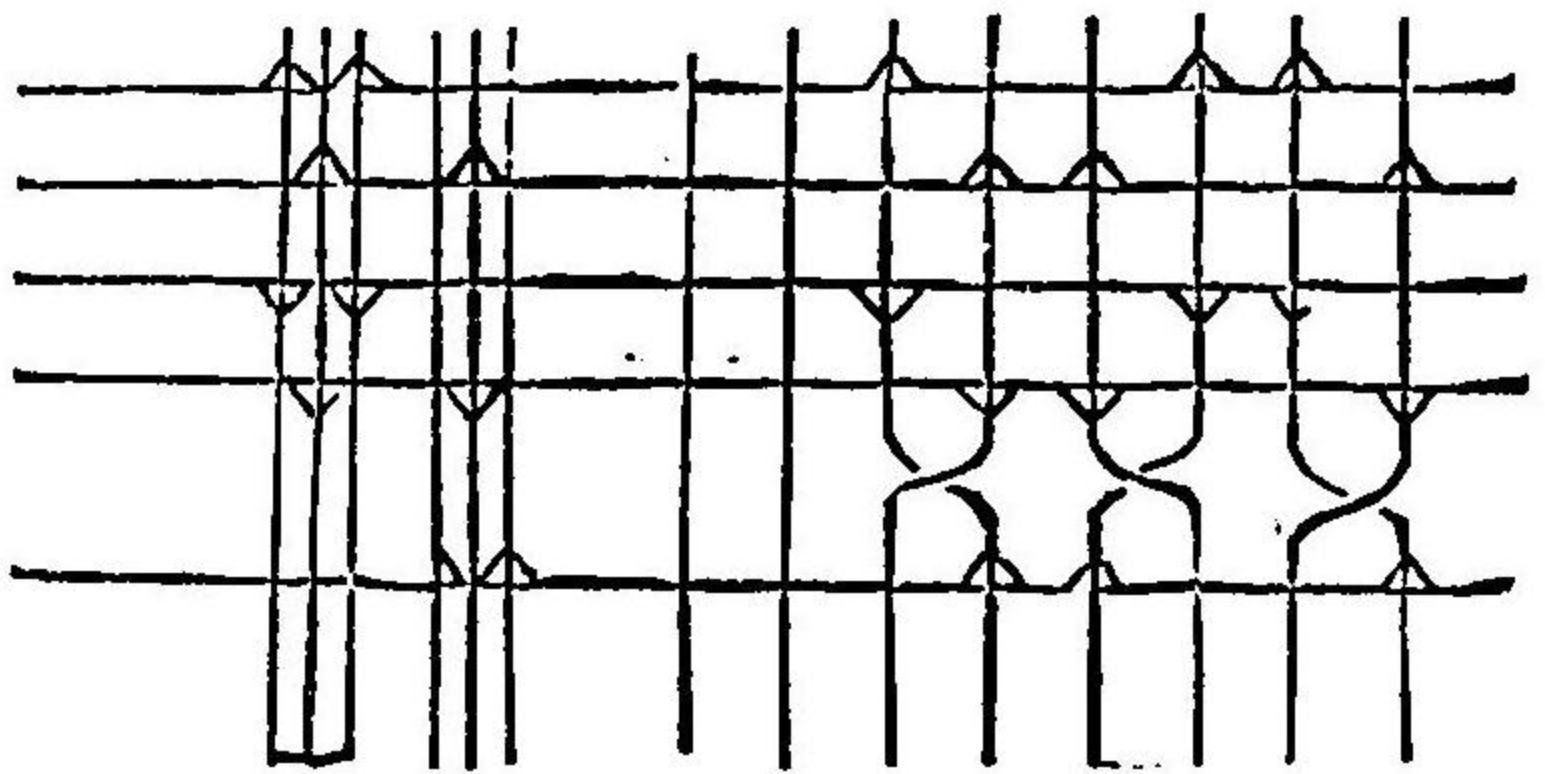
第八號 綾七越組織法

前法と同一なり之れも矢張り踏み様に少しく相違あるのみ左の如し

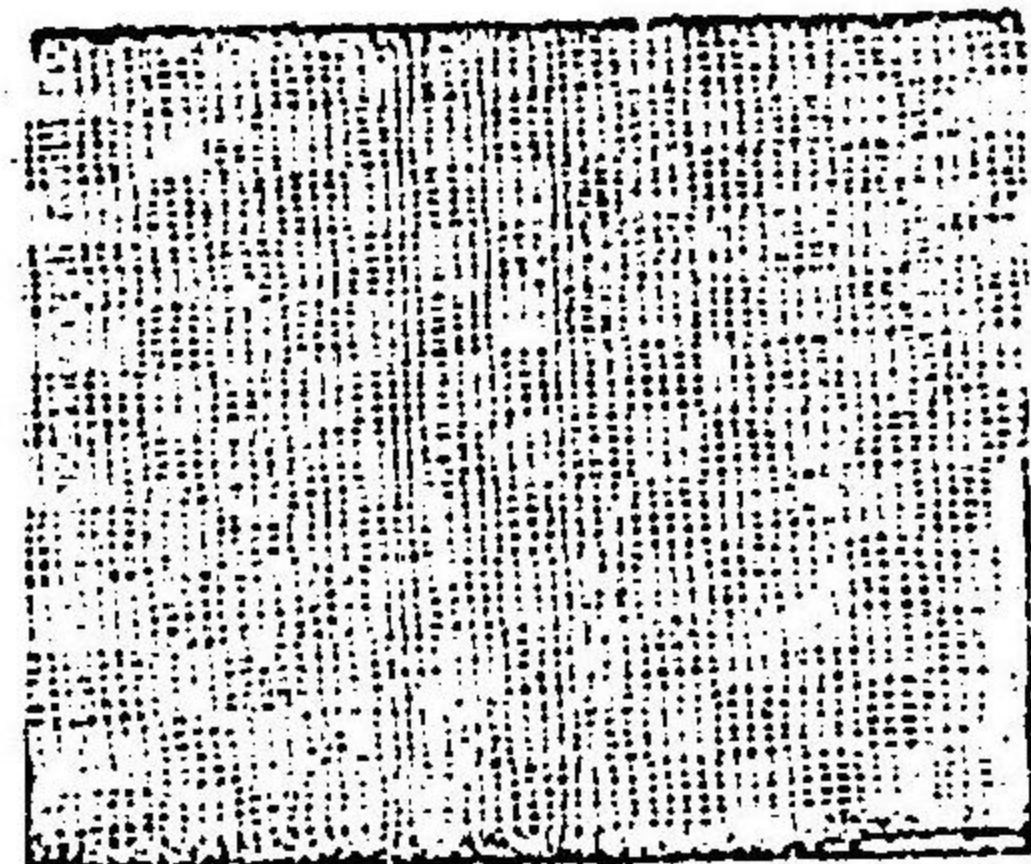
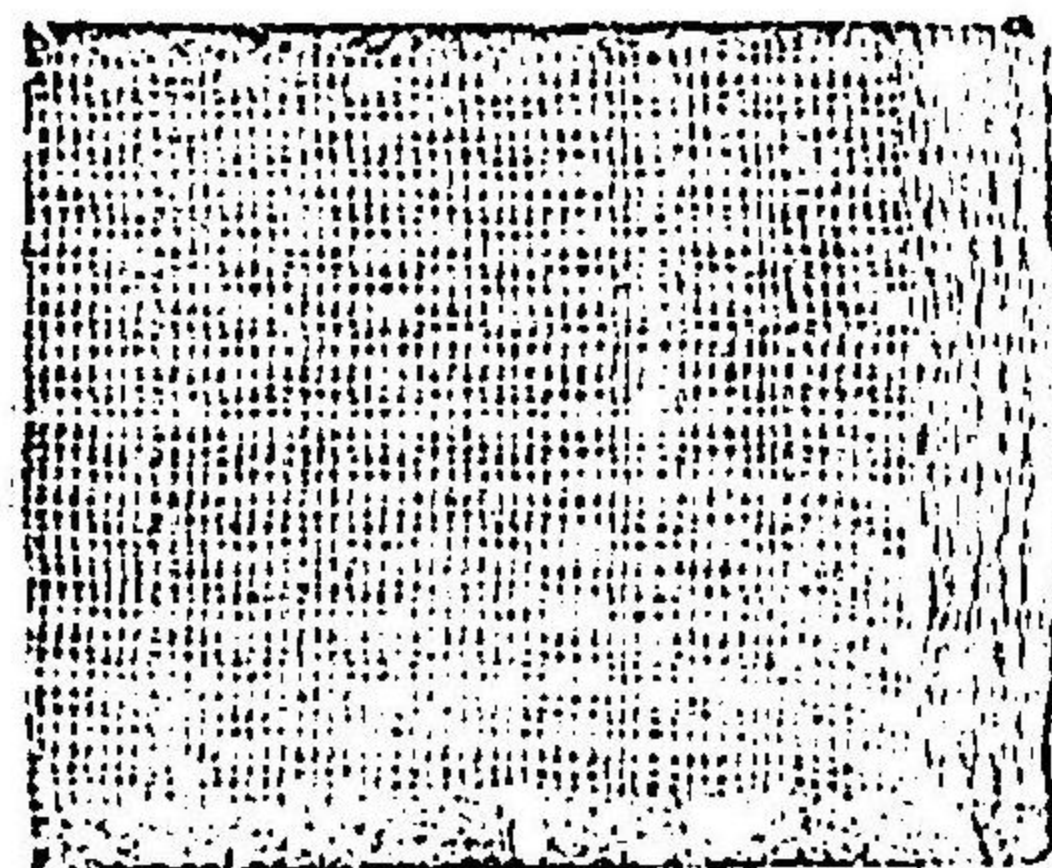


第九號 綾紗織組織法

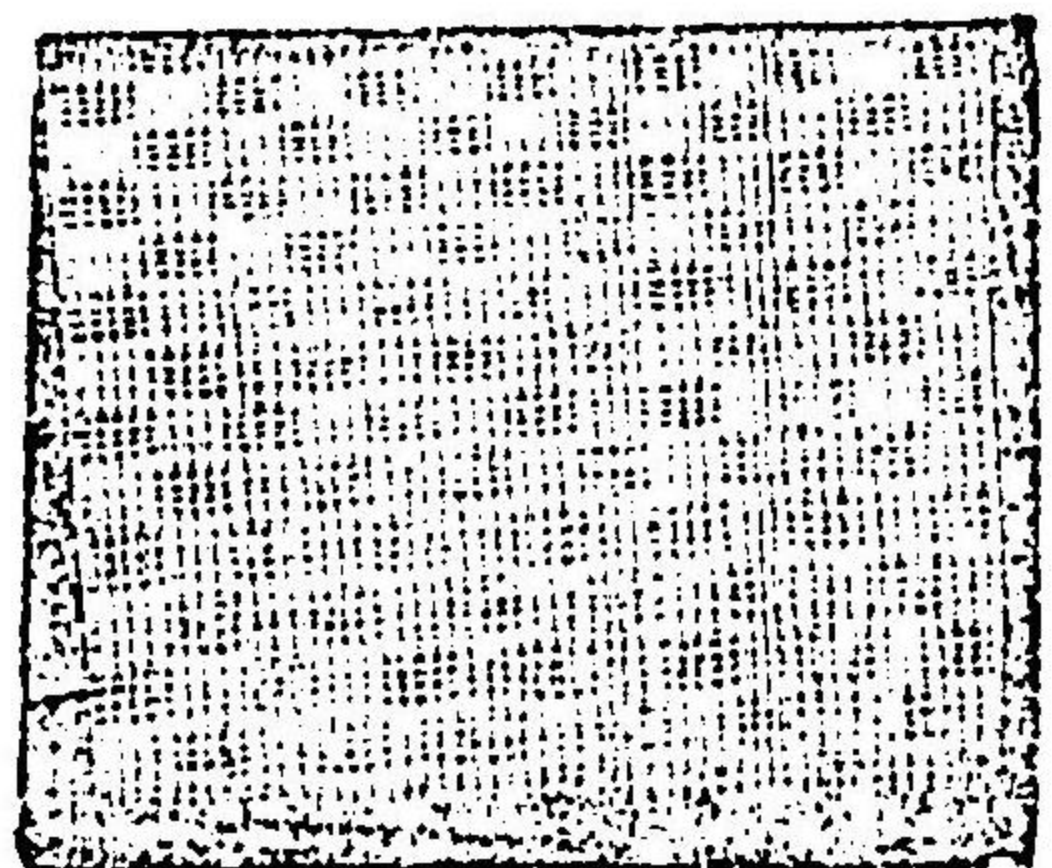
綾紗も綾五越組と組織機仕掛經糸道入法總て同一なり只相違の点は踏木の踏方のみなり即ち第一踏木と第三踏木の二本にて足れり踏み方は左右の足にて各一回つゝ第一と第三踏木を各順に踏むなり



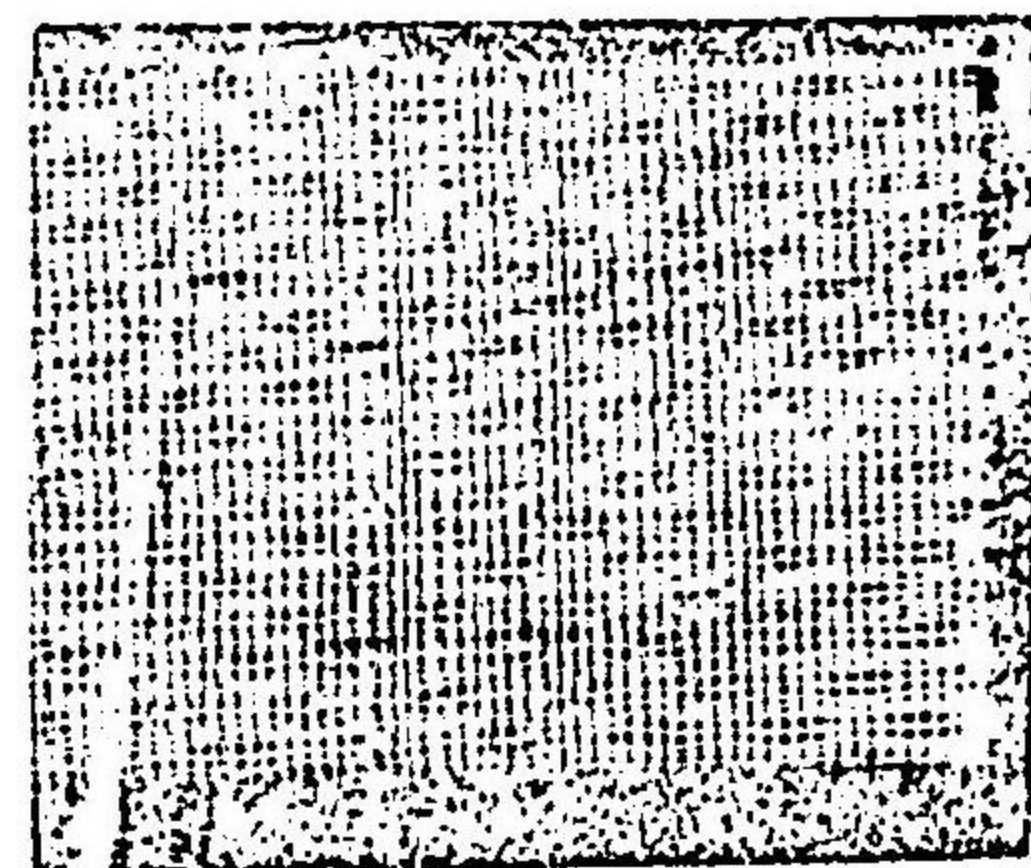
第 一 十 號 平 松 市 乃 | 第 十 四 號 平 加 寸 乃



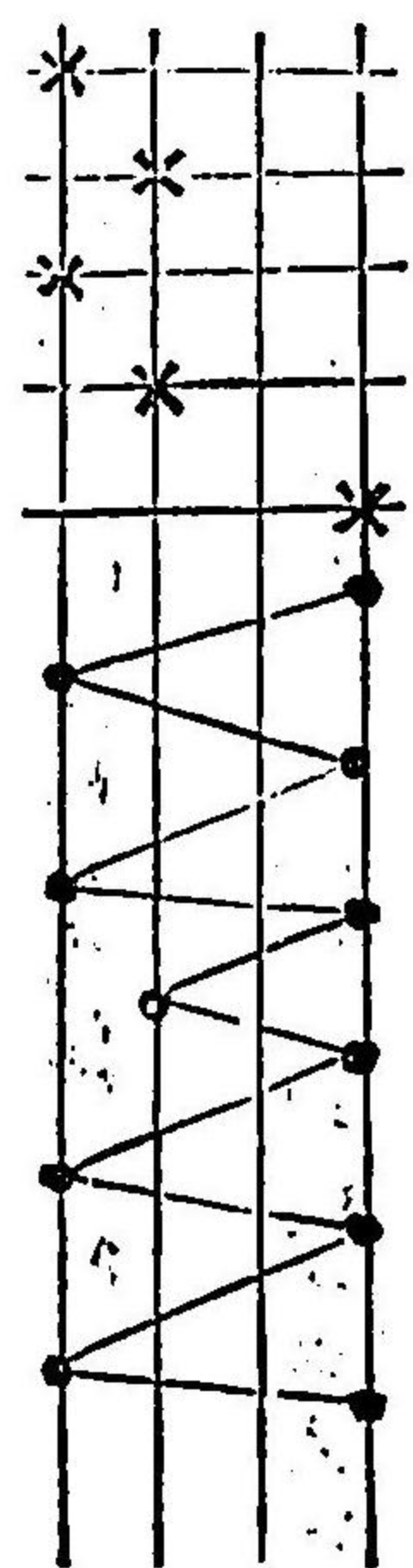
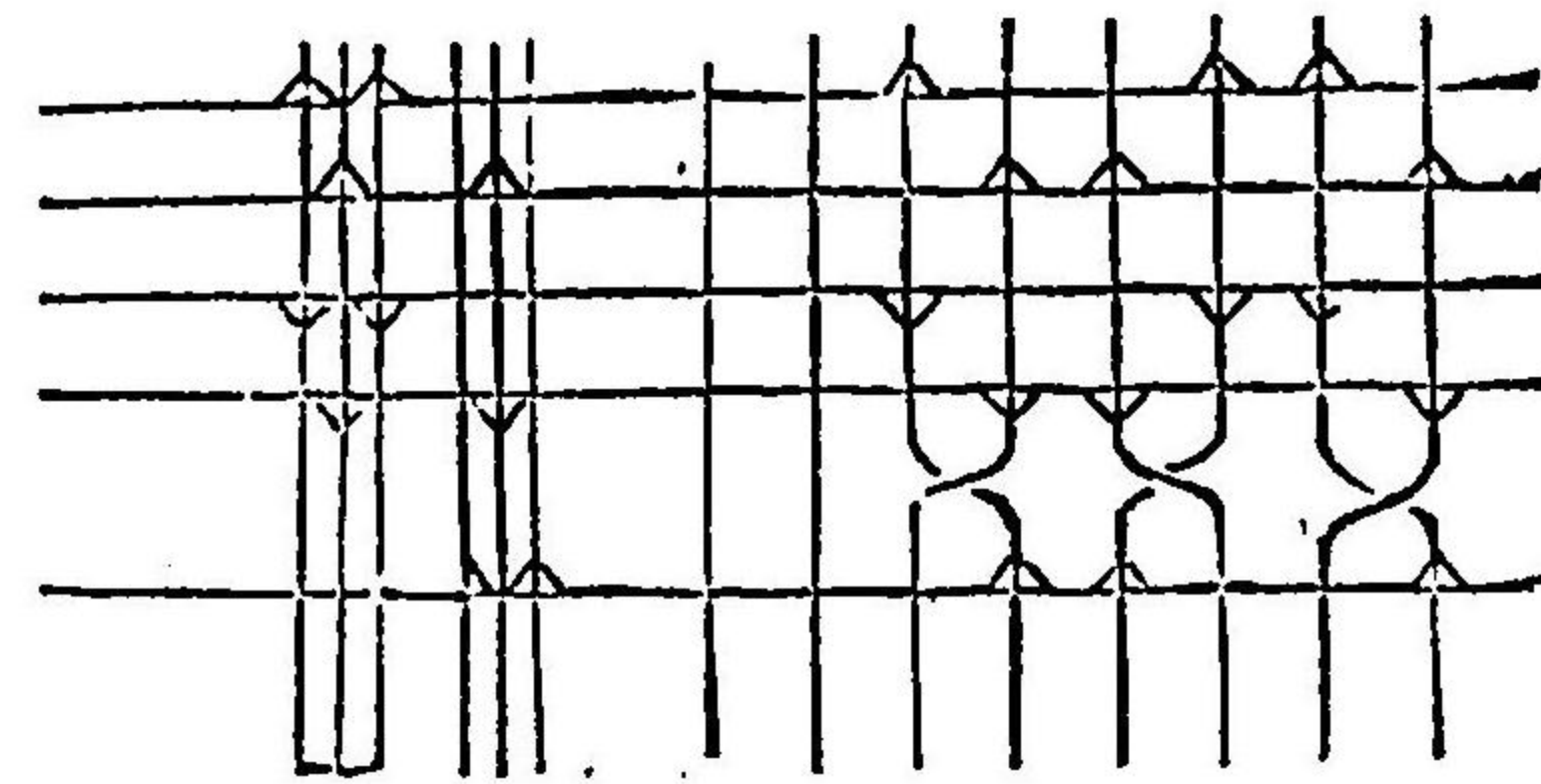
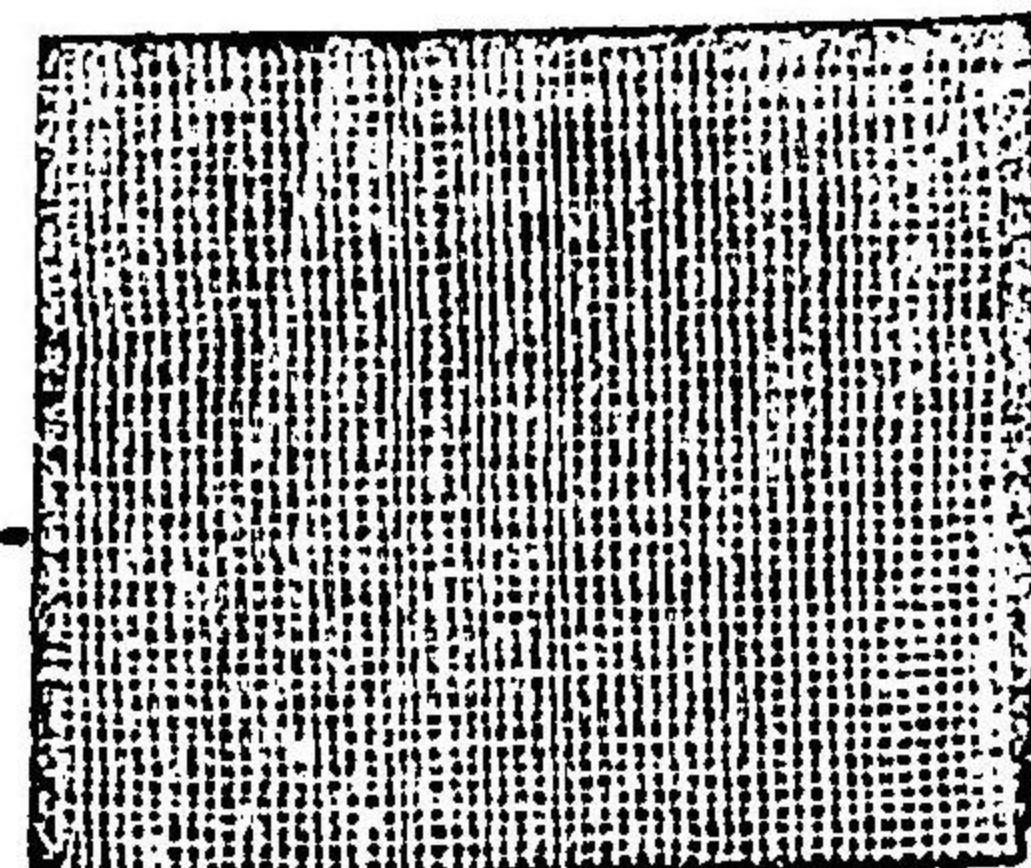
第 五 十 號 平 小 豆 乃



第 二 十 號 平 千 鳥 乃



第 三 十 號 平 米 乃



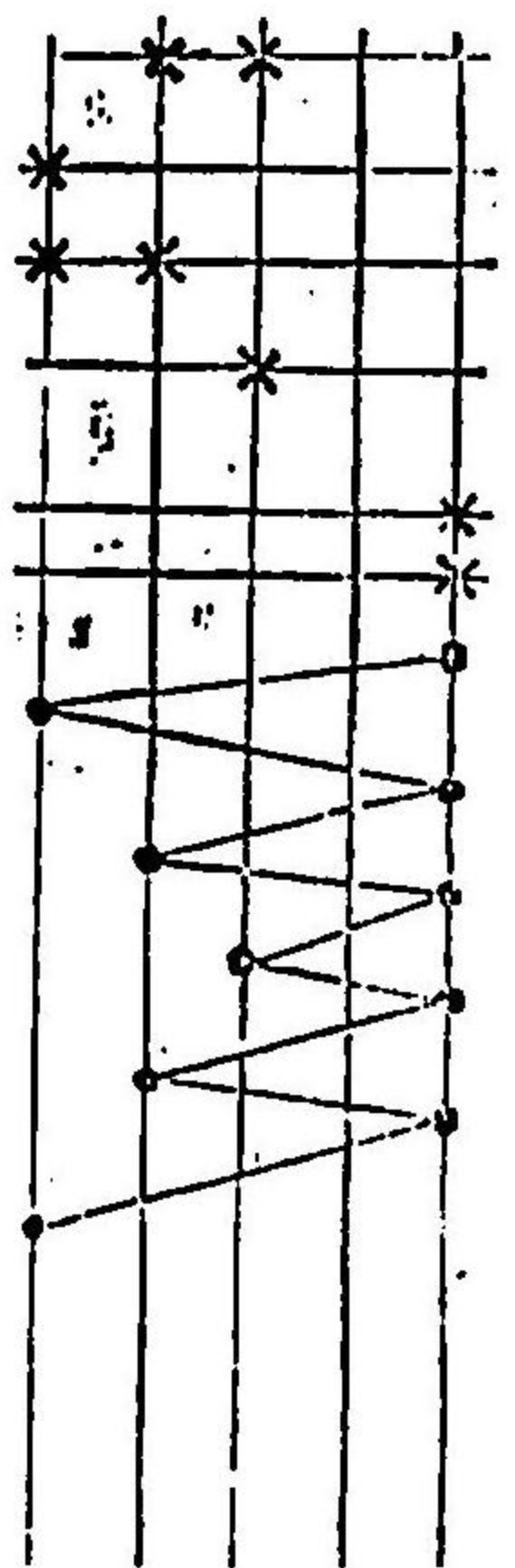
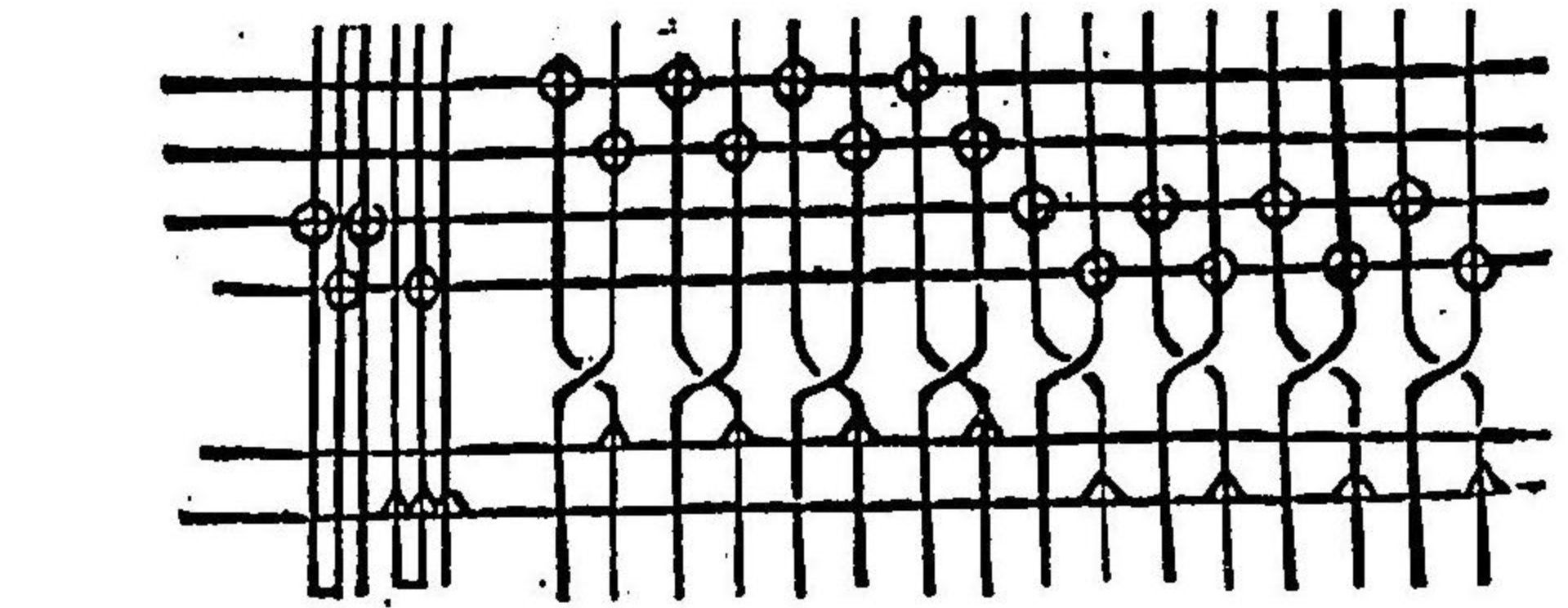
第 十 號

綾 ほ ら 紹 組 織 法

綾 ほ ら 紹 も 綾 五 越 紹 と 同 一 な り 踏 み 方 は 平 ほ ら 紹 と 同 一 な り
 以 上 十 種 共 に 多 く 男 子 の 夏 羽 織 に 用 ゆ る な り

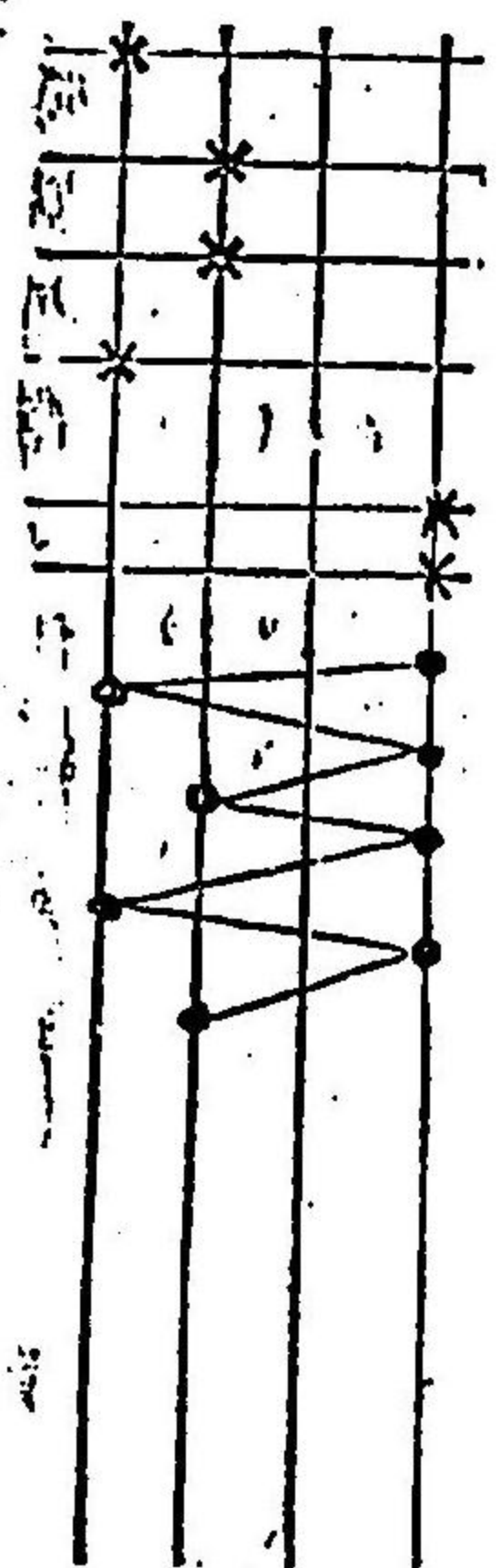
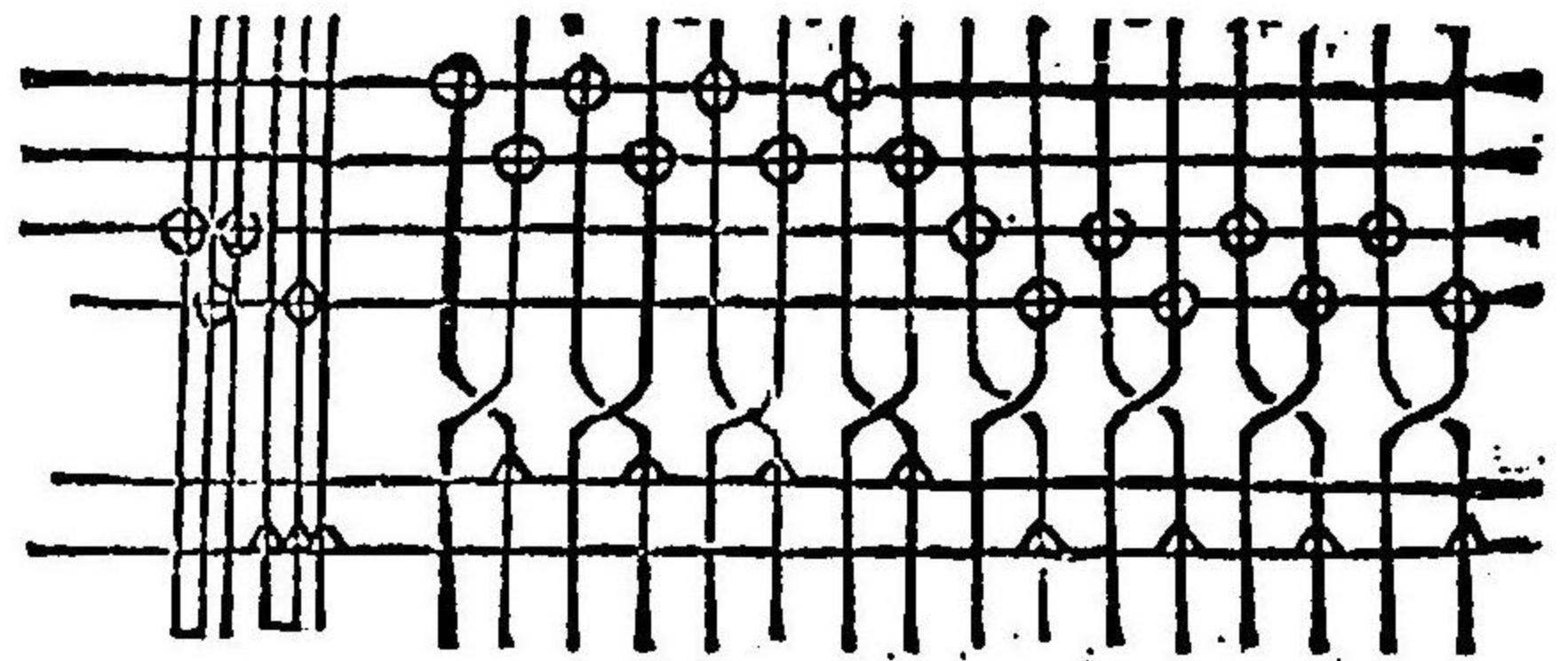
第十二號 平千鳥組組織法

平千鳥組は總て前法市松組と同一組織にして只踏木の結ひ付け方と踏木のおみ方のみ相違あるなり左の如し



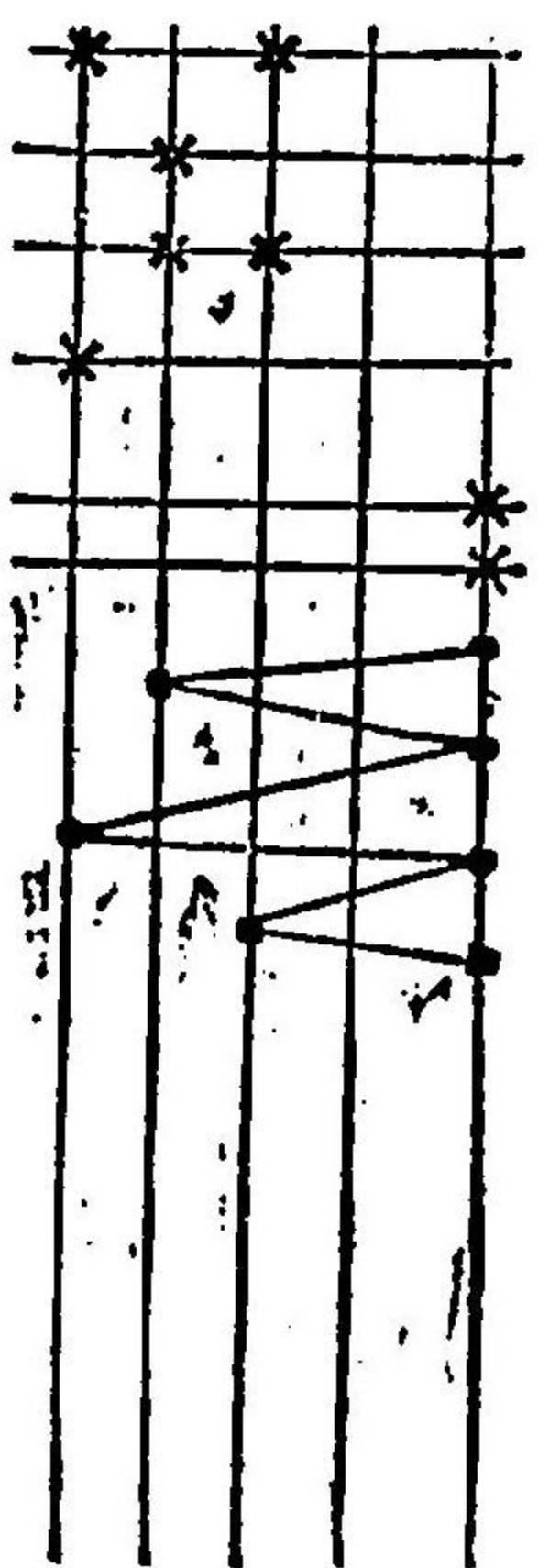
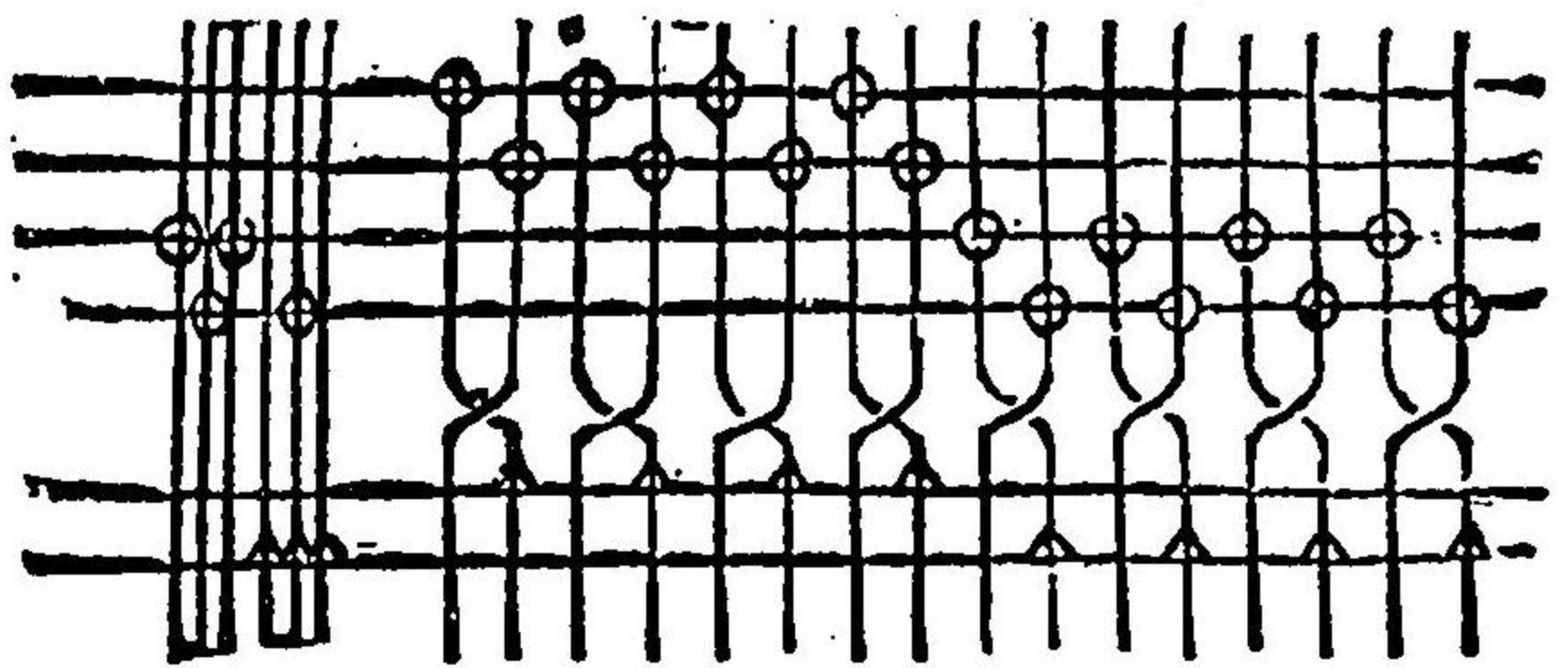
第十三號 平米組組織法

平米組も前平市松組と同一にして踏木の結ひ方と踏木のおみ方の相違あるのみ而して其結ひ方及踏み方は圖の如し



第十四號 平霞組組織法

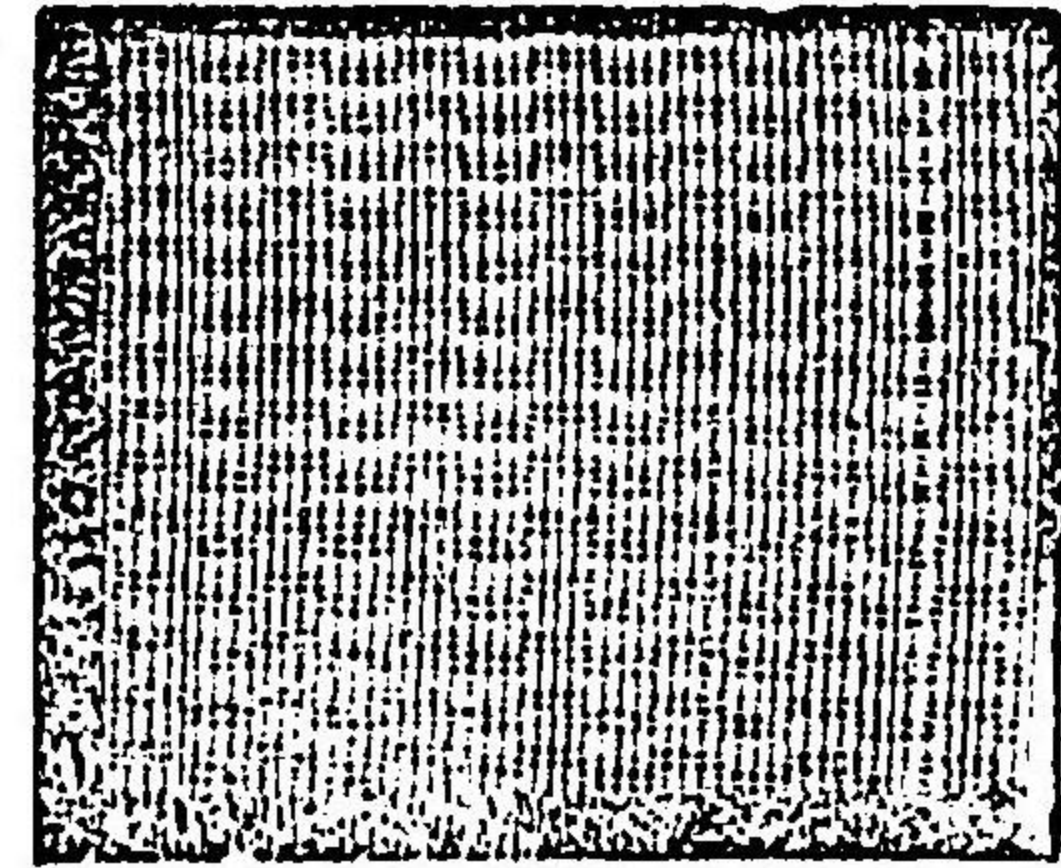
平かすみ組の組織も又平市松組と同じく無雙綜統四枚振機二枚にて立糸通入法も同一なり只踏木の付け方と踏み方のみ多少の相違あるなり



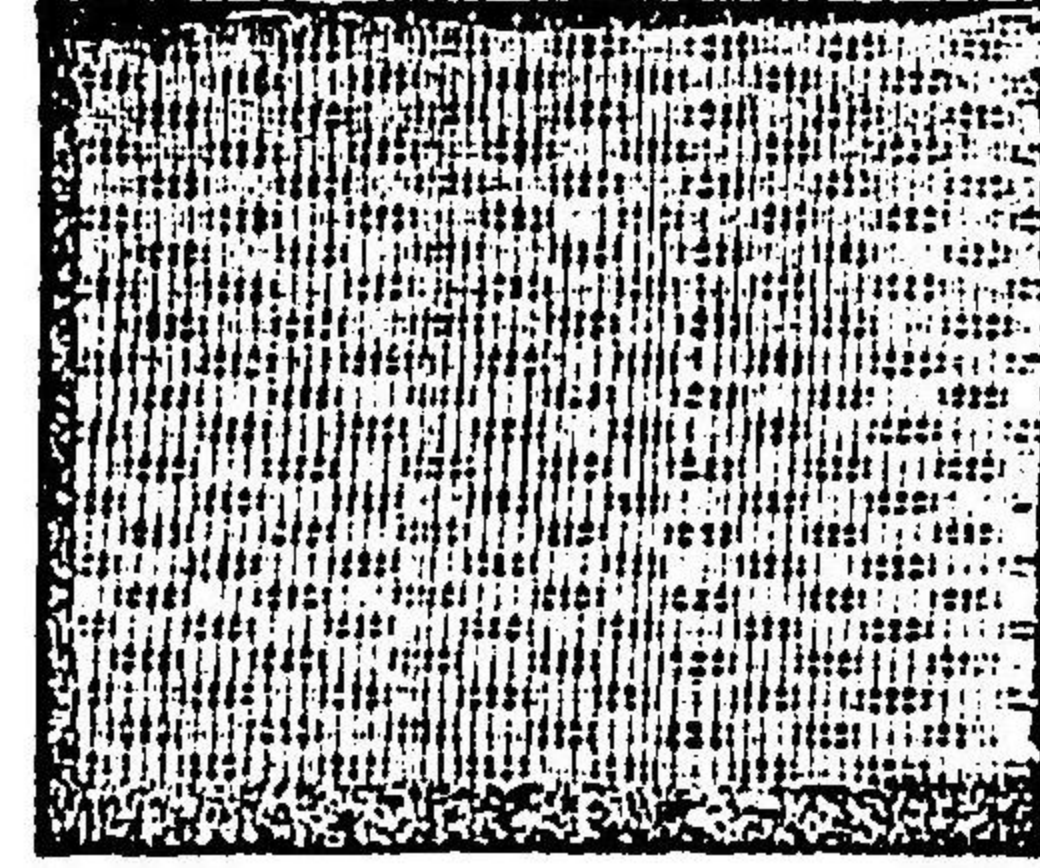
欠

MISSING

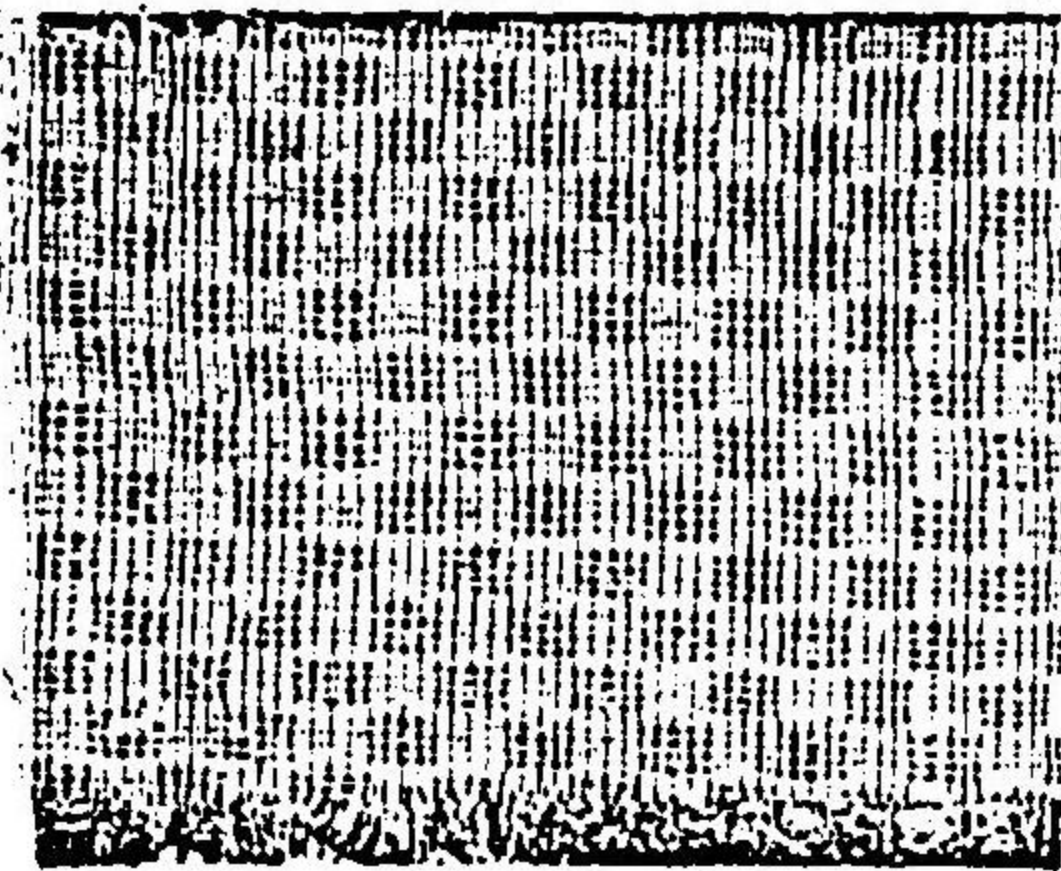
ろみすかやあ 號九十第



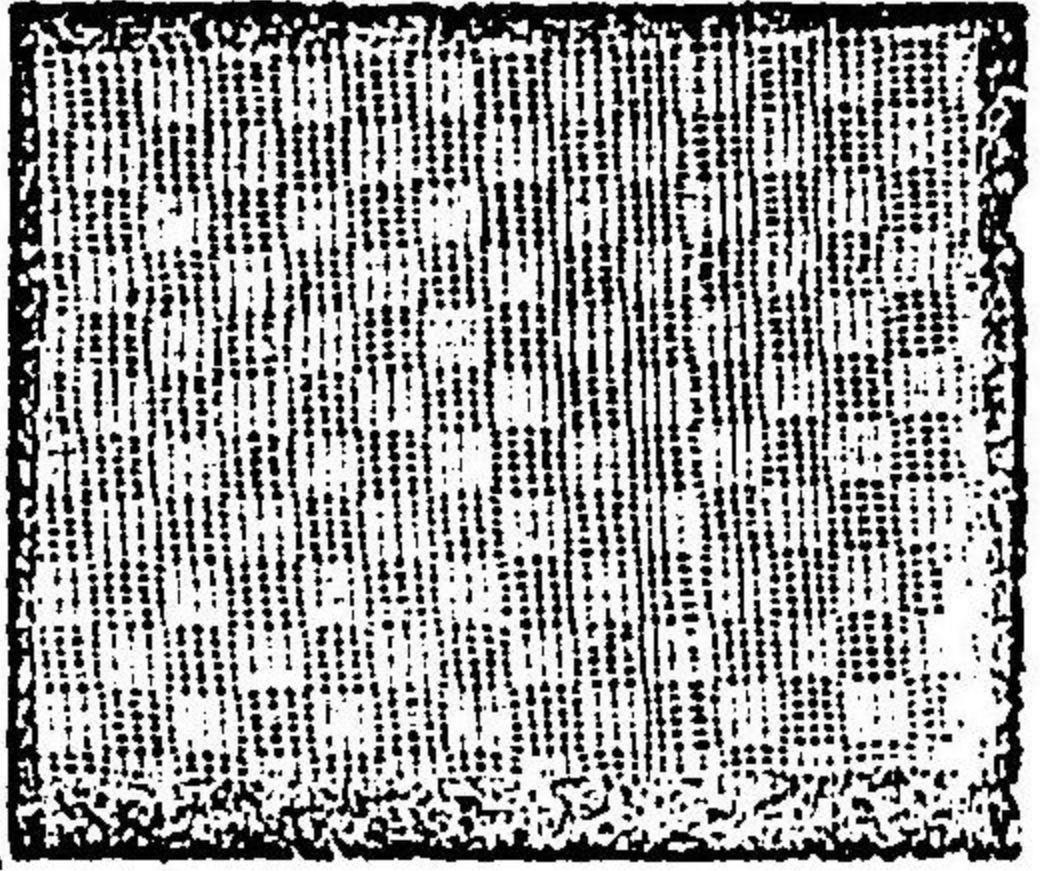
ろ鳥千やあ 號六十第



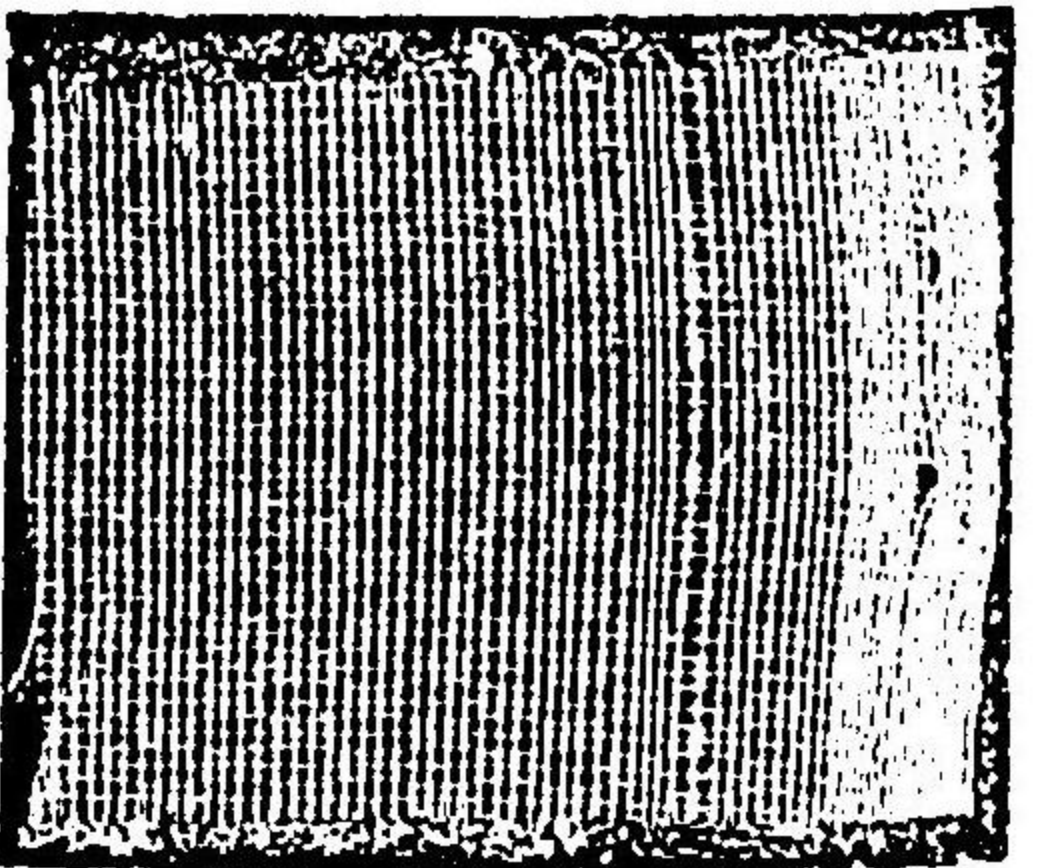
ろ豆小やあ 號十二第

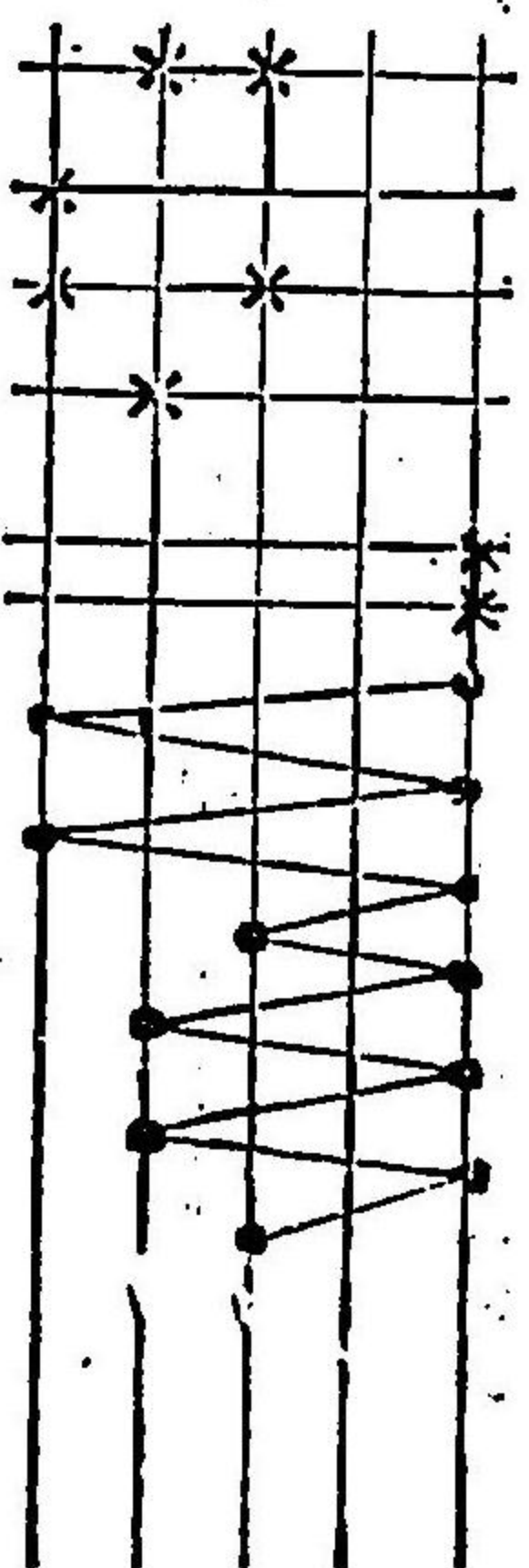
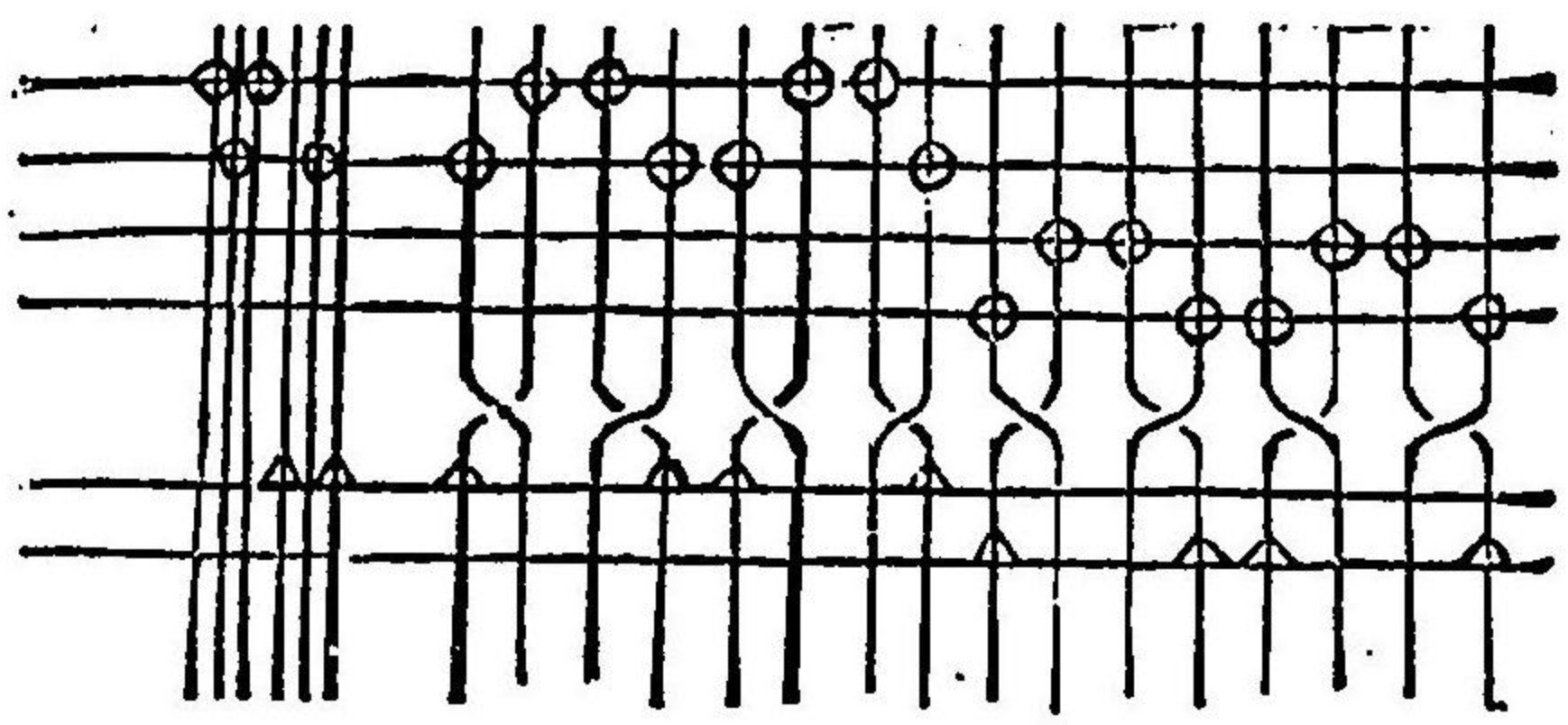


ろ松市やあ 號七十第



ろ米やあ 號八十第





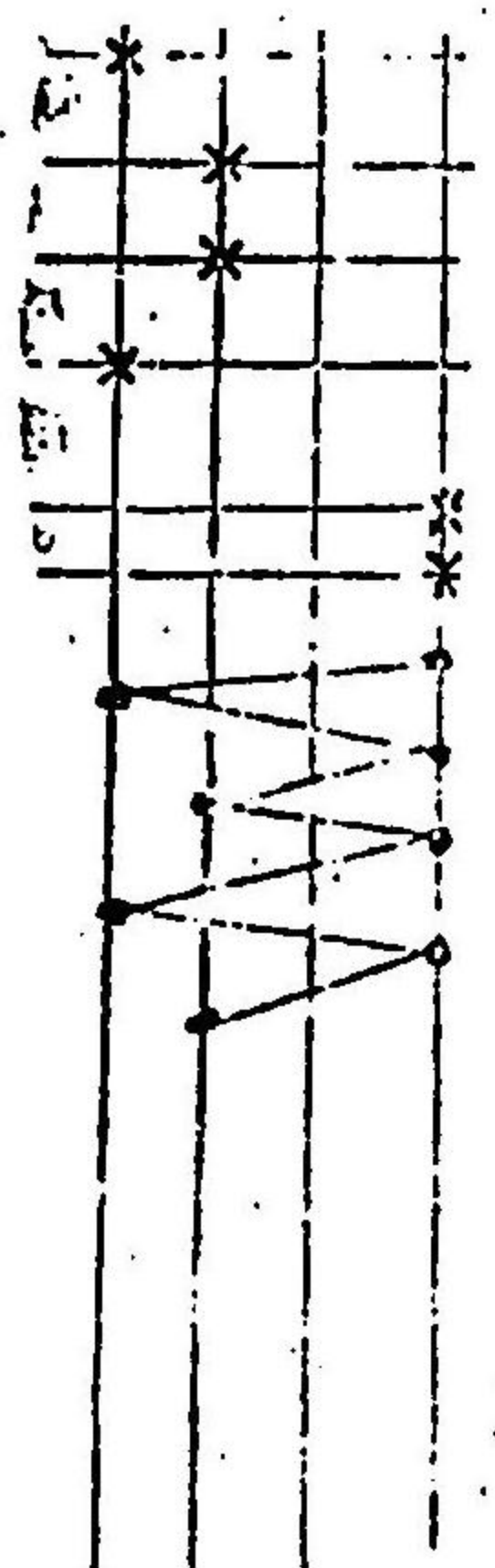
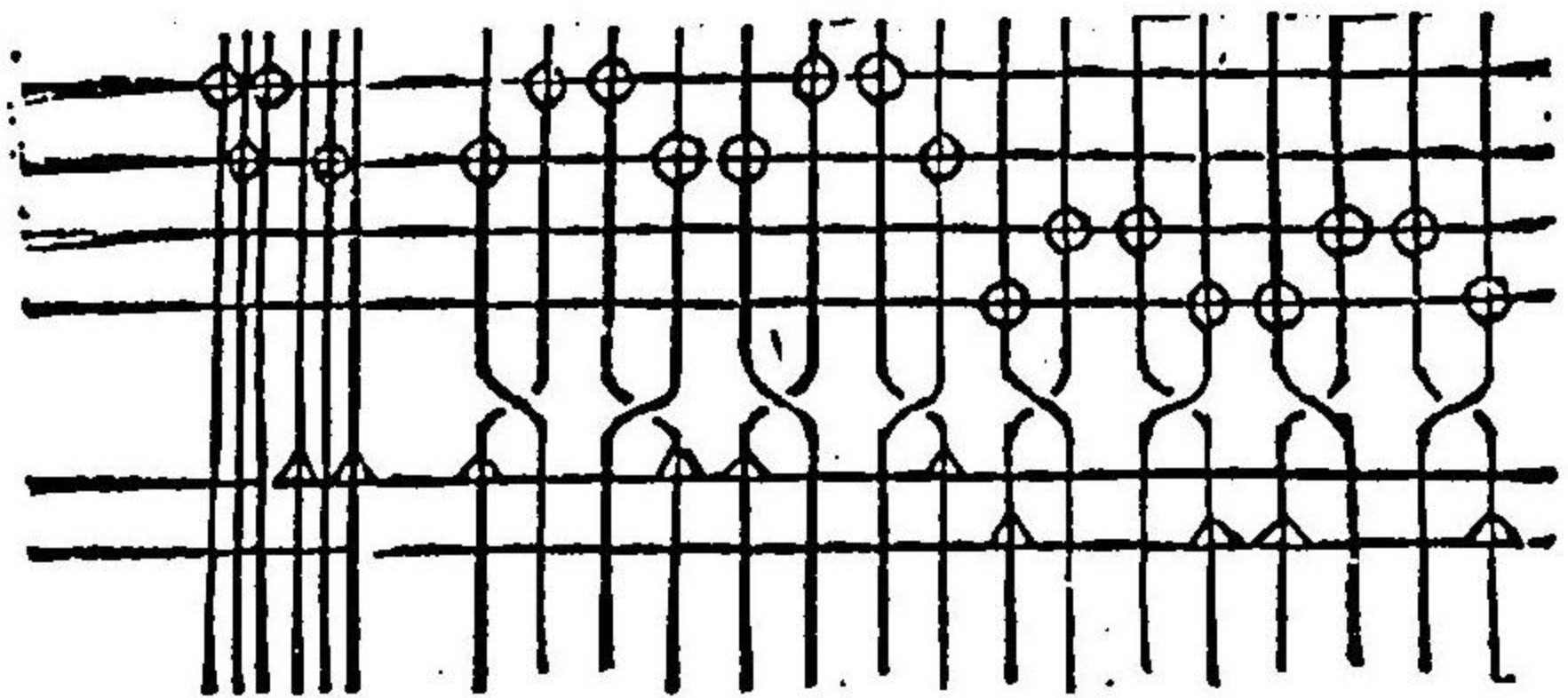
第十七號

綾市松組織法

其組織圖の如く無雙綜統四枚振機二枚にして經糸通入法其他
機仕掛は前法あや千鳥組と同一なり只踏木の付け方及ふみ方
に多少の相違あり圖の如し

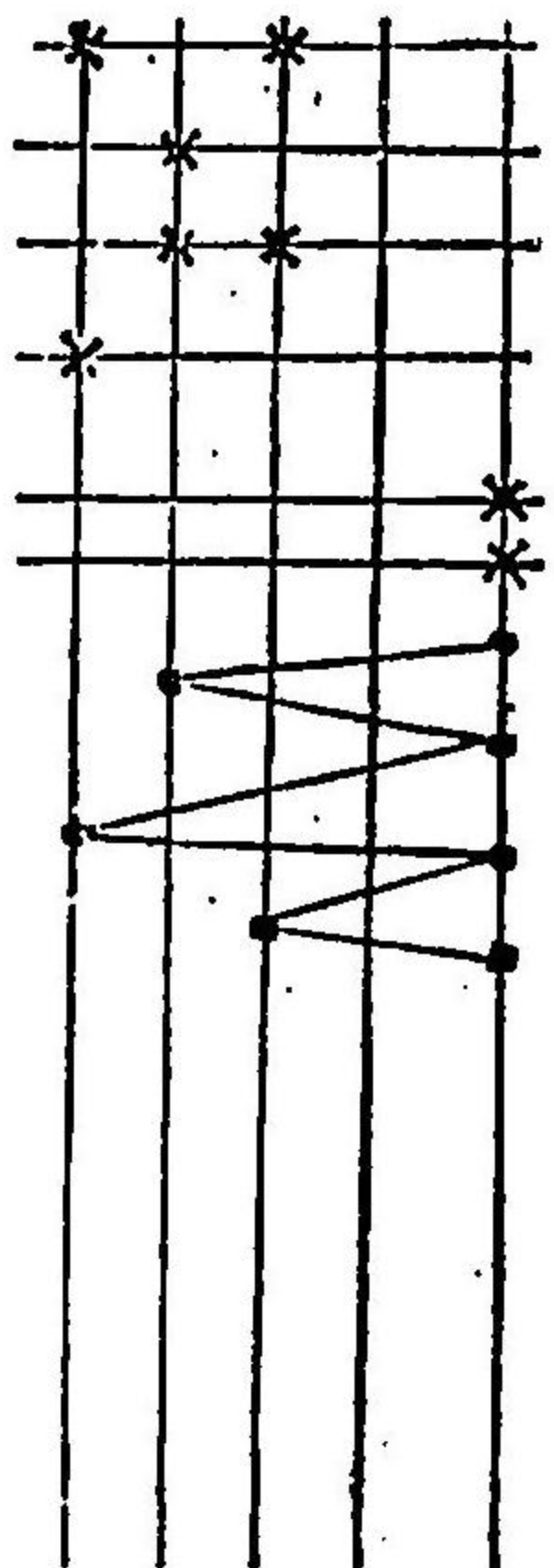
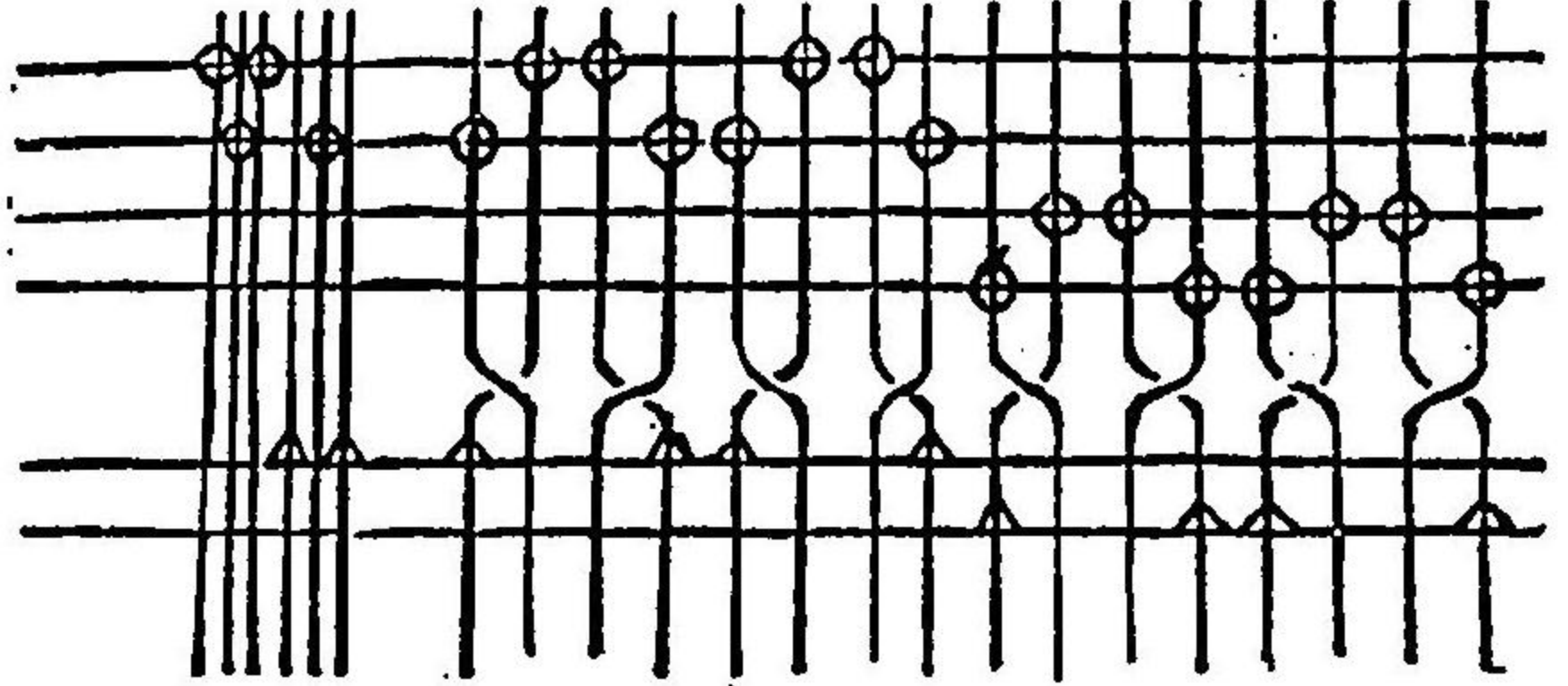
第十八號 綾米紹組織法

綾米紹も亦た前法と同一なり無雙綜統四枚振機二枚にして經糸通入法及び振機へ通入法機仕掛皆同一なり只踏木のみ方と付け方のみ多少の相違あるのみ即ち左の如し

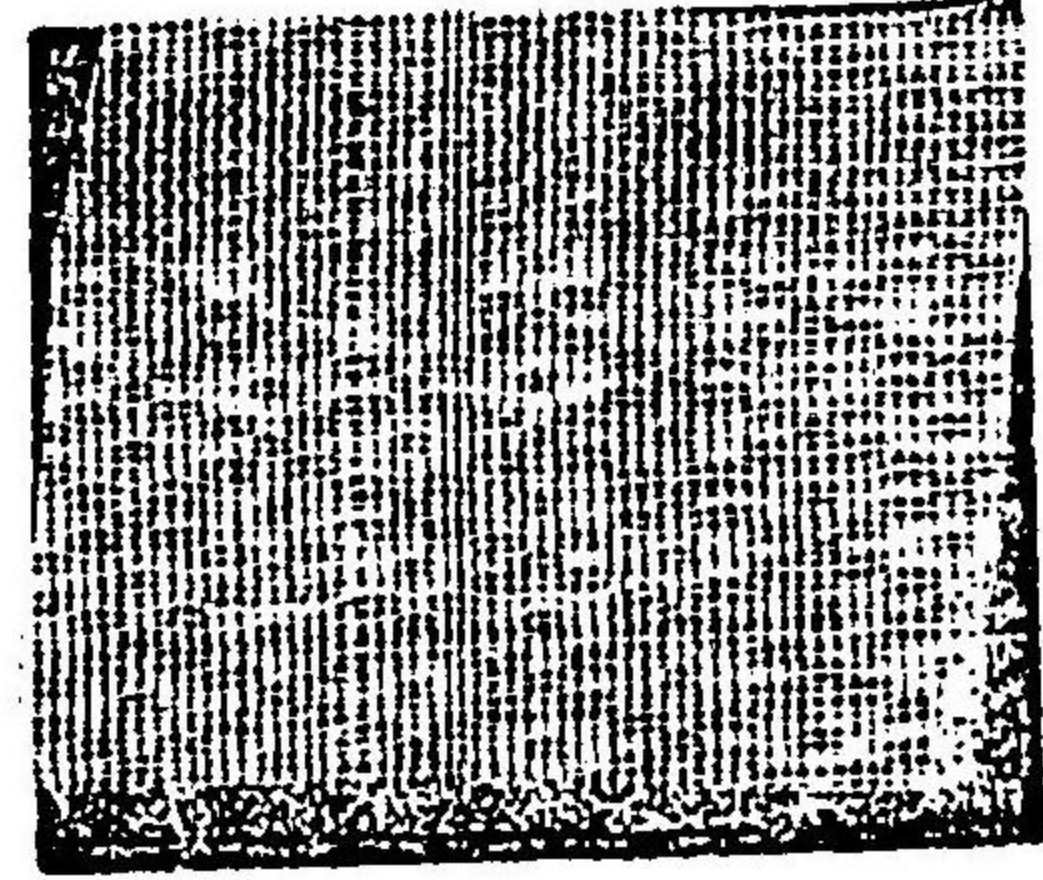
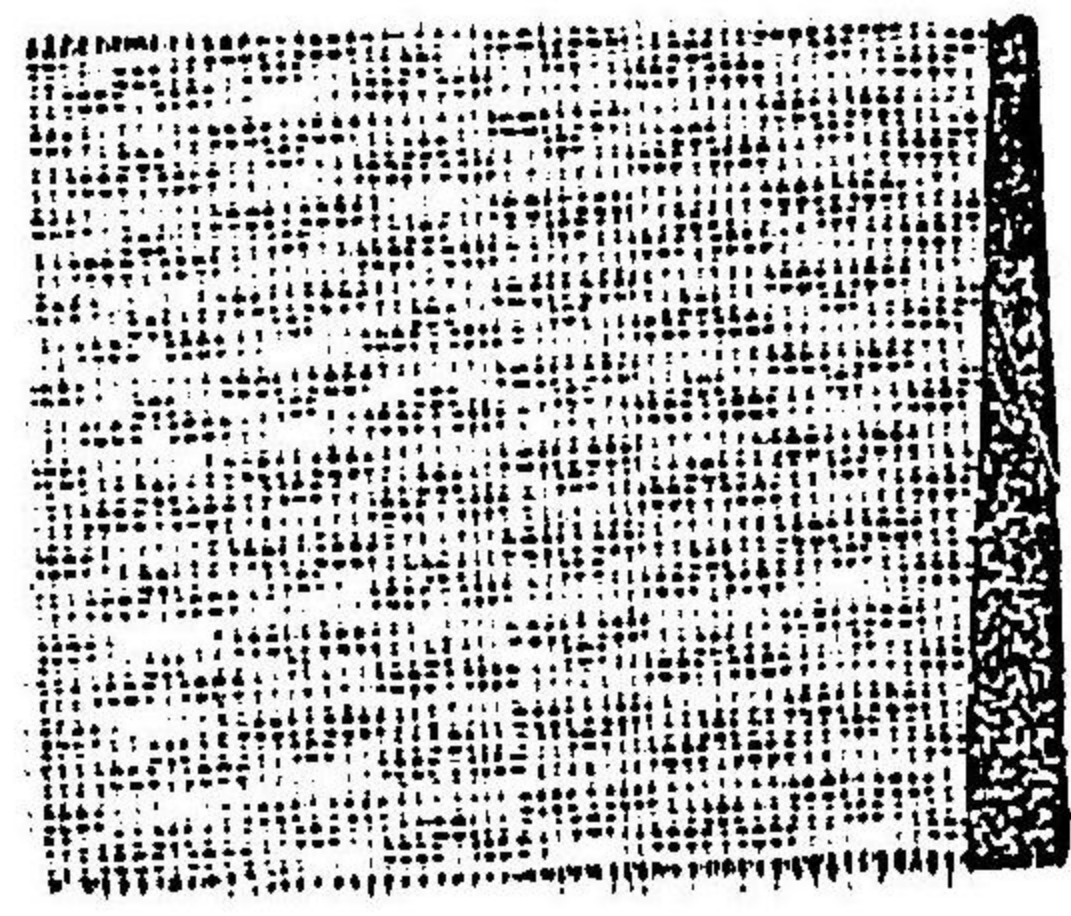


第十九號 綾霞紹組織法

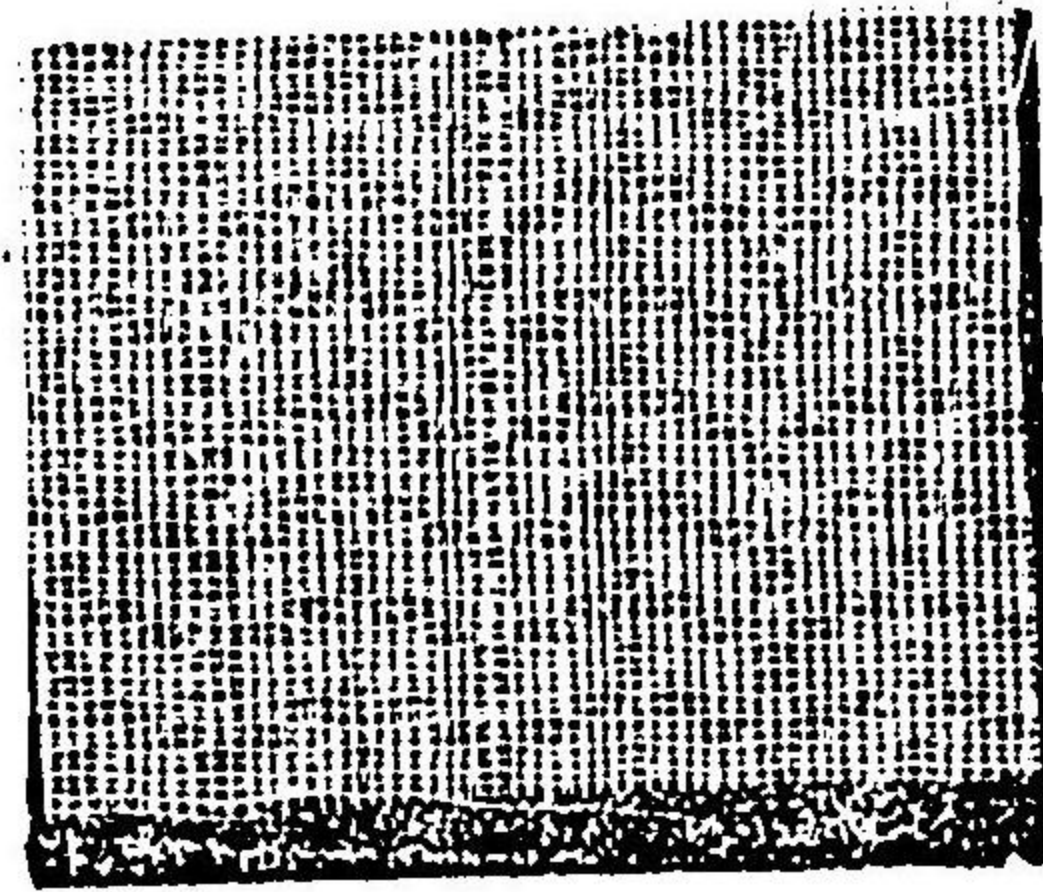
あや霞紹も亦其組織綾市松紹と同一にして只其相違の点は踏木の付け方及びみ方に多少あるのみ即ち左に



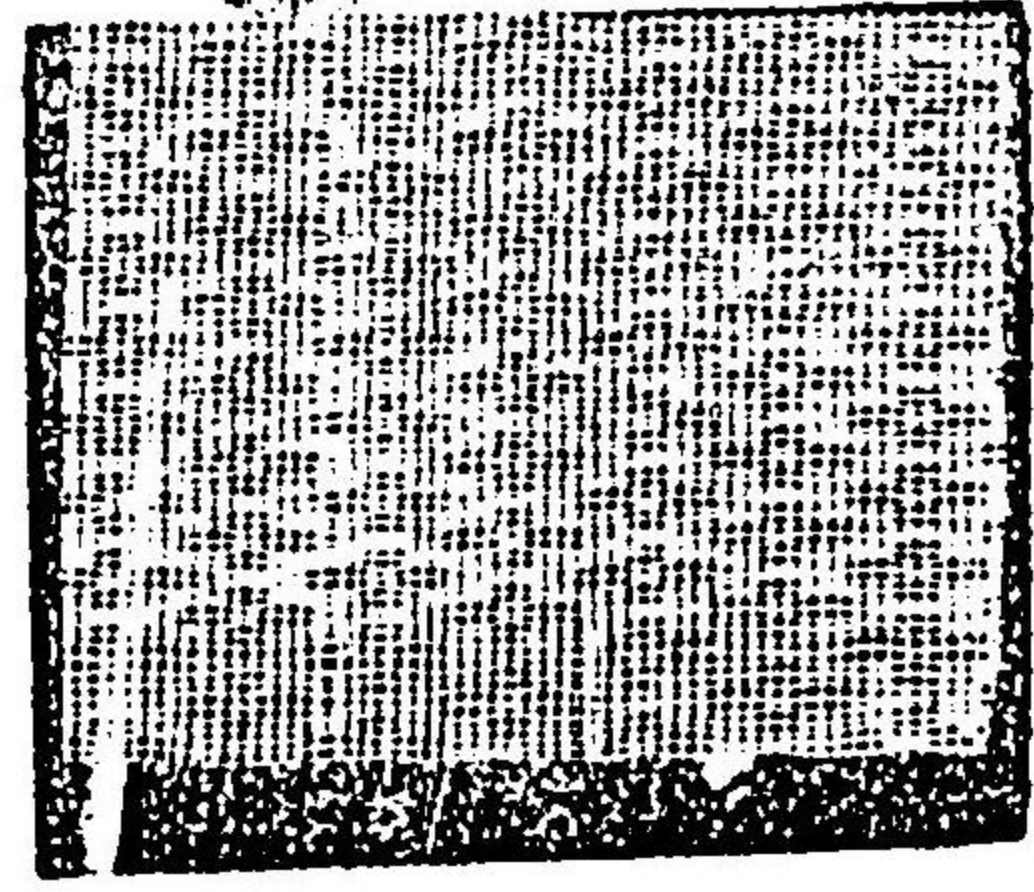
(1) ろ紋平 號四廿第 | ろしひ平 號一廿第



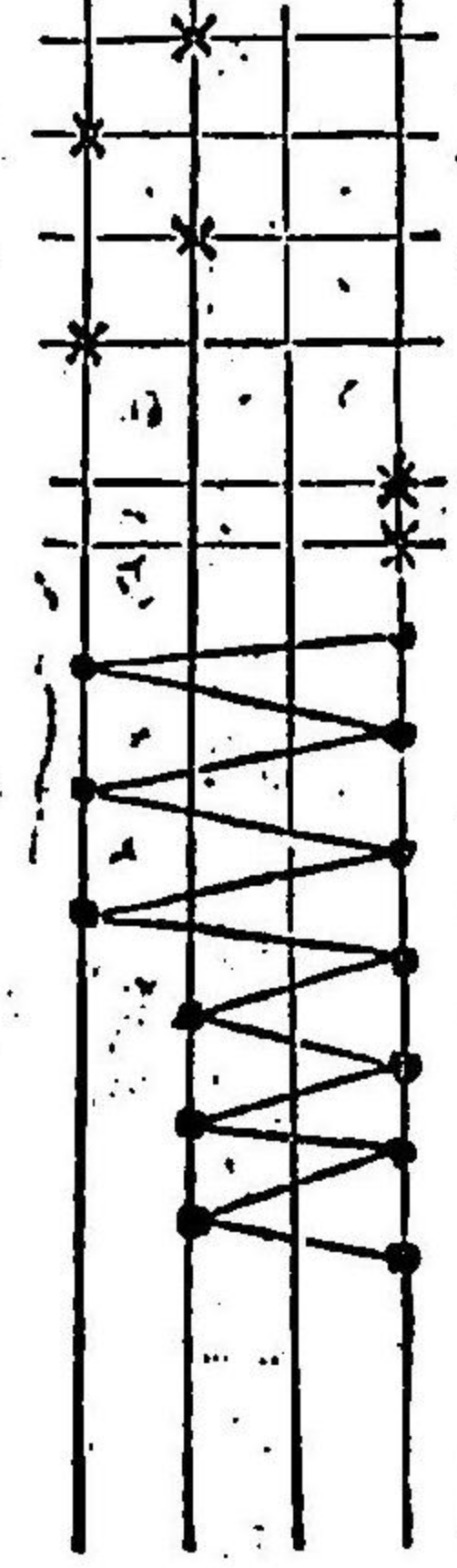
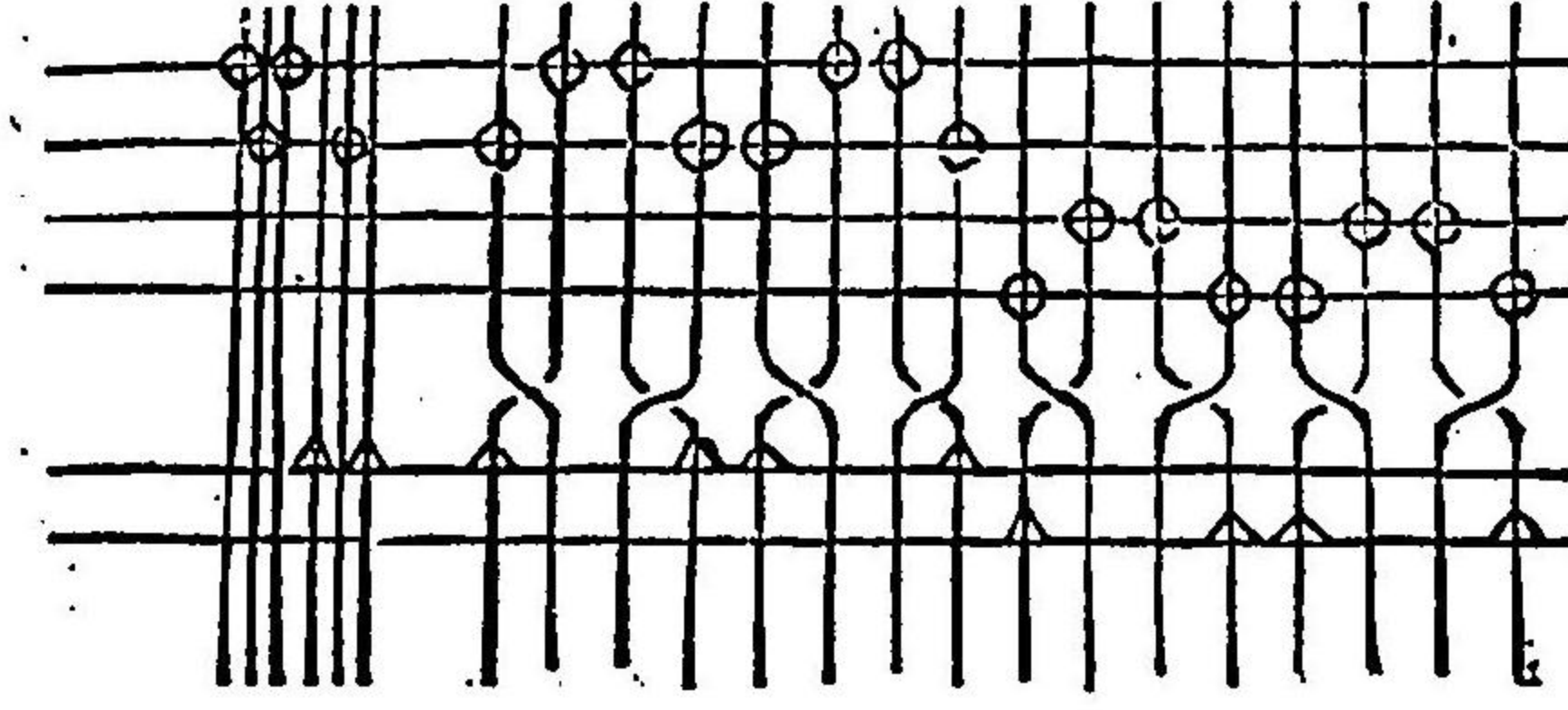
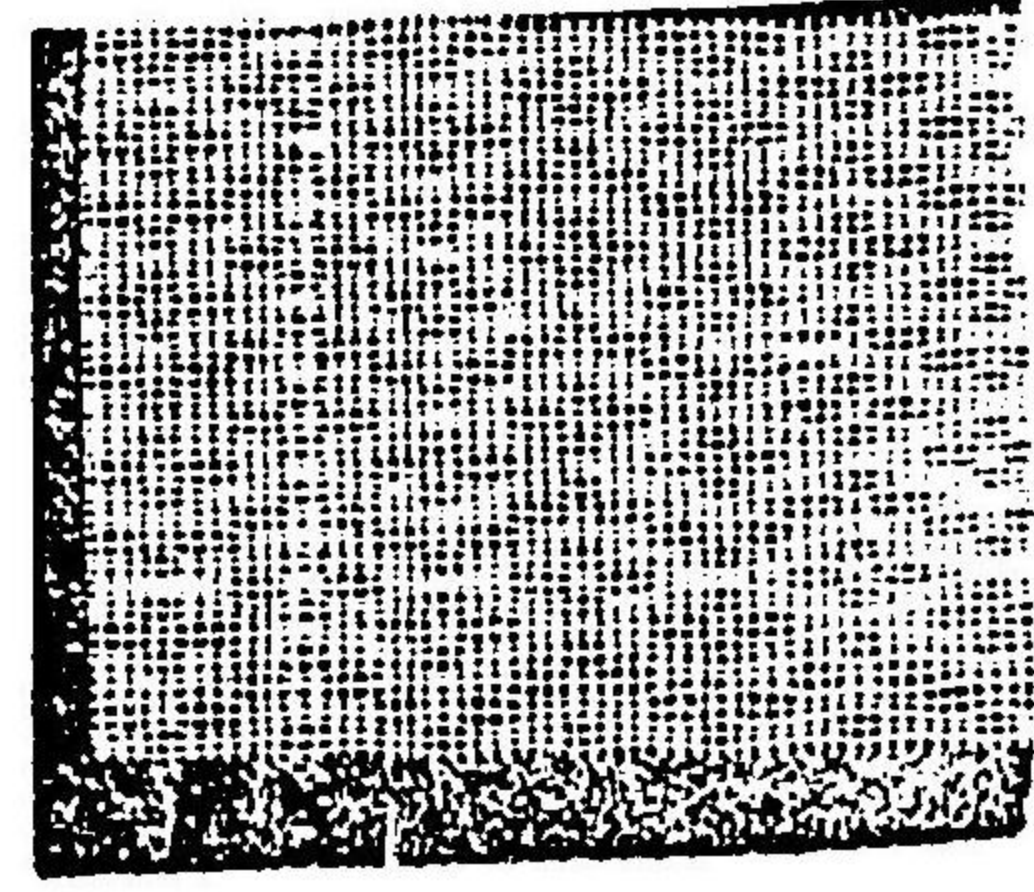
(2) ろ紋平 號五廿第



ろしひ花平 號二廿第



ろしひ重八平 號三廿第



第二十號

綾小豆組組織法

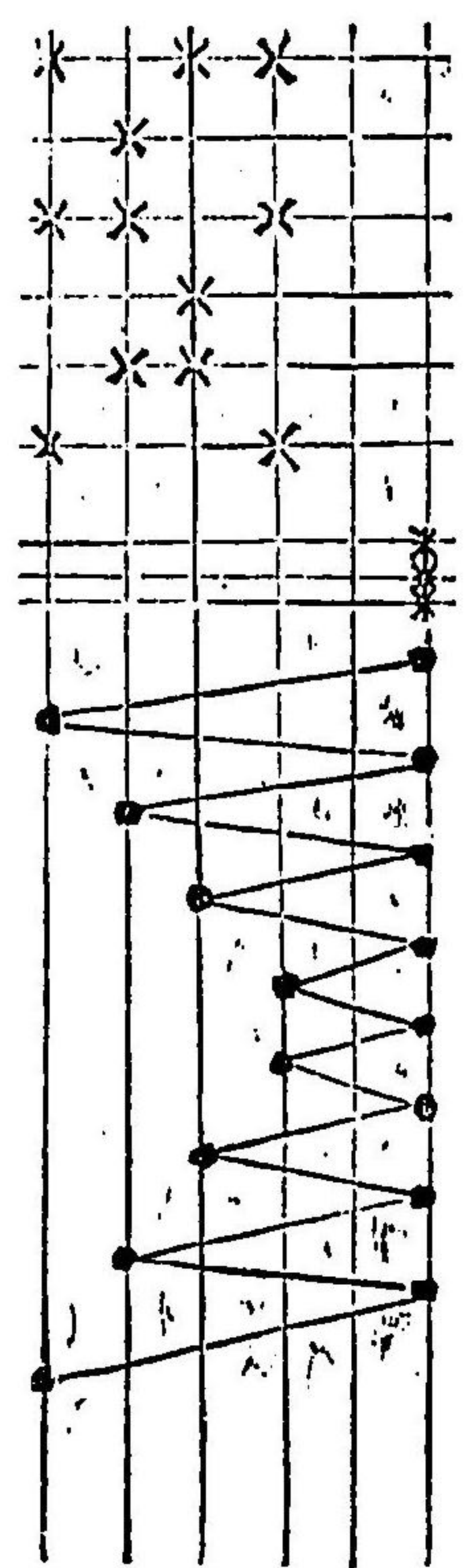
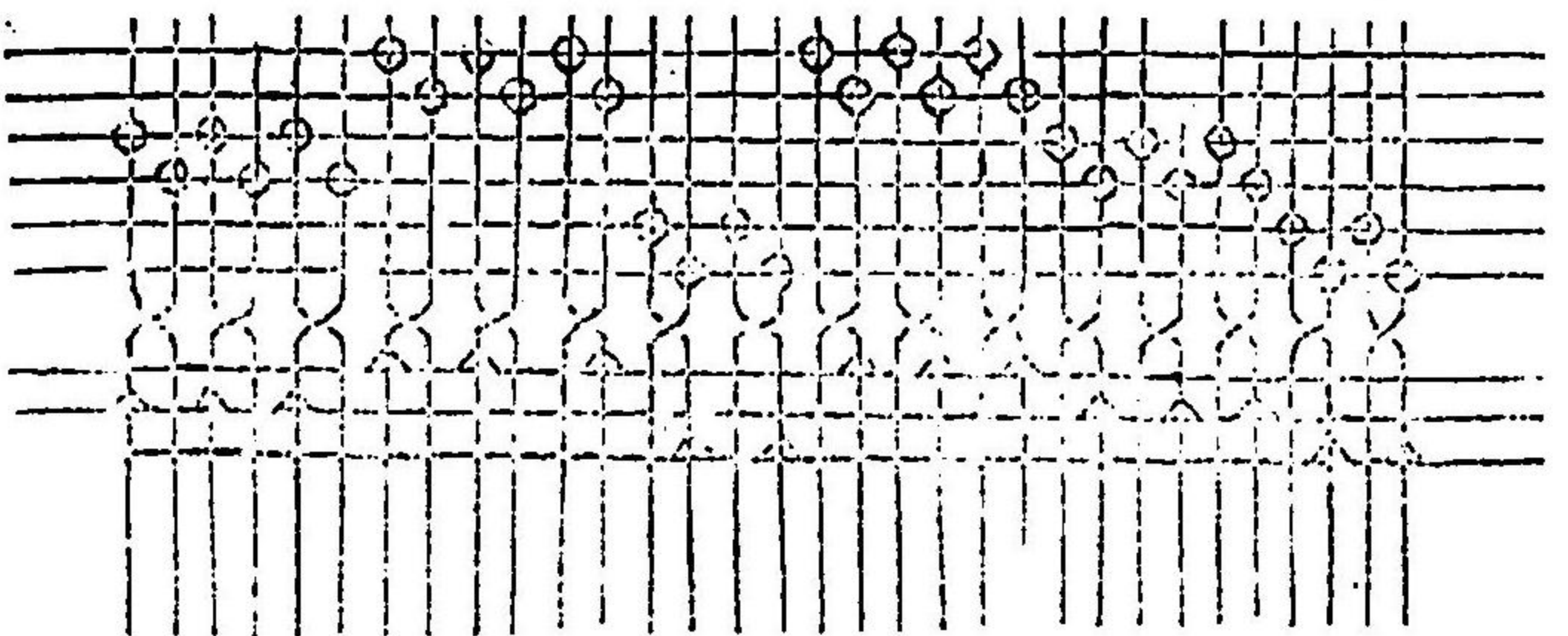
圖の如く其經糸通入及機仕掛とも前法と同一にして踏木の付
け方とふみ方に多少相違あるのみ左の如し

第二十一號 平ひしゝ組織法

左圖の如く無雙綜統六枚振機三枚にして經系通入法は第一經を第一綜統に通入し第二經を第二綜統に第三經を第一綜統に第四經を第二綜統に第五經を第三綜統に第六經を第四綜統に第七經を第三綜統に第八經を第四綜統に第九經を第三綜統に第十經を第四綜統に第十一經を第五綜統に第十二經を第六綜統に第十三經を第五綜統に第十四經を第六綜統に第十五經を第五綜統に第十六經を第六綜統に第十七經を第一綜統に第十八經を第二綜統に第十九經を第一綜統に第二十經を第二綜統に第二十一經を第五綜統に第二十二經を第六綜統に第二十三經を第五綜統に第二十四經を第六綜統に第二十五經を第五綜統に第二十六經を第六綜統に第二十七經を第三綜統に第二十八經を第四綜統に第二十九經を第三綜統に第三十經を第四綜統に第三十一經を第三綜統に第三十二經を第四綜統に通入すへし右三十二經を以て一形となま以下之を反覆す而して振機に經系を通入するには第一第二綜統に通入

せる經糸を第一振機に通入し第三第四綜統に通入せる經糸を
第二振機に通入し第五第六綜統に通入せる經糸を第三振機に
普通振機へ通入せる如く通入すへし而して踏木の結付け及び
踏み方は圖の如くなすへし

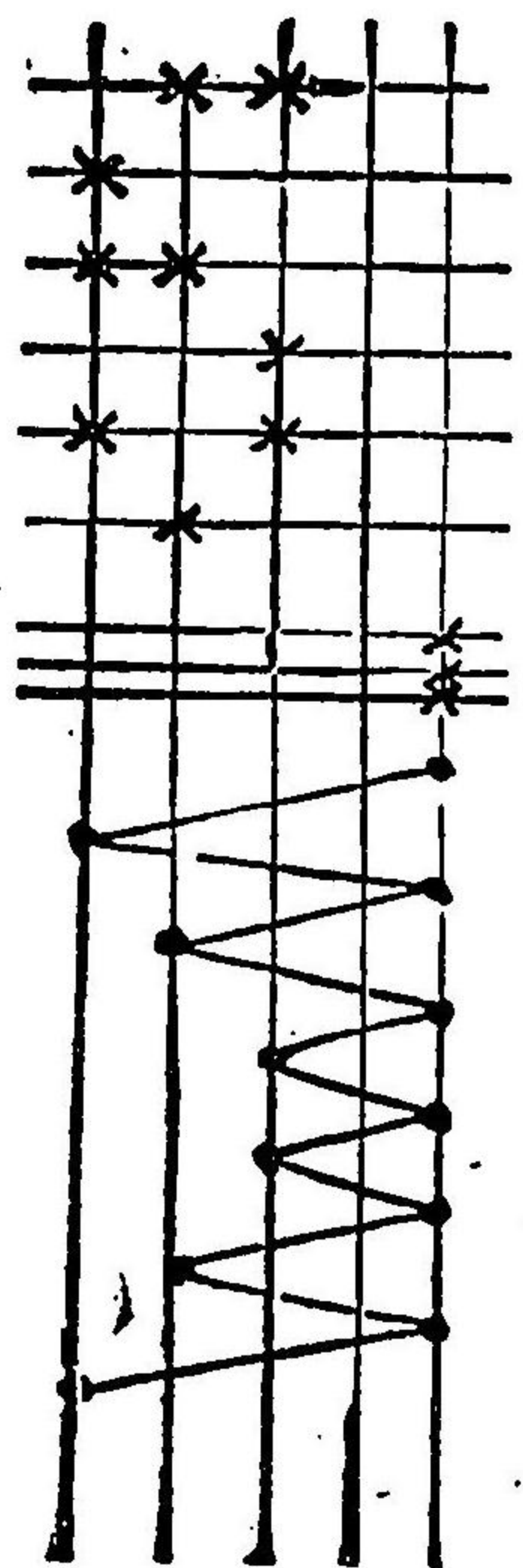
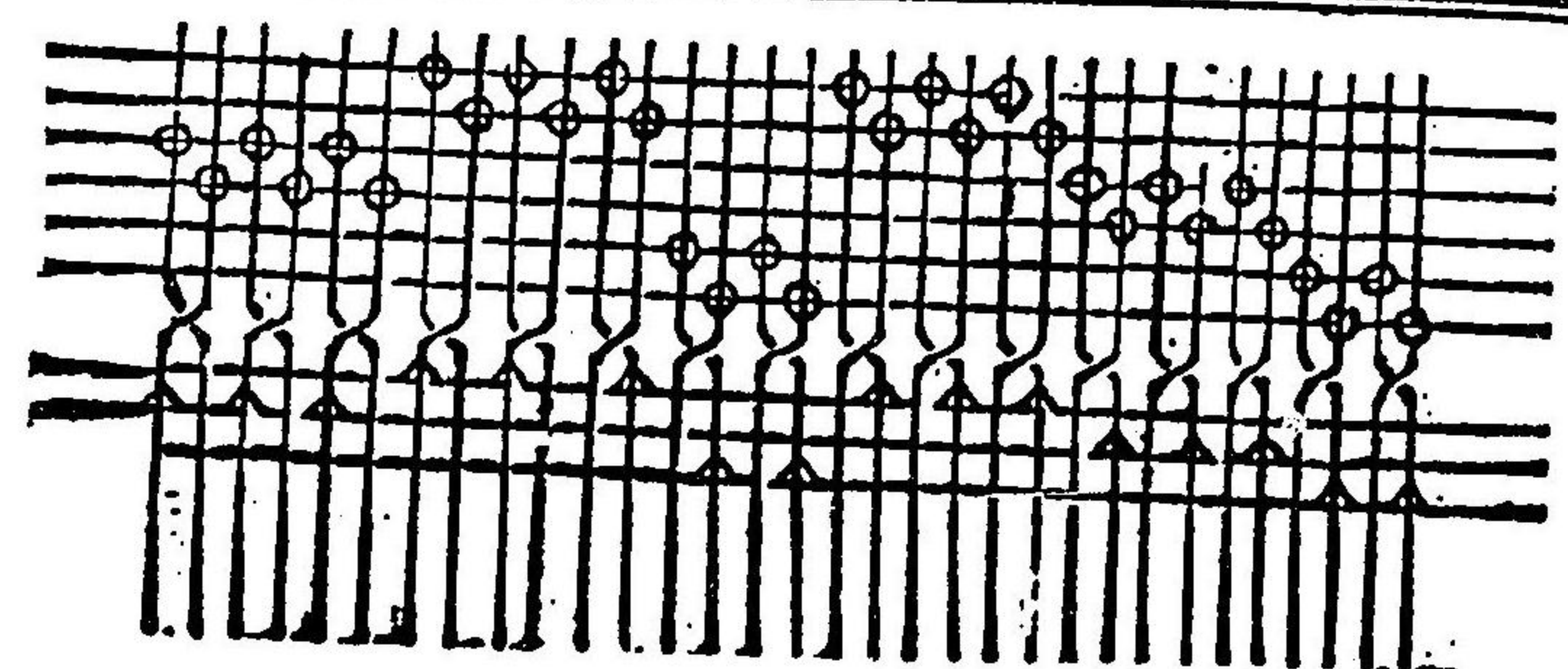
此織物は多く婦人方の夏禮服及び小供の上着等に用めるなり



第二十二號

花菱組組織法

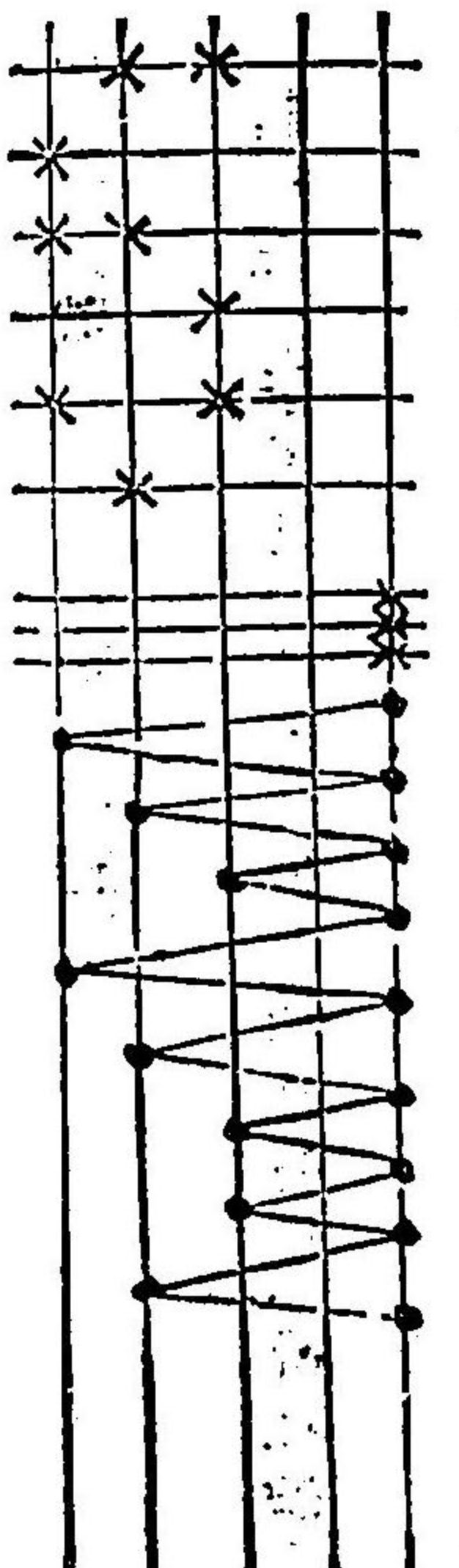
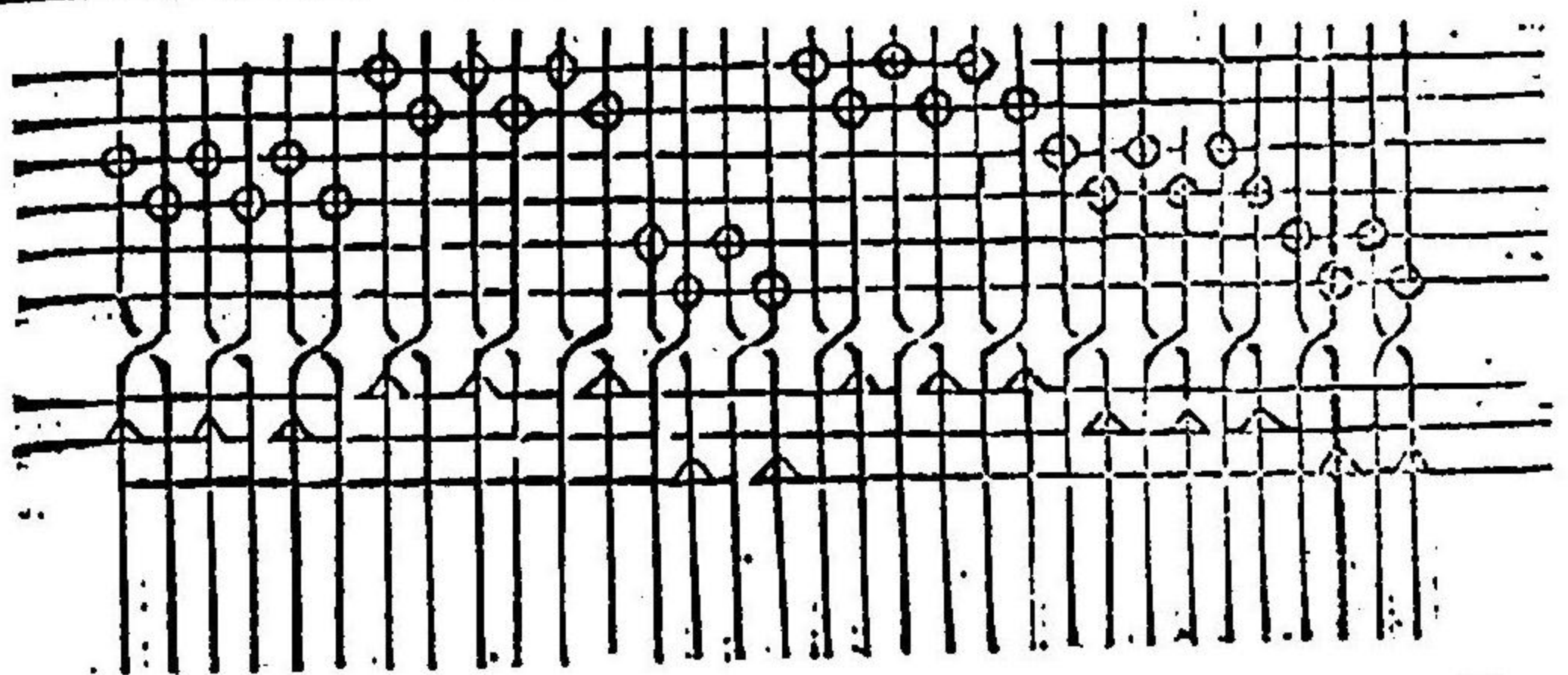
其組織前號と同一にして經糸通入法及び横仕掛に於て少しも
相違なきも只踏木のふみ方及び付け方に多少相違の点あるの
み左の如し



第二十三號

八重菱組組織法

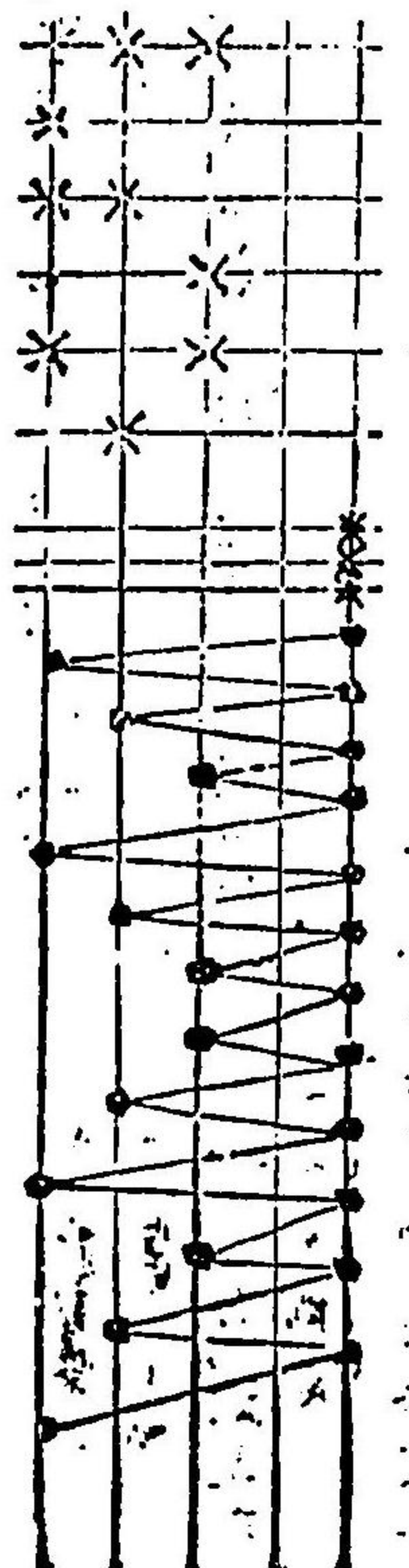
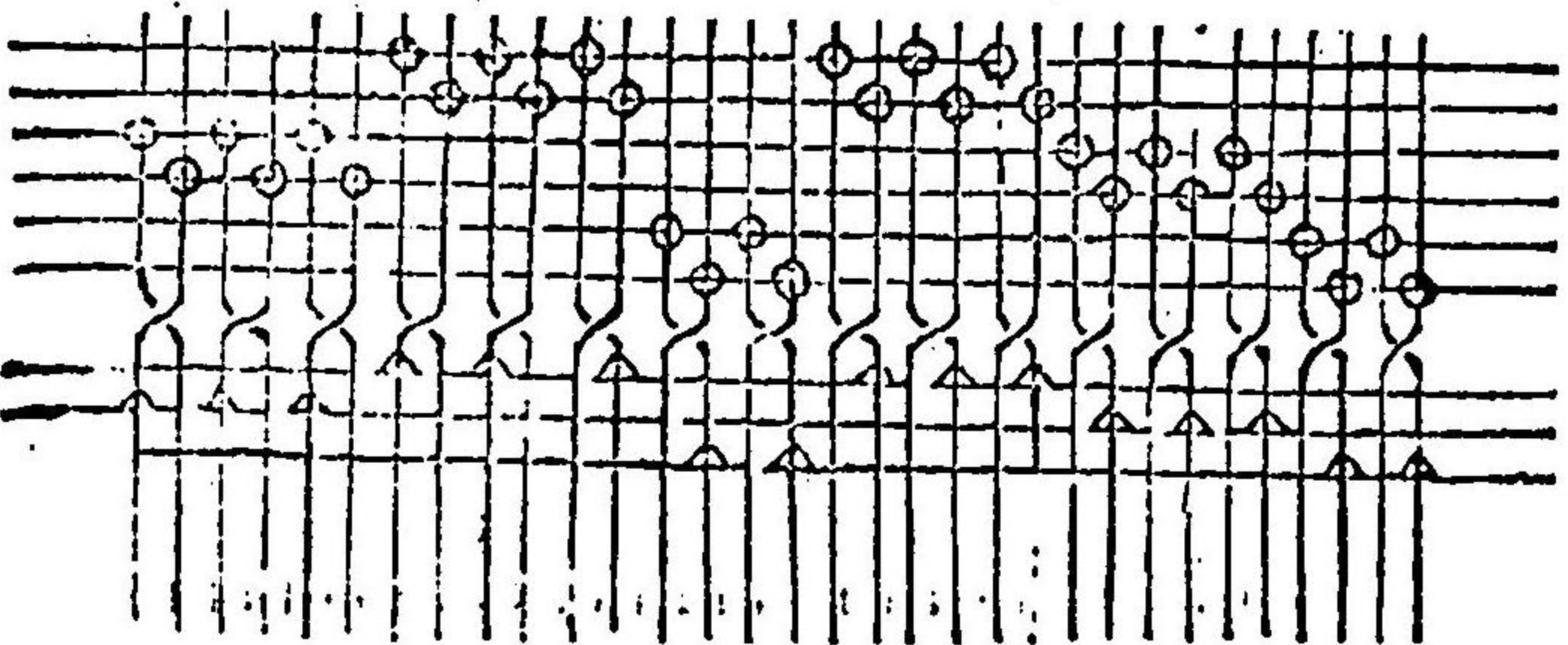
上圖の如く前法と同一にして無雙綜統六枚振機三枚にして經糸通入法も前法と同一なり只踏木の付け方と踏み方に多少の相違あるのみ即ち左の如し

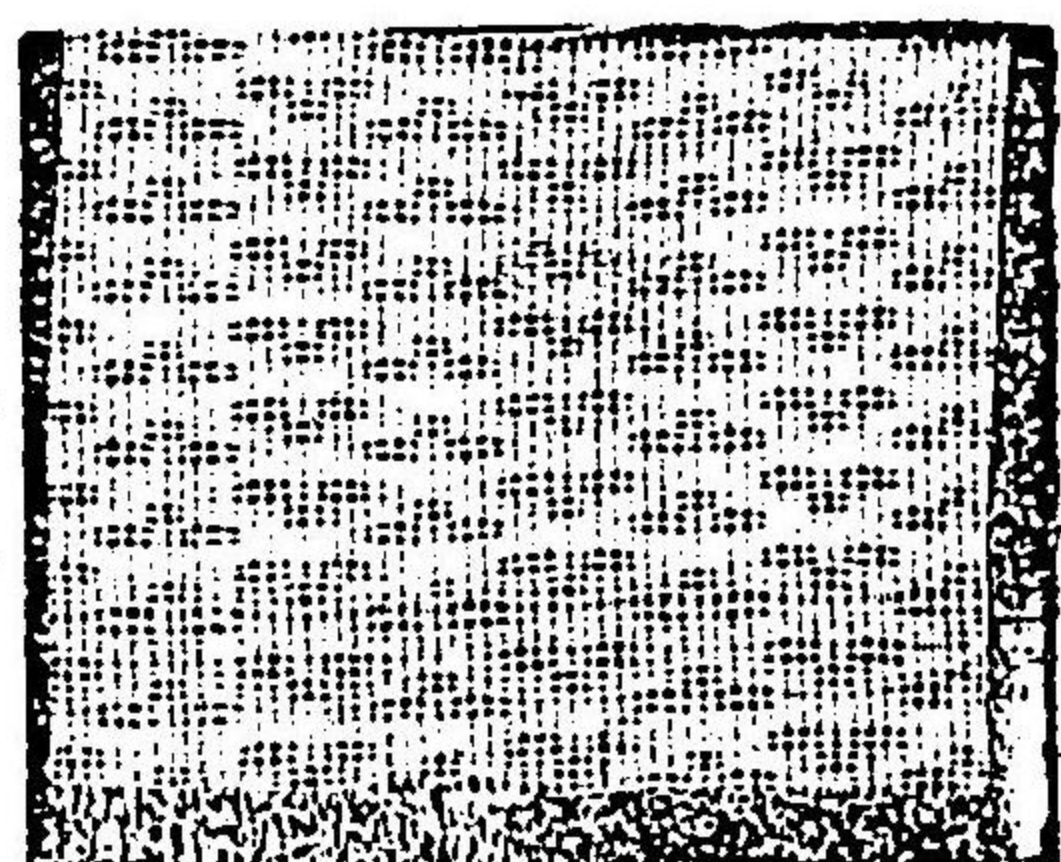
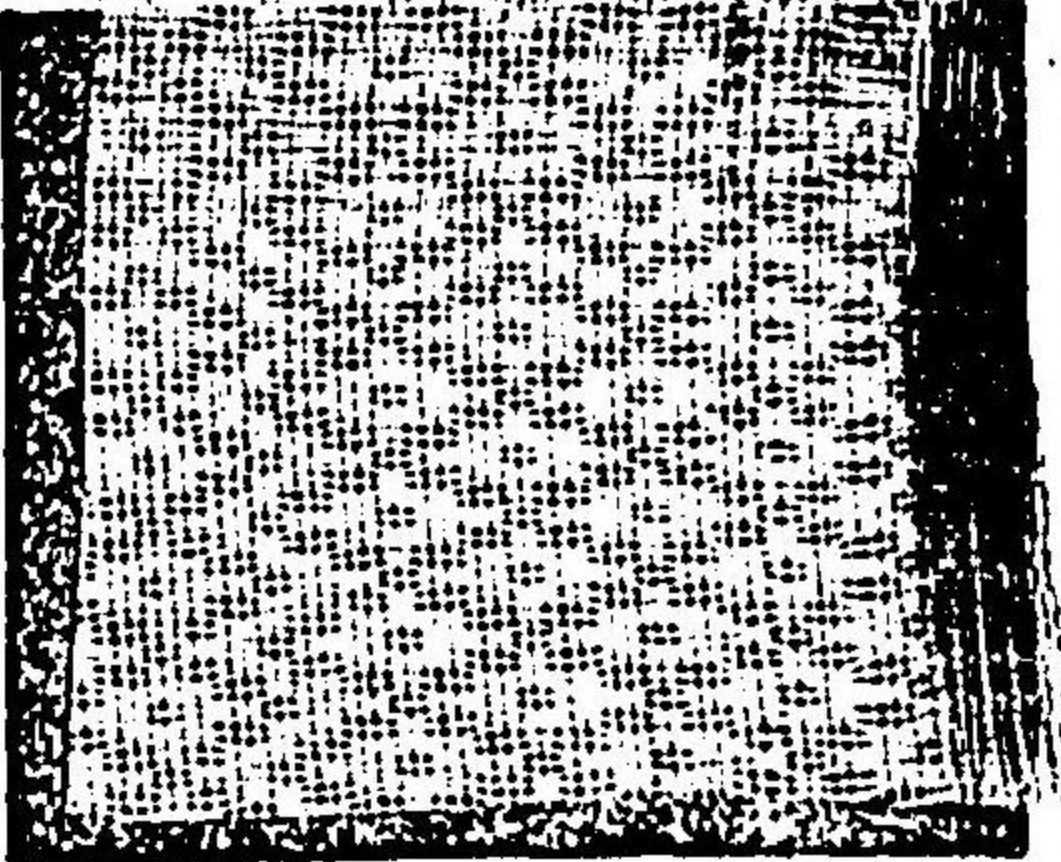
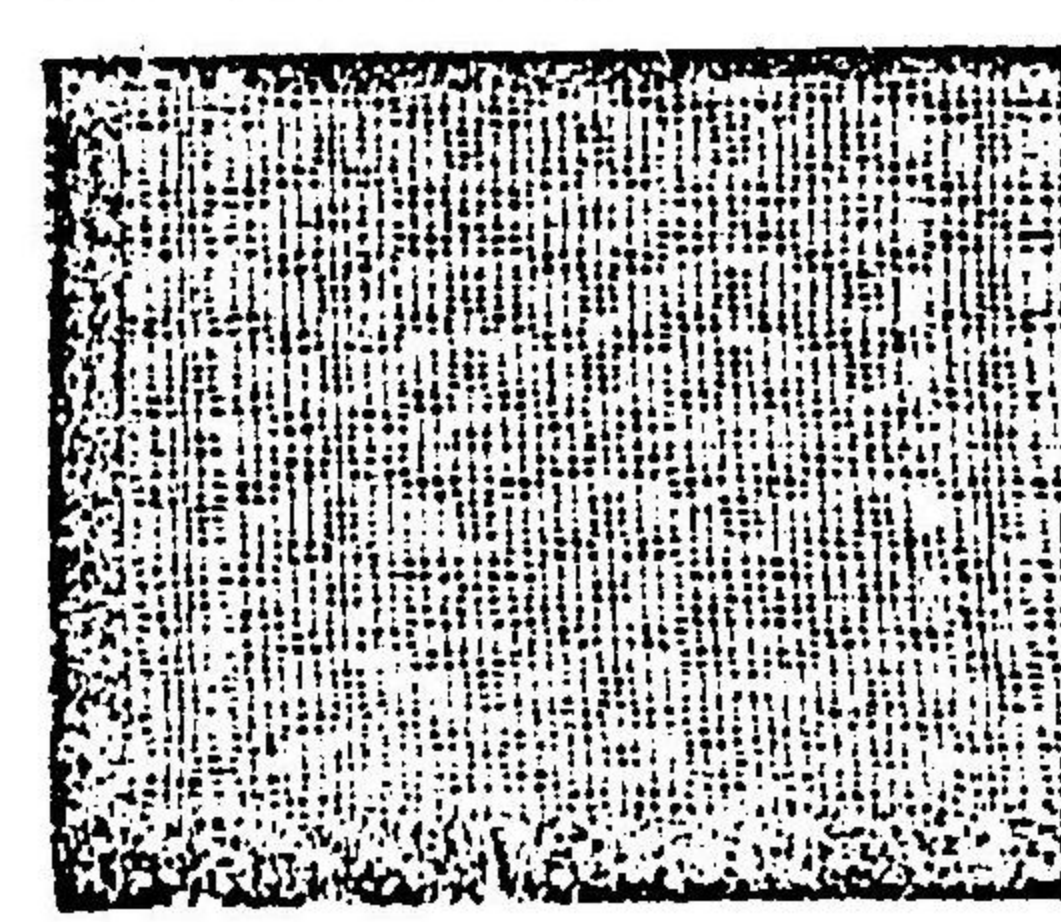
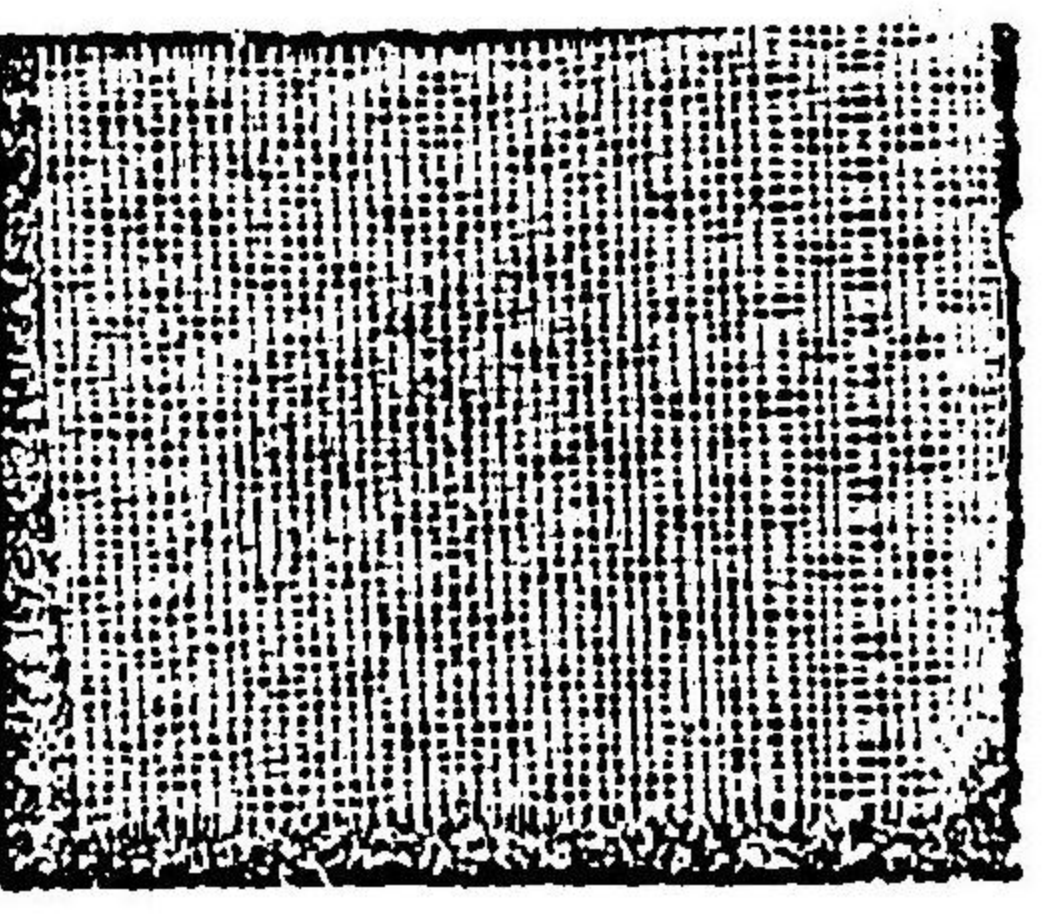
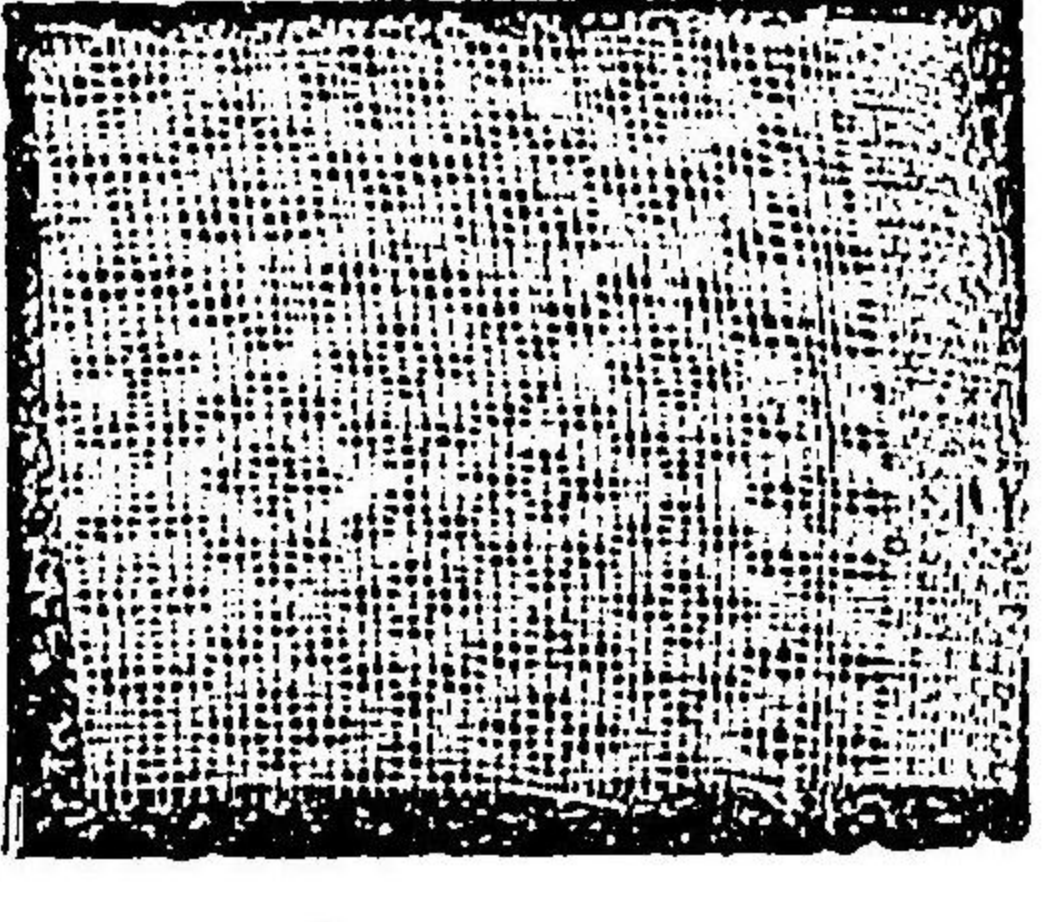


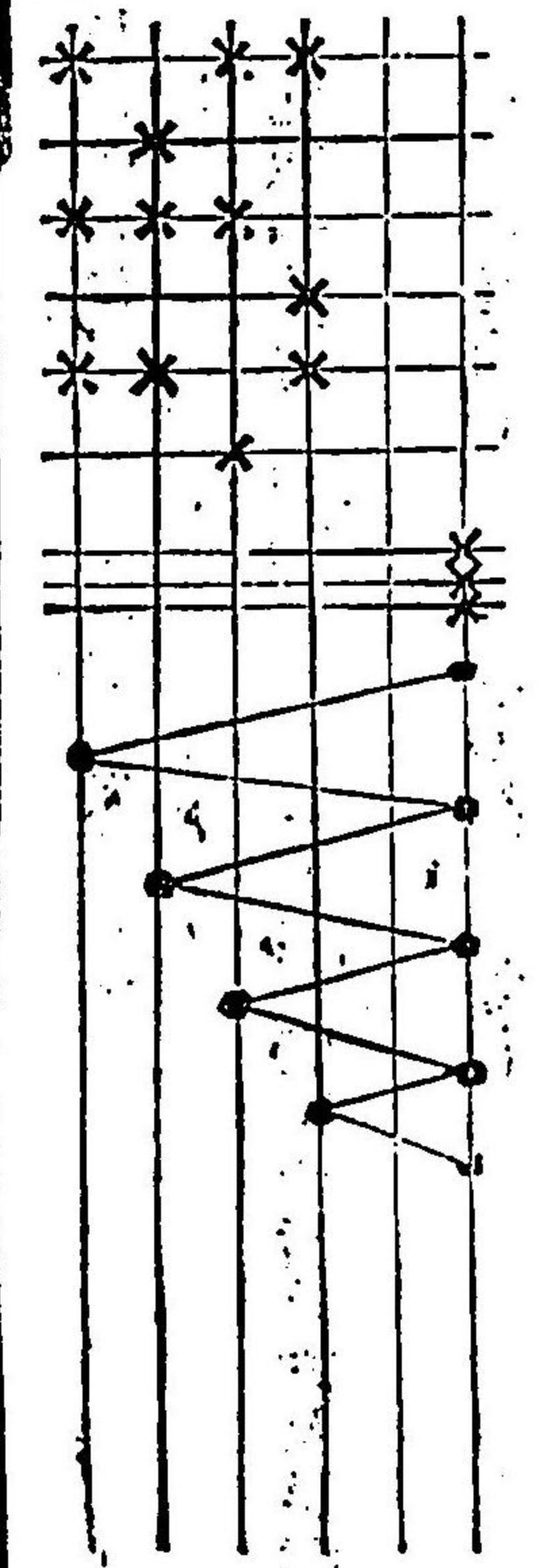
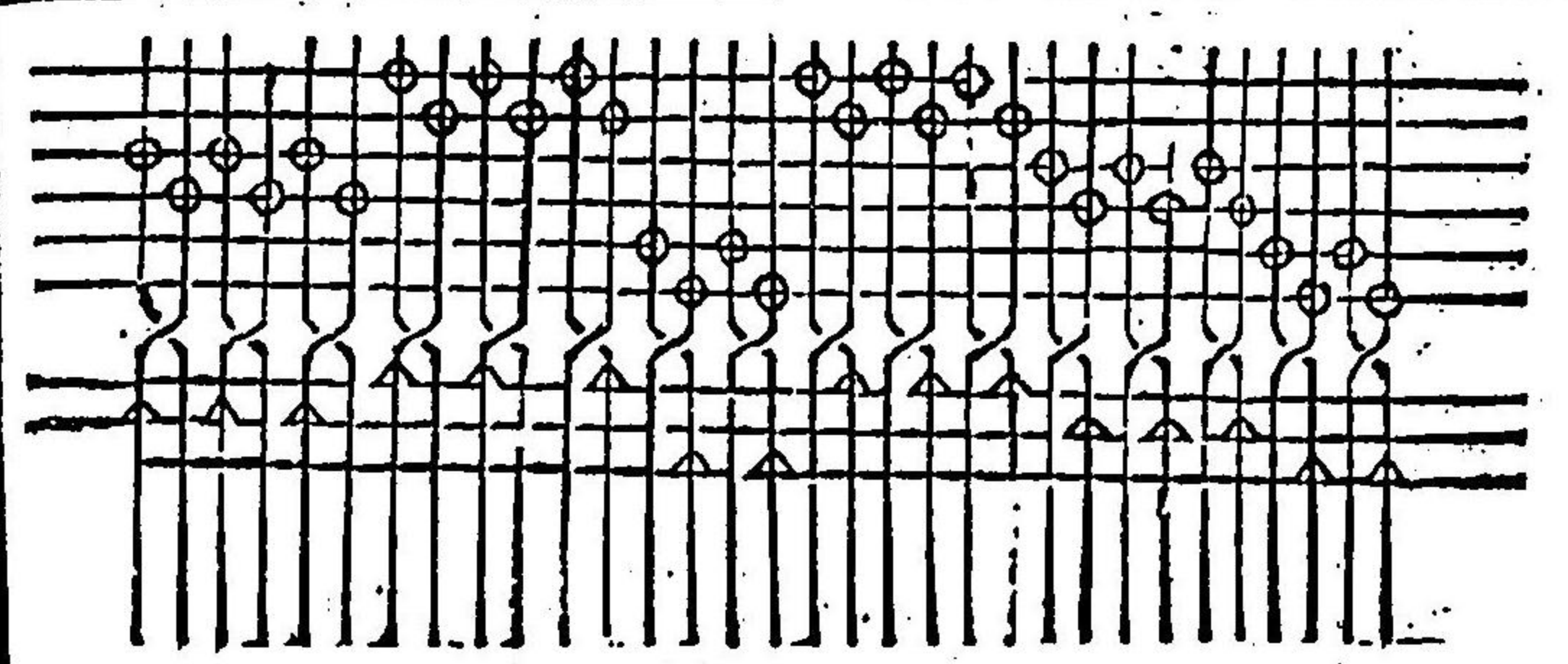
第二十四號

平紋組組織法の一

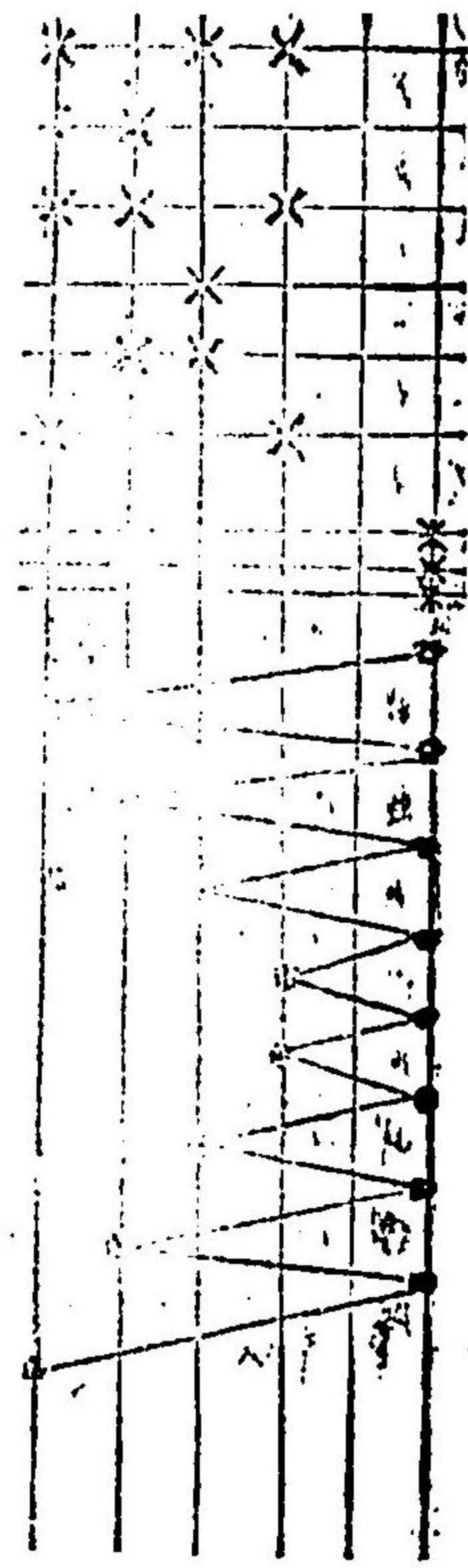
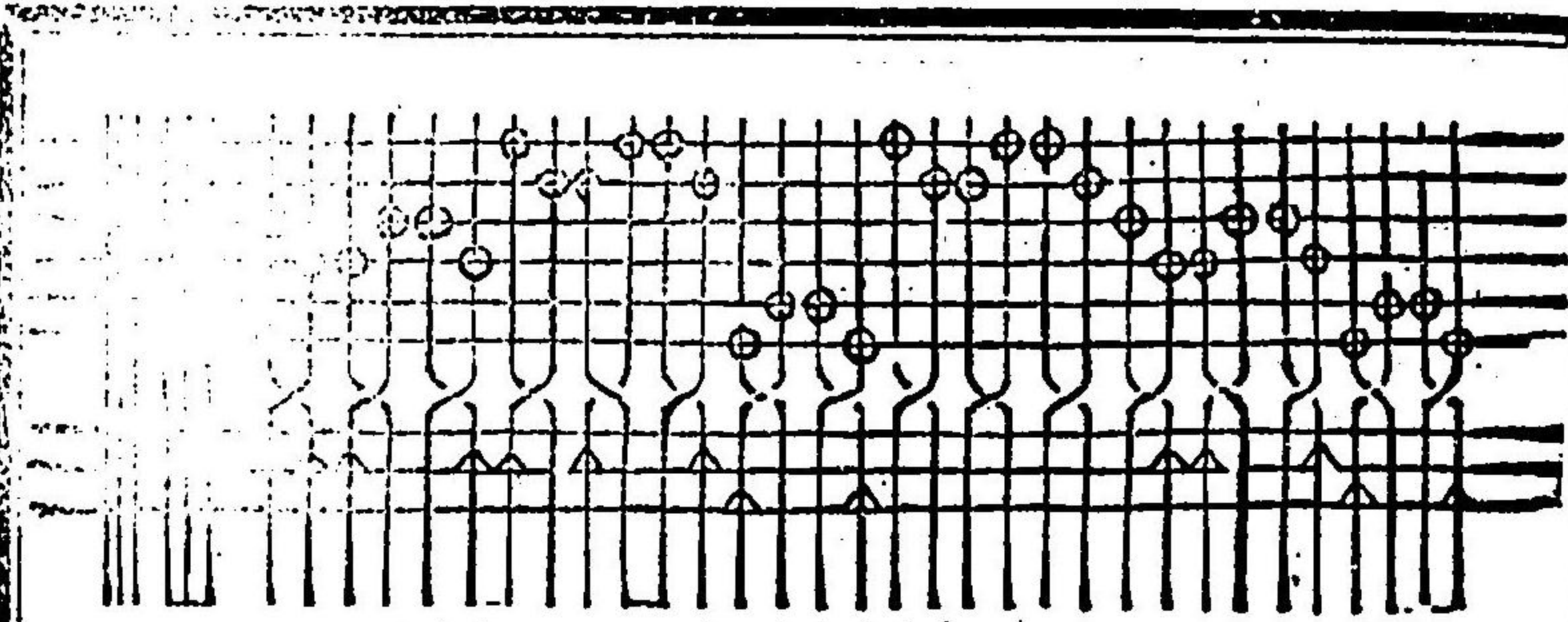
此組織も前法組織と同一なり只踏木の付け方及び踏み方に多少の相違あるのみ即ち左圖の如し



<p>(1) ろ紋やあ 號九廿第</p> 	<p>ろしひやあ 號六廿第</p> 
<p>(2) ろ紋やあ 號十三第</p> 	<p>ろしひ化やあ 號七廿第</p> 
	<p>ろしひ重八やあ 號八廿第</p> 



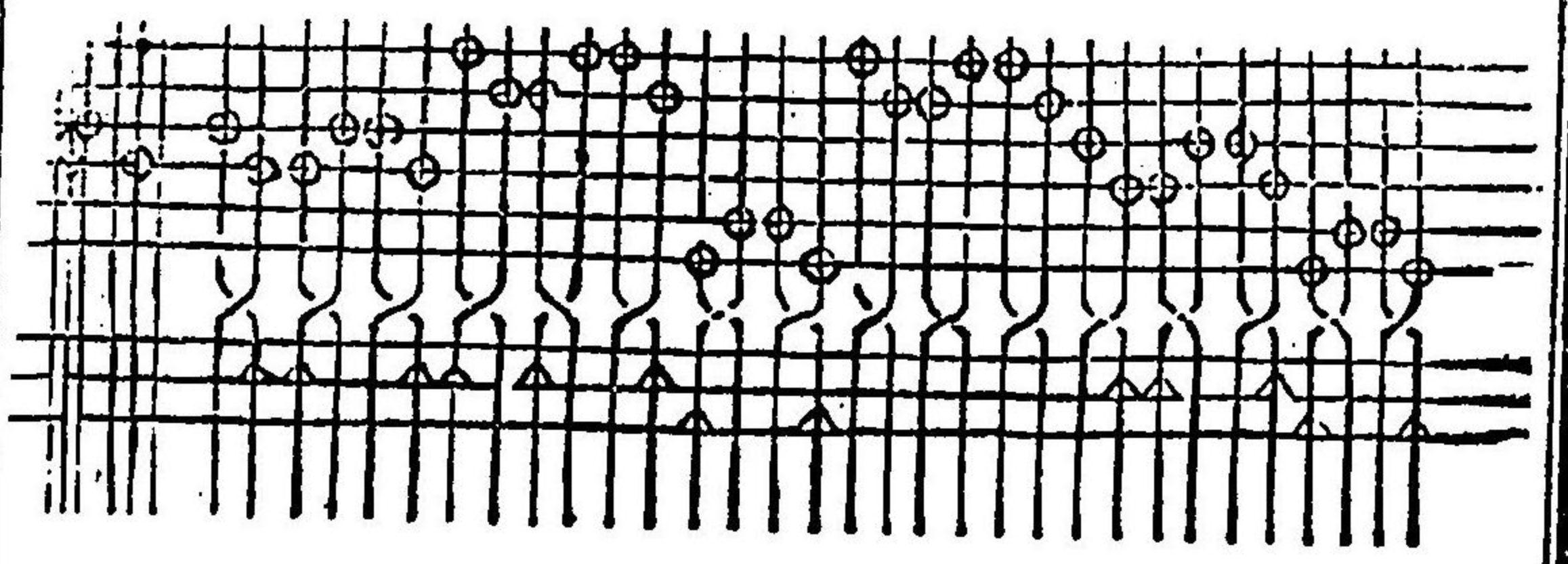
第二十五號 平紋紹組織法の二
 圖の如く無雙綜統六枚振機三枚にして經糸通入法及び機仕掛
 は總て前法と同一なり只踏木の付け方と踏方に於て多少の相
 違あるのみ即ち左の如し



第二十六號

綾菱組組織法

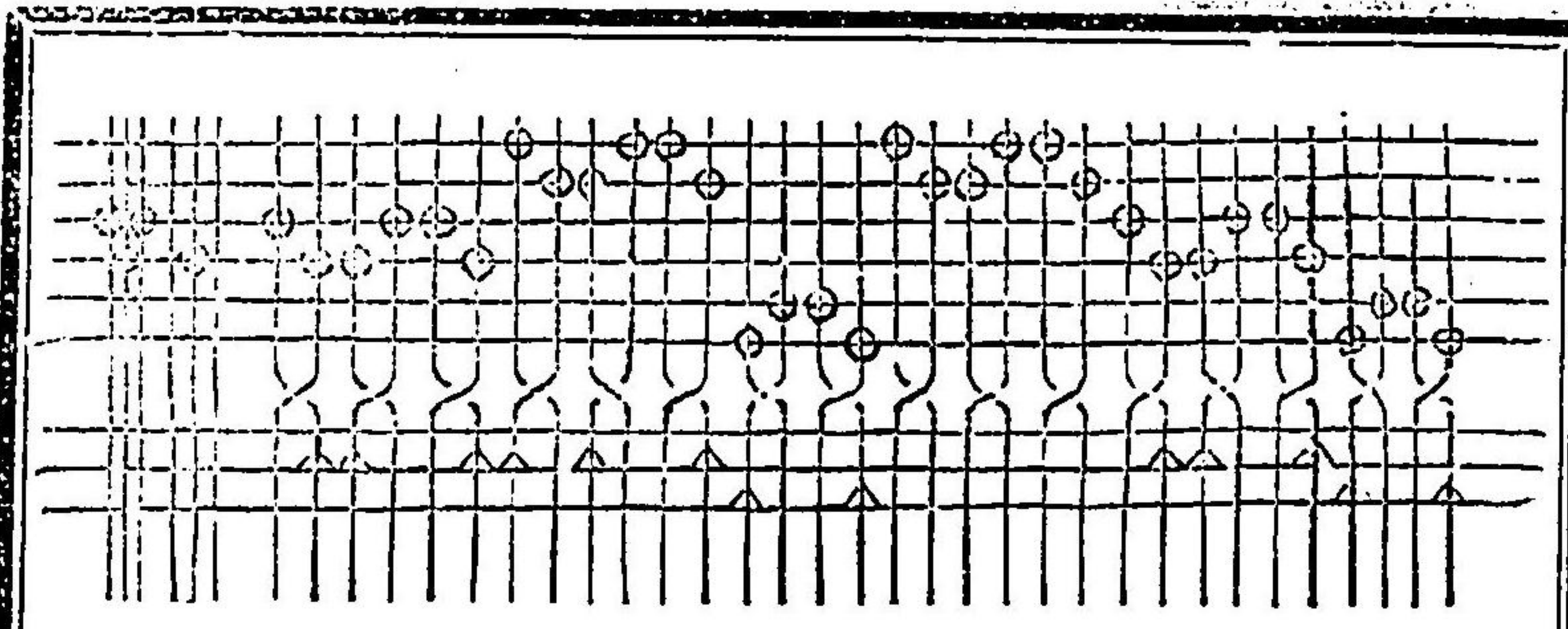
あや菱組の組織は圖の如く無雙綜統六枚振機三枚にして經糸
 通入は第一經を第一綜統に第二經を第二に第三經を第三に第
 四經を第一に第五經を第三に第六經を第二に第七經を第四に第
 八經を第三に第九經を第五に第十經を第四に第十一經を第二
 五に第十二經を第六に第十三經を第六に第十四經を第五に第
 十五經を第五に第十六經を第六に第十七經を第一に第十八經
 を第二に第十九經を第六に第二十經を第六に第二十一經を第
 二に第二十二經を第六に第二十三經を第六に第二十四經を第
 經を第六に第二十五經を第六に第二十六經を第六に第二十七
 四に第二十八經を第六に第二十九經を第六に第三十經を第六
 卅二經を第四綜統に通入するなり振機の經糸通入法は平花
 しろ等と同一なり踏木の結び方及びひらみ機圖の如し



第二十七號

綾菱組組織法

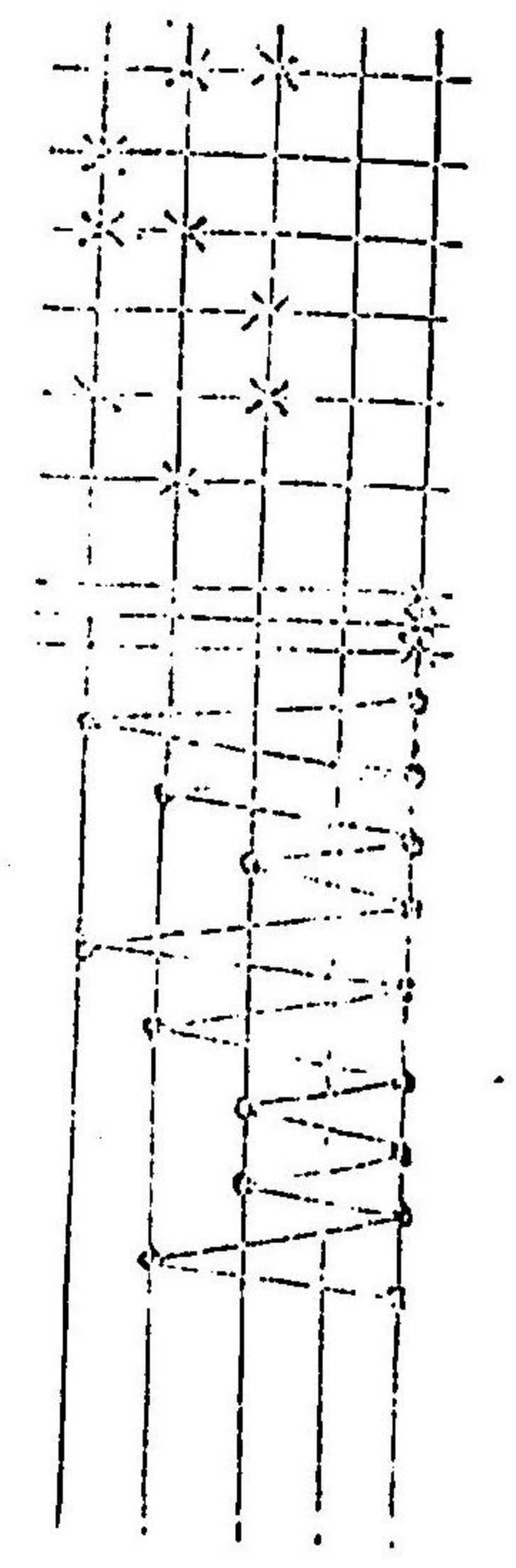
あや菱組は圖の如く其組織乃ち經糸通入法振機通入法凡て前
 綾花菱組と同一なり只踏木の釣り方及び踏み方に於て多少の
 相違あるのみ圖の如し

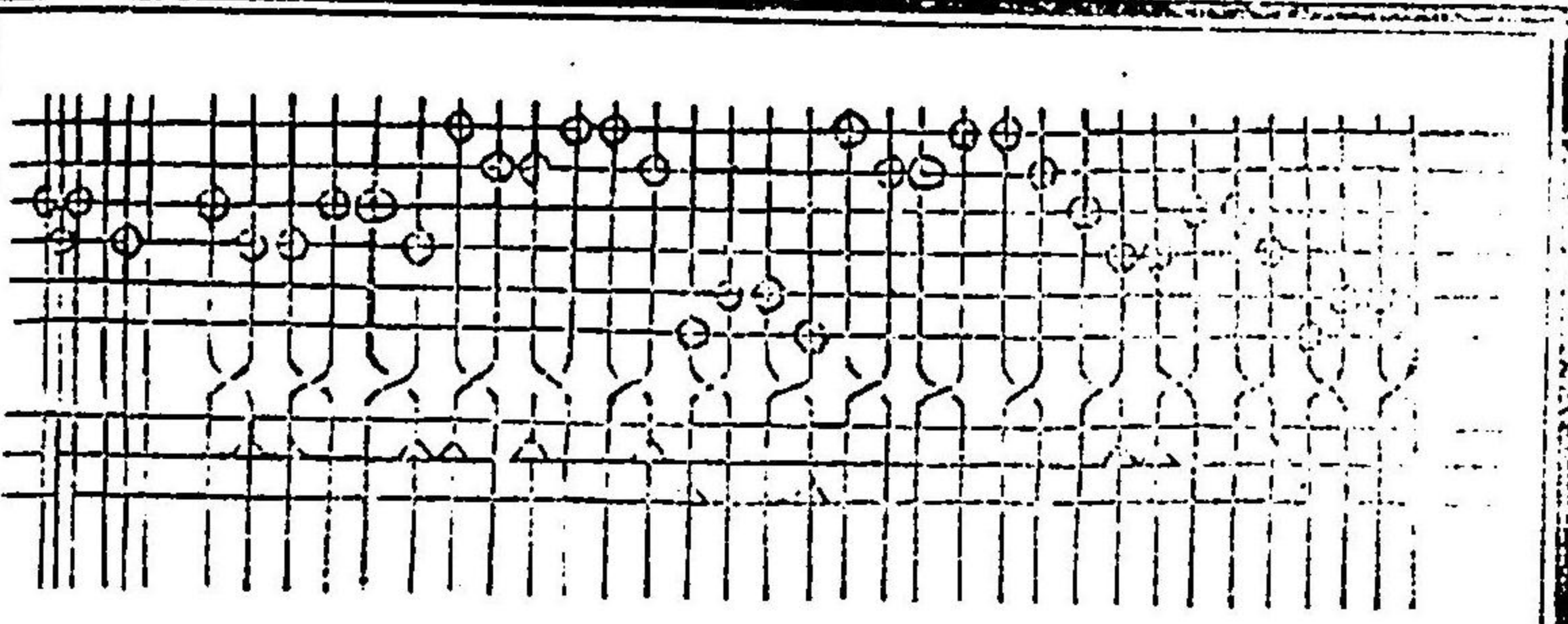


第二十八號

綾八重菱組組織法

あや八重菱組も其組織前法と同一にして乃ち無雙綜統六枚振
 機三枚にして經糸通入法其他一切前法と同一なり只踏木の釣
 り方及び踏み様に依て相違あるのみ乃ち踏木五本にして北踏
 み様は圖の如し

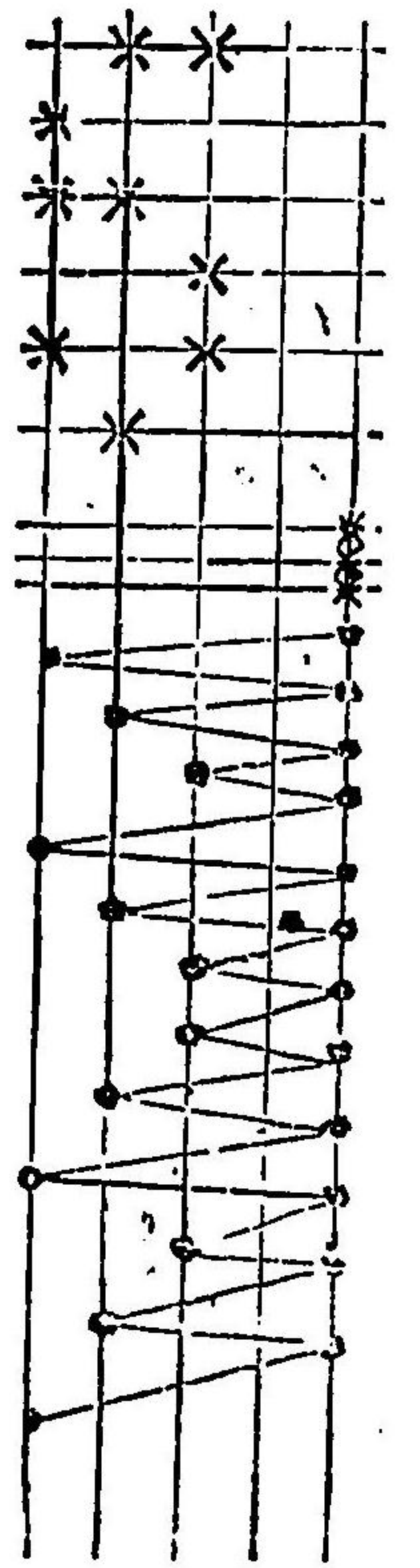




第二十九號

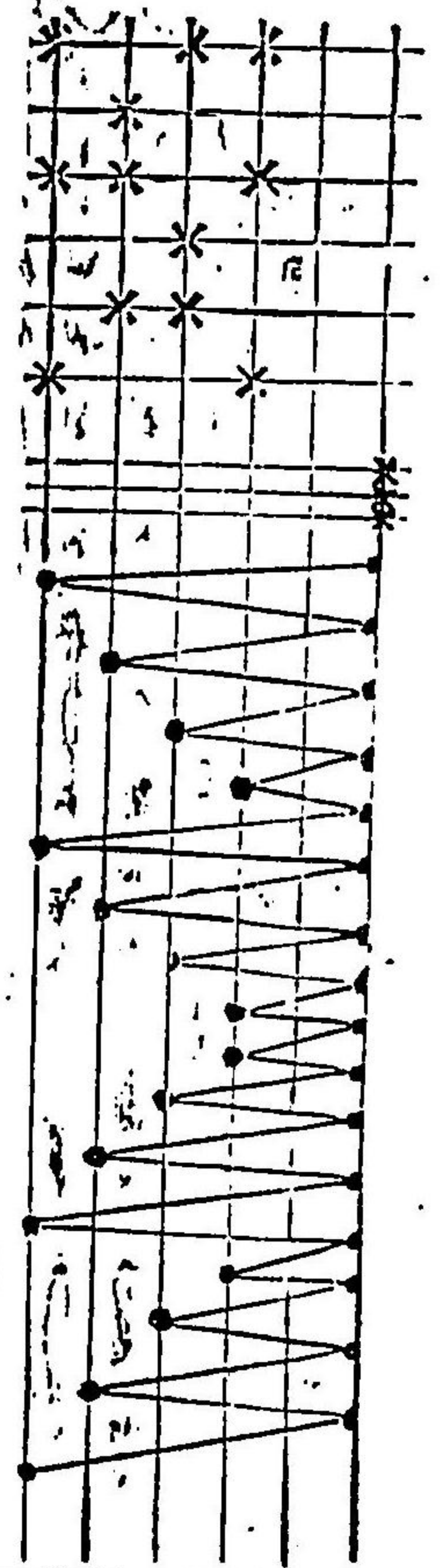
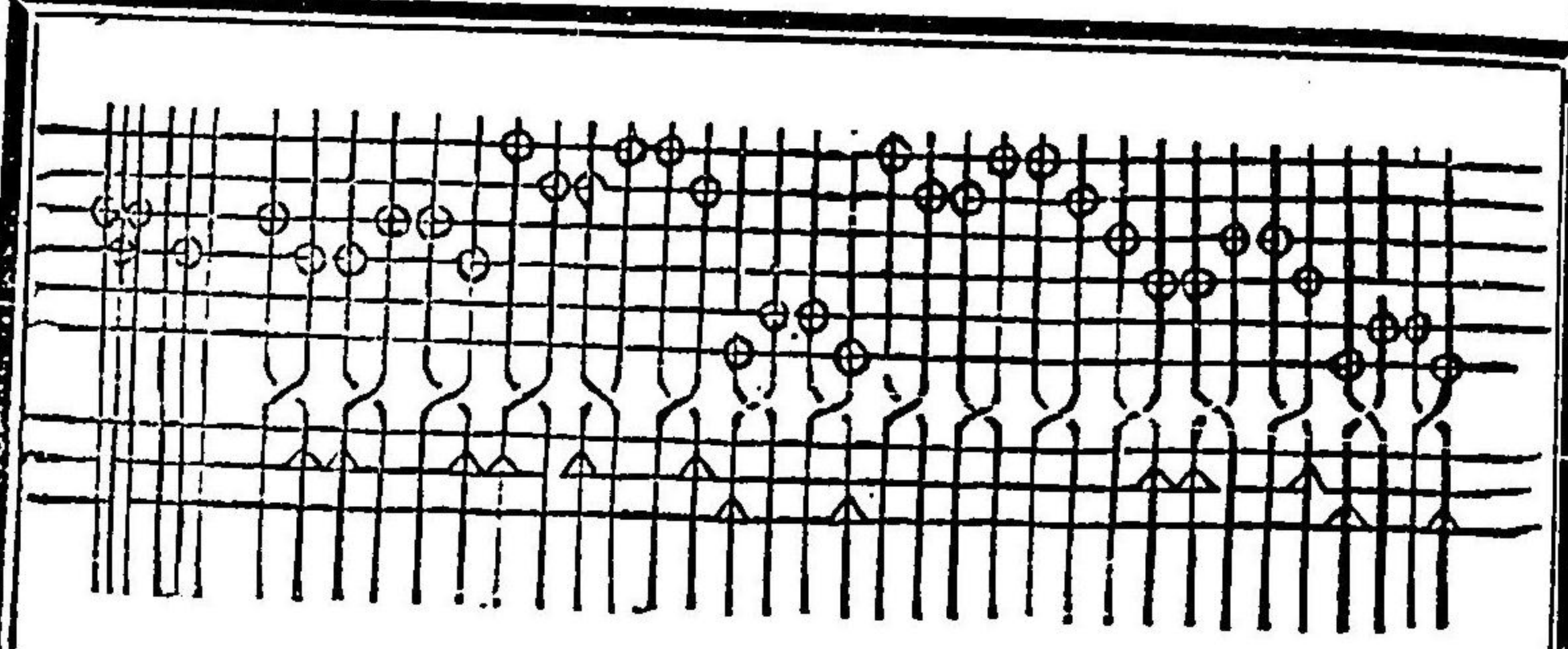
あや紋組織法の二

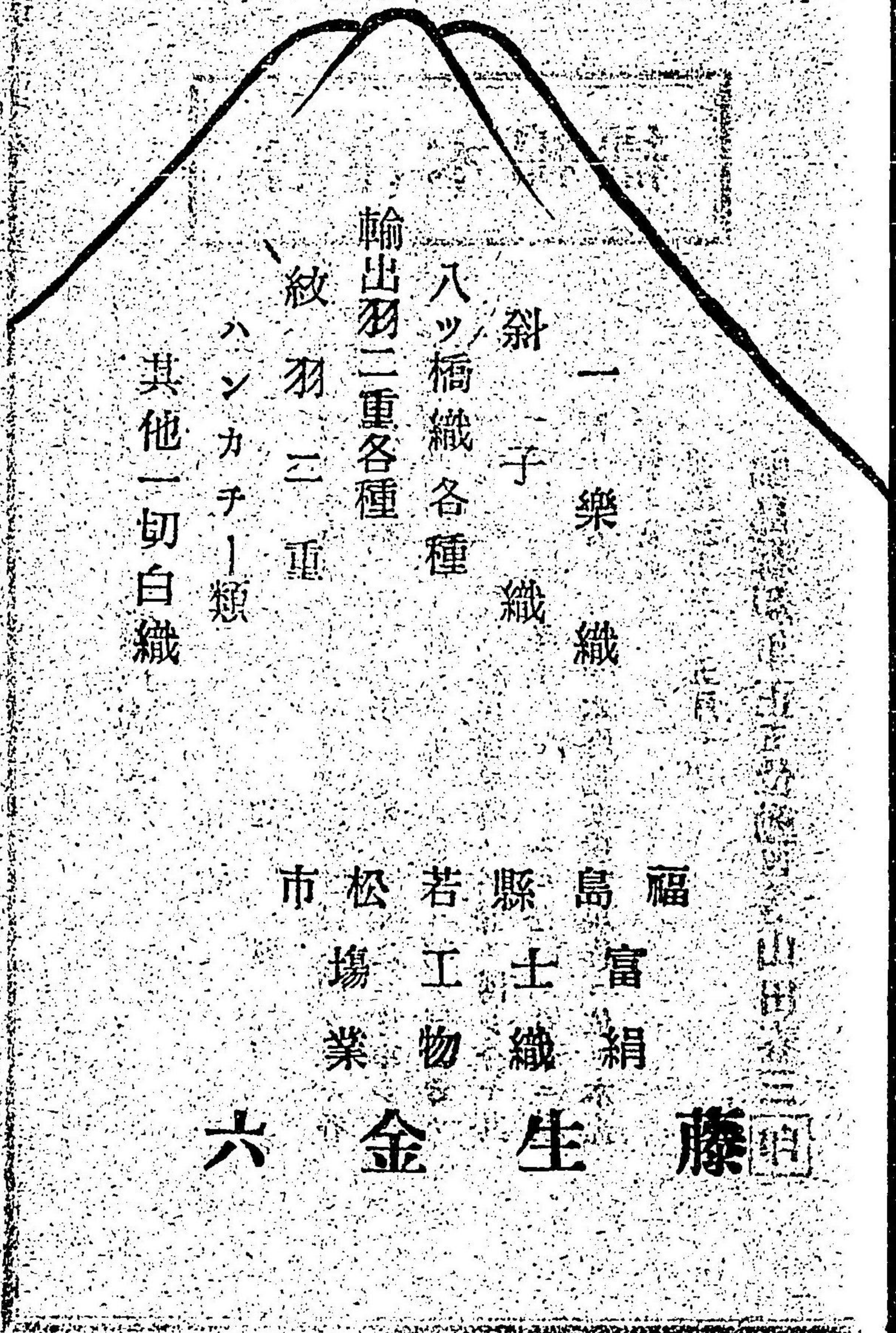
圖の如く無雙綜統六枚振機三枚にして經糸通入法其他機仕掛等總て前法と同一なり只踏木の釣り様及び其踏み方に相違あるのみ乃ち左の如し



第三十號 綾紋組織法の二

機組織其他經糸通入法等總て前法と同一なり然れども其踏木の釣り方及びみ方に於て相違あり左の如し





山出

一 樂 織

斜 子 織

八ッ橋織各種

輸出羽二重各種

紋羽二重

ハンカチー類

其他一切白織

福 富 絹

島 士 織

縣 工 物

若 場 業

松 業

市

藤生

金

六

六



會津木綿織

褒賞授與證寫

若松市 常吉

資性剛直夙ニ志ヲ木綿織造ノ改良ニ傾ケ屢々各地ヲ視察シ染織工場ヲ建設シ率先之ニ從事シ又織物同志會ヲ起シテ弊害ノ矯正ニ努メ同業者ヲ鼓舞誘掖シ遂ニ會津綿織物ノ名聲ヲ博シ今ヤ其産額數萬圓ノ多キニ至ラシムル等洵ニ實業ニ精勵ナル者トシ仍テ本縣勸業褒賞規程ニ依リ木盃壹個ヲ賞與ス

明治三十三年五月十日

福島縣知事正五位勳四等山田春三印

銅鏡製の木

綿織物は實用的經

濟的にして意匠の斬新に

して優美高尚なるは需用諸君の

知らるゝ處なり

銅鏡製木綿織物は會津地方聯合共進會に於て銅牌を拜受せり且つ各地の覽會共進會に於て十四の褒賞を得たり

本店は數ヶ所に染織工場を設け需用諸君の

便利を主とし亦誠以て製造致し候

に付澤山御用命仰付下され

度伏して奉願上候

敬白

木綿織物製造

各縣精藍和法

紡績石灰貝灰

卸 商

利 常

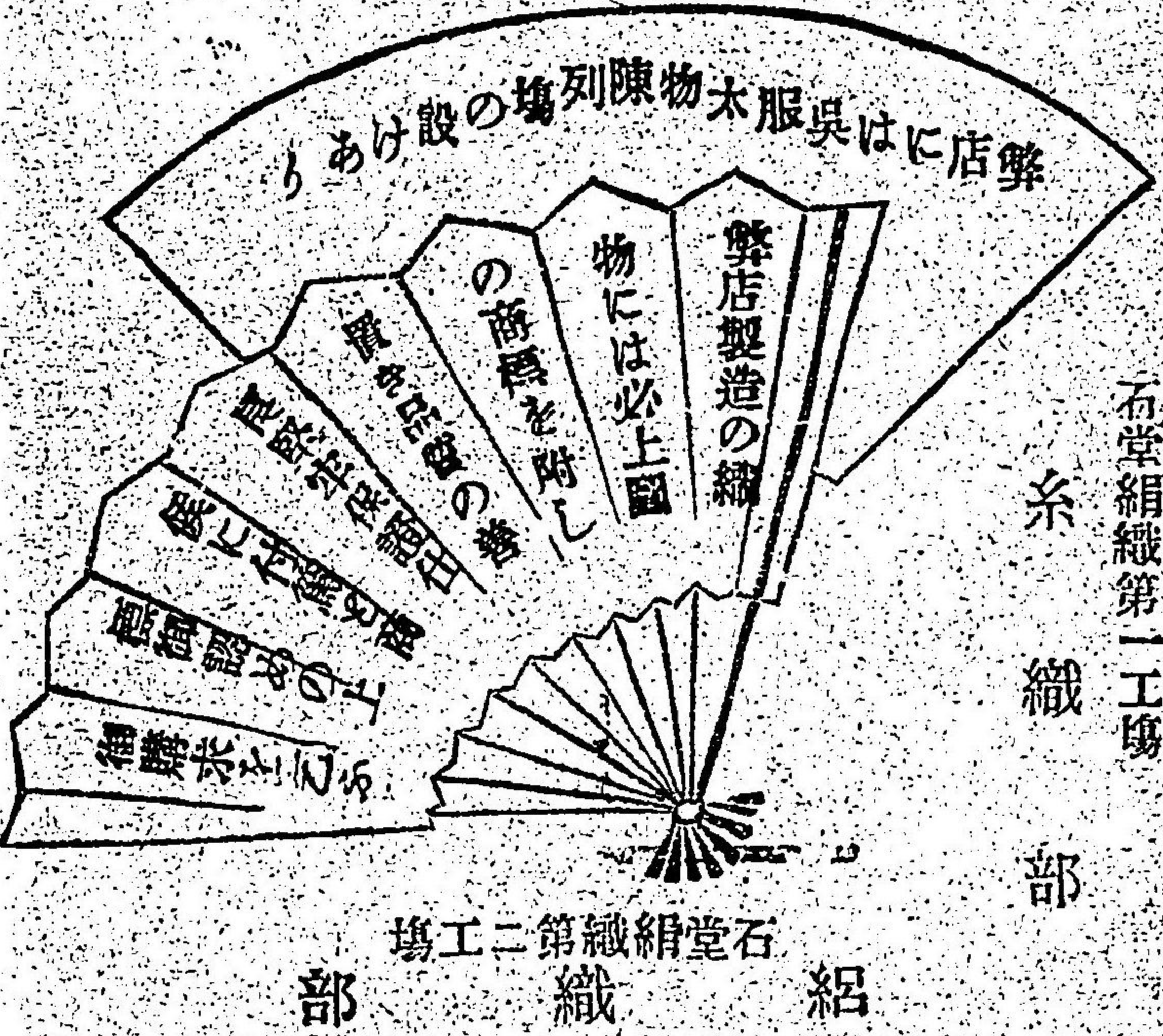
吉

鏡

福 若
島 松
縣 市
市 通
町 融

國產會津織物

勸業博覽會 第四回 國內 優等 狀	五二會全國 勸業博覽會 有功銅牌	創設廿五年 紀念博覽會 有功銅牌	商標	神戶五二會 勸業博覽會 一等金牌	會津地方 聯合博覽會 有功銀牌	博覽會
-------------------------------	------------------------	------------------------	----	------------------------	-----------------------	-----



石堂絹織第一工場
糸織部

石堂絹織第二工場
絹織部

岩代若松市 石堂商店

明治卅三年六月廿八日印刷
全 年七月十五日發行

定價金壹圓

著者兼發行人 村田克己

福島縣若松市榮町西分
五百五番地

印刷人 富田武雄

全縣全市桂林寺町
四十六番地

印刷所 富田活版所

全所

版權所有

明治卅三年六月廿八日印刷
全 年七月十五日發行

定價金壹圓

著者兼 發行人 村田克己

福島縣若松市榮町西分
五百五番地

印刷人 富田武雄

全縣全市桂林寺町
四十六番地



版權所有

印刷所 富田活版所
全 所

